

---

# ダン=ダンジール

狗獾

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ダン＝ダンジール

### 【Zコード】

Z3344F

### 【作者名】

狗糞

### 【あらすじ】

この世界には魔法や魔術が存在して、人間以外の種族もいる。コ  
レは僕と僕が小さい頃に拾つてきた家族兼友人達とのおはなし。  
（別名、主人公が溺愛されるお話）

## はじめに

これは、とある世界のとある国の、それこそ辺境にぽつんとあった小さな村。

そこで生活していた、平々凡々だった『僕』のおはなし。

世界には魔法が存在した。魔術があつた。

悪魔と契約した魔法使いがいて魔女がいて  
古の力を解放する事ができる魔術師が、陣を描き魔術を駆使して  
魔王が統括する魔族と戦っていた。

精霊は謡い神子はその声を人に伝える、聖女は想いを込めて祈りを  
捧げ

騎士はドラゴンと戦い、夜の一<sup>ミディアン</sup>族と呼ばれた吸血種族は伝説と語ら  
れていた…

そんな時代に『僕』は生きていた。

この村、ポリメシアで…

## 第一話

辺境にある小さな村、ポリメシアに僕達は暮らしてた。

僕には家族がいっぽい居る。

父さんと母さんは僕がうんと小さい時に病気になつて

「遠いところに行つたんだよ」つて、おじいちゃんに言われた。だから血の繋がつた家族はおじいちゃんとおばあちゃんだけだった。

でも他にも家族は居るんだ。血は繋がつていなければね。僕が小さい時に笛を拾つてきたんだって。

拾つてきたってなんか変な話だよね。

こげ茶色の髪と田の、すっぽり綺麗な女の子みたいな男の子のオーマ。

両親が居なくなつて僕が村はずれで一人でいた時、遊んでくれた子なんだ。

オーマも両親が居なくて僕と一緒にだつたから

おじいちゃん達にお願いして、一緒に暮らせるようになつたんだ。オーマは凄いんだよ。何でも一人で出来るし、寒い冬にはお家をあつたかくしてくれる。

魔法が使えるんだつて！すっごいよね！

あ、でもこれは秘密にしろつて言われたつけ…？

二人目はリセ。

散歩してる時にリセと会つたんだ。初めて真っ黒な髪と赤銅色の眸

を見たよ！

グズグズ泣いていたから、きっと迷子になつてたんだね。大人の人でも独りぼっちは寂しいもんね。

僕も迷子になつた時はオーマが迎えに来てくれるまで泣いてるし。お家に連れ帰つたらオーマはすっごく怒つたけど、でもやつぱり優しいから

リセが家出してきた理由を聞いて、一緒にリセがお家で暮らせるようになに、おじいちゃんにお願いしてくれたんだ。リセはオロオロしてたけど、のんびりな生活は好きみたい。時々だけ

「はーはつはつはーぞまあみるー我がいなくなつて存分に苦しむがいい！」

いかに我が雑務に忙殺され何度も自殺しようとした事かっー貴様らも味わえ！！」

とか、すつじく遠い目をして空に向つて叫んでるんだよね。その時のリセには誰も近づかないよ。

三人目はエルオーネ。

銀色と青が混じつたような色の髪と水色の眸をしてるんだ。でもすつじいのは背中に小さな羽根が付いてるの！

これも髪の毛と同じ色なんだ！初めて見たときは女人だと思つたけれど、男の人だった。

怖いおじさん達がエルオーネの服を破いたらから…でも僕が「やめて」ってお願いしたら、怖いおじさん達は何処かへ消えちゃつた。

顔は怖かつたけど、案外いい人達だったのかな？

怪我の手当をするためにお家に連れ帰つたら、おじいちゃん達が

びっくりしてた。

オーマやリセは僕の頭を撫でてくれたけど…まあ、怒られなくてよかつた。

あとね、エルオーネって薬師さんなんだって。村の皆からも歓迎されてた。

四人目はゼロム。

うん。すりごとくボロボロだったよ。しかも明るいところがダメみたいで

「ケとか生えてた岩の間に挟まつてた。お腹とかぱっくり割れて、びっくりしたし…

僕の散歩コースじゃなかつたら死んじゃつてたかもしれないよ、まったく。

急いでエルオーネを連れてきて、応急処置をした後、お家に連れ帰つたの。

人を助けたのに、オーマやリセは「ノスフュラーートー？」とか叫んで怒つてた。

ヒドイよね、エルオーネの時は怒らなかつたのに、コレって差別じゃない？

あ、ゼロムは一寸くらい死んだように動かなかつたけど、三日三夜はちゃんと起きてきたよ。

五人目はヨルン。

大きな剣を背負つてたんだ。なんでも旅の途中で道に迷つてたらしくて…

僕が村まで案内したんだ。そしたらお礼に今までのたびのお話をしてくれたよ。

すっごく楽しかった！僕ポリメシア以外を知らないから。

オーマトリセはムスッとしてたけど、エルオーネは引き攣った顔してヨルンの相手をしてた。

ヨルンはエルオーネが好きみたい。「マイハニー！」とか叫んで飛び掛ってた。

ゼロムは相変わらず昼間は部屋の隅っこで死んだように動かなかつたけど

夜には活き活きしだして、ヨルンとお酒飲んでたつけ。

意気投合を果たしてから数ヶ月単位でポリメシアに遊びに来てくれる。

僕にとっては歳の離れたお兄ちゃんみたいな人なんだ。

毎年毎年家族が増えて、今もすっごく楽しいよ。

今年もきっと楽しい出逢いがあると思うんだよね。

だから今日も僕は散歩に出かける。勿論一人で。だって僕はもう10歳なんだから！

さあ、緑の山々の中を風人<sup>ウイーディ</sup>のように翔けよう美しい水守<sup>ウンディーネ</sup>が歌う湖を眺めに！

## 第一話（前書き）

ぬるいですが、残酷な表現が入ります

## 第一話

今日もよく晴れた空が眩しい。

僕の暮らしているポリメシアは、最近とても良い気候が続いていて作物は豊かに実り、大雨や地震も無くいたつて平和な毎日だ。

そんな毎日が嬉しくて、僕はエルオーネが教えてくれた歌を歌いながら散歩をしている。

今日はちよつと崖の近くまで行つてみようかな？

崖の近くといえば、森の彼方エルデー・エルヴの国に続いているんだっけゼロムを拾つたところだ。懐かしいなあ。

あそこはとても不思議な事が起つて、おばあちゃんが言つてたつけ。

そういえば、ゼロムは何である場所に倒れていたんだらつ。

うへん。おばあちゃんが言つてたよつて不思議だ。

「…あれ？」

何だか此処だけ空氣が冷たい…冬に吹く風？みたいな。  
でも何だか、ソワソワ？ゾワゾワ？した感じがする。  
まるでオーマヤリセと会つた時みたいな…でも一人の時みたいに

ずっとじつと重たい感じはしないし、こつたいどつしたんだが？

その時、背後の草が音を立て揺れた。

一瞬ビクつとなつたけど、見慣れた金髪がふわふわ揺れて、それが誰だかわかつた。

「あ、ゼロムだー」

「ちび、ここに居たのか」

「もー！僕はちびじゃないよ、ゼロム達が大きいんだよーー！」

僕は10歳の子供だつて言つてたやんと前だつてあるのーー。  
ゼロムだけじゃない。オーマやリセモ、なんで僕の事を「ちび」つて呼ぶんだ？

あ、オーマは「おチビちゃん」つて呼ぶけど、一人のと意味変らな  
いよね。

エルオーネは僕の事を「ちつそこ勇者さん」「マルン兄さんは「ちみ  
つこ」

ちよ、これって皆僕の事をちびつていつてるじゃないかーー！

僕はふくつと頬を膨らませる。

エルオーネだけは別と思つてたのに…見事に裏切られたよ。  
ジトつとゼロムを睨めば、ゼロムは不思議そうに首を傾げてくれる。

いや、僕のほうが不思議に思うんだけど…

「珍しいね……お皿にゼロムが動いてるなんて、いつもは死んだように動かないのに」

「ん？ああ。そりや死ぬだろ。だつて儂、夜の一族だし」

「みでいあ？」

「ま、ちびには関係ないか。ポリメシアより先の国々には儂らはおらん。

つと、それよりもオーマが探していざ。なんか約束でもしどるんじゃないのか？」

約束？

僕、オーマと約束なんてしてなかつたと想ひつけど……

うへん……

「……」

「……」

「……ぴねや……」

「「……」」

「ねえゼロム。僕なんか今へんな悲鳴？が聞こえた気がする」

「奇遇だな、実は儂も…馬鹿っぽい声が…グあつ？！」

「ゼロムっ？…」

いきなりゼロムが吹っ飛んだ。

それからカエルが潰れたような悲鳴を上げて「ビタソッ！」って近くの木に張り付いた。

あれ…？なんかゼロムの鳩尾辺りから、木の枝が生えてるんだけど…枝の先に赤黒い、グロテスクな塊がひくつきながら突き刺さってるしかも、なんだかゼロムの服に赤いシミがまるでリセにどつかれてお腹に腕を差し込まれた時みたいに、ピクリとも動かなくなっちゃった。

「ゼロム？」

「ふきやあー」

僕の呼びかけに答えたのはゼロムじゃなくて、僕の背後、さつきまで僕が通ろうとしていた進行方向から、ふよふよヒラヒラした布にくるまつてこいる小さい塊から聞こえた。

よくよく見ると、なんか赤ちゃんっぽいなあ…

「え～と。 もみは迷子?」

「ふう?」

首をかしげて僕を見上げる小さい子。

喋れないから赤ちゃんでいいかな。 いいよね。

抱っこしようっと手を伸ばしたら、今までふよふよヒラヒラとしていた布が  
ジャキンッと突然鋭い刃に変った、と思つたら目の前が真っ赤になつた。

「あ、ゼロ、ム?」

「馬鹿者!—不用意に手を伸ばす奴があるか!—?」

ゼロムが怒鳴りつける。僕と、赤ちゃんに向つて。  
目の前が真っ赤になつたのは、ゼロムが僕を抱えて片腕を突き出していたから。

その突き出したゼロムの腕に、赤ちゃんがくるまつていた布だったものが突き刺さっていたから。

ゼロムが僕を庇つた。

僕はいつきに自分の体が冷えるのが判つた。

「つ?...せ、ゼロム!手が、腕がつ!...血がああ?...」

「…儂が串刺しだされた時はほおつとじてゐるへせこ、なんで今は流してとるんだ?」

「へ、くじやし?」いつゼロムは串刺しになつたの?って、それよりも手…腕えつ…」

ゼロムは何を言つてゐんだろう??

さつきは木に張り付いてただけじゃないか、まつたく。

でも僕を気遣つてくれたんだろうね。

冷え切つていた体が熱を取り戻す。今僕がやるべきこと  
一先ず僕は持つていたハンカチをゼロムの腕に巻きつけて止血をす  
る。

急いでエルオーネに止血みつの薬を貰わなくちゃ。

「あ、きみもいきなり人を刺しちゃダメだよ…」

「ふきや?」

「おじいちゃんが言つてた。刺さつどこのが悪いと死じゃうんだからね!」

「ふつ…」

「きみ、下手したらゼロムが死んじゃつたかも知れないんだよ?  
人を殺すのはいけないんだよ!…といつか、僕の家族を傷つけない  
で!!」

「う…」

僕の思いが通じたみたいで、赤ちゃんは漂わせていた布にくるまり

なおした。

そして僕に手を伸ばしてくる 抱っこしきつて事かな？

あ、ひょっと可愛いかも…

僕は赤ちゃんを抱っこする。

わあ。軽いなあ。お向かいの家に居る猫のママみたい。  
つ、連れて帰つていいいかな？迷子だし、連れ帰つた方がいいよね。  
うん。連れて帰ろう。

「僕と一緒に我が家に行こう？独りぼっちは寂しいしね。  
ね、ゼロムもいいでしょ。赤ちゃん一人なんて危ないよね。うん  
決まり！」

「寧ろそいつ連れ帰つた方が危ないぞ」  
「何言つてるのー！こんなに可愛いのにー！」  
「いや、だて、儂、そいつに殺されたし…」  
「生きてるじゃん。死んでないよ。未遂だよ」  
「いや、だから儂は夜の一族だから。」  
「もー。子供だけじゃ危ないんだよ、この山」  
「それをお前が言つのか…いや、もういい。好きにしてくれ」

僕は赤ちゃんを抱っこしたまま来た道を戻つていった。  
ゼロムもノロノロと僕の後を付いてくる。

帰つたらゼロムの担当でこの子の紹介をしなくちゃね。

「儂、何度もリセに殺されとるんだがなあ。しかも串刺しだの絞殺だの

もつぱら魔術を使われてじわじわ斬られるんだけど… オーマは助けてくれんし

エルオーネは笑って薬差し出してきて、一向に助ける気配などないしな

それにして… 風人の幼児など初めて見た よくよくちびは多種族に好かれるな」

## 第一話（後書き）

主人公ちび（仮）は基本のほほんとしています。  
ゼロムはヘタレです。やられ役です。  
頻繁に殺されています。でもちび（仮）には気が付いてもらえてない  
です。

ポリメシアの土地は比較的温暖な気候だつたりする。だからシャシャイや牛や馬と色々な動物を飼つている。

シャシャイは毛皮がもこもこしている愛嬌のある草食動物で、シャイの毛皮から糸を紡げる。

誰でもお手ごろに手に入るため、皆が買つていぐ。収入源の一つだ。牛からは乳を搾り、チーズを作つたりそのままミルクを近くの村まで売りに行つたりして生計を立てている。

馬は交通手段。ポリメシアは辺境もいいところで、近くの村でも早馬で4日はかかるてしまつ。

そして短いながらも冬はある。とても寒く冷たい冬が…

「でも今つて冬じゃないんだよねえ」

「何か言つたかいおチビちゃん? ボクのお話を聞いていたの。いや、聞いていなかつたね」

ゼロムとは違つフワフワとした焦げ茶色の髪と、同じ色の眸を持つオーマが

腕を組みながら僕達の前に仁王立ちしていた。

女の子みたいな顔で怒られてもちつとも怖くないよ…。

なんていつた三件隣のお兄さんが半年ほど帰つてこなかつた

のは記憶にまだ新しい。

帰ってきたら来たで、一度と僕のお家には顔を見せに来なくなつた。

うーん。部屋の中が寒い…  
窓とかに霜がはつてゐるんだけど、これってやつぱり…

僕は抱っこしてこる赤ちゃんが寒くないように、ふわふわヒラヒラした布を撒きなおしてあげた。

そしてしっかりと抱えなおす。赤ちゃんも寒かったのか、僕にしがみついてくる。

ちょっと痛かったのは気にしないでおこう。

それよりも、僕の横に居るゼロムは既に顔が土氣色になつてゐる。ゼロムってオーマやっこためにめっぽう弱いよね。一番年上っぽいの。

「えっとね、オーマ。何で怒つてるの？」

「『』『』何で？今おチビちゃんは何でかつてボクに聞いたの？」

「えつと…」

「ゼロムがヘタレなのは判つきっていたけど…よくも厄介を持つてきてくれたね。

使えないにも程があるよ。まったく…吸血鬼はコレだからダメなんだ。

絶対的支配を促し至高にいたる定めの夜の一族とか名乗つといで  
そのクソガキが風の皇位精霊の華人ミディアン・スフエス・ファ・ナード・ザウーディだつてのにも気付かないの？  
最近やつと日中活動できるようになったから、てつきり  
そこそこ出来るヤツと思ってたのに。まったく、全然、どうじよ

うもない程、きみはダメダメだねー!!

「??.?.?.?.?」

「そこまで全否定しなくても…吸血種族われわれに対してノスフュラートとは化け物に等しい敬称だ。

悪魔おまえやリセにこそ言われたかないぞ。しかも僕は貴族ではなく平々凡々の平民だ!

支配側ではなく、虐げられる側だつたんだぞ! すんごい力があつたら逃げてなんかくるか!!

だいたい夜ミディアムの一族内での差別が激しくなってきたし、僕だつて好きでこんな能力を

「

え…と二人は何を話してるんだろう?

なんかいつものように専門用語ばかりが出てきて、僕には全然判らないや。

兎も角、オーマはこの赤ちゃんが誰の子供だか知ってるみたいだね。ゼロムも知っているのかなあ? 微妙だなあ。

だってゼロムの土氣色だった顔が今度は真っ青になってるんだもの。そういえば、ヨルン兄さんがゼロムは『蠟人形が生きているみたいだ』とかつて言ってたつけ。

…ロウニンギョウウって何?

う~ん。

「お、珍しいな。ちつさい勇者さんがオーマに説教されてるなんて。  
明日はゼロムが盛大に木つ端微塵にされて血の雨が降るかもなあ、  
はははは」

のんびりとしたテノールの声。でも言っている内容が過激なのは、  
彼がとても冗談好きだからだよね。

背中の羽をパタパタさせながら、綺麗な青銀色の髪を一つに結んで  
るエルオーネが奥の部屋から出でてきた。  
エルオーネの肩にはヒーシャがちょこんつて乗っかってる。  
ヒーシャは真っ白な小鳥でエルオーネの最初の相棒なんだって。

「エルオーネえええつ！洒落にならんからやめれ！…儂とて痛覚は  
あるんだ！！」

「殺したって直ぐに復活するじゃない。不死者の特徴でしょ」

「オーマの鬼畜つーサドつー化け物と呼ぶなー人間の皮を好んで被  
る物好き悪魔め…！」

「やつぱつもつこつぺん、つづき。あと四回へらい死んどくっ！」

「すいませんでした！！！」

うわあ。ゼロムが土下座している 本当にオーマに頭が上がらないんだな。

なんか今も色々言われてるし。まあ、いつもの事だけど。

「ははは。あれが伝説に語られる一族とは案外伝説なんて当てこならないもんだな」

「エルオーネ、伝説って何?」

「いや。ちょっとね。昔から、それこそ俺や君のお祖父さんが生まれるうんと昔から  
オーマたちゼロムたち  
悪魔と夜の一族は敵対してるんだ。あ、リセもかな?  
でもオーマもゼロムも、リセだって皆優しいだろ?本当は敵対しなくても生きていけるんだよ」

エルオーネは困ったゆうに笑った後、僕が抱っこしている赤ちゃんを見た。

そしていきなり固まつた。それはもう『ピシイー!..』って音が鳴るくらい。

「エルオーネ?」

「ちつとも勇者さん、この子をどこからかっ攫つてきたんだ?」

「へ?」

## 第四話

「か、かつ攫うって……僕はただ山に置き去りにされてたから」

「置き去り、ね。比較的魔物が居ない山。でも盗賊は時々入り込んでいるだろう？」

そんな物騒な所に赤ん坊を置き去りにするなんて考えられないな。しかもこの子はただの赤ん坊じゃない。ちつさい勇者さん、見ててなんとなく気付いただろ？」

「あ、うん。ぐるまつてる布が、」

「そう。この布自体が魔力でできている。とても濃密で清らかな

風だ」

「風？この赤ちゃんは精霊の加護を受けているの？」

「あー……うん。ゼロムは……いや、オーマは何か言つてなかつたかなーでつて？」

「？」

「（ゼロムってエルオーネにも頼られてないんだ……）えーと、しるふふあむーとつて言つてたと思うな。あ、あとじつは一でつて」

「……それは、シルフェス・ファ・ムート ザウーディ風の皇位精霊の華人と言つたんだと思うぞ……風の精霊の幼児だ」

「風の精霊の……え？！じゃあワイーディ風人の赤ちゃん？！？」

お話なんてどうでもいいといつ風に、僕に抱っこされている赤ちゃんはエルオーネを興味津々で見ている。

まあ、エルオーネは綺麗だし背中が大きく開いている服を着てるし。別に露出狂じやないよ。エルオーネの背中には30センチほどの翼があるからなんだ。

髪の毛と同じ綺麗な青銀色。たしか有翼人って呼ばれててとっても少ない一族なんだつけ。

すると、ふよふよヒラヒラした布がしゅるしゅるとエルオーネに伸びられた。

ゼロムの時みたいに攻撃をする訳ではなさそうだからそのまま見てたけど、次の瞬間エルオーネが悲鳴を上げた。

「いたたつ！..」

「あわわわ？..」

「あやはつ！..」

「羽を引っ張るなつ！痛つ！..」

「ふきや、あやはつ！」

「引っ張なつてんだろうが、クソガキ！？」

「ビクッ！」

「ふえ、ううう…ふええええええええええ…！」

赤ちゃんが思い切り泣き出した。

僕は抱きなおして、よしよしと頭を撫でてあげた。でもまだ泣き止まない。

ふよふよヒラヒラ漂つていた布は、今ではペタんと床に落ちてしまつた。

エルオーネは一度と引っ張られてなるものが、ヒドも壁に壁際に寄つていた。

「やーいエルオーネが小さいの泣かした~」

「なつ?ー!オーマ、ゼロムーーお前ら揃つて指差すなーー!ー!

「ふええええええええ

「あわあわ、泣かないでよお

いつの間にか怒られていたゼロムと怒っていたオーマが、エルオーネを批難していた。

でもエルオーネを批難するよりも僕の方を助けて欲しいなあ。

僕、赤ちゃんのお世話なんてした事ないよ。しかもこの子は精霊の赤ちゃんなんですよ?

魔法や魔術なんて、僕は皆みたいに扱えないよ。  
もーどうしたらいの?

「おやおや、賑やかだねえお前さん方

「「「「うるさいやつらがいるんだよ。」」」

僕らの声が重なつた。

ああ！家か二た！おはあせやんか居た！

おばあちゃんはよこらしょつと抱えていた籠をテープルに置いて、  
僕の方へと近寄つてきた。

そして、風人の赤ちゃんに微笑みかけ、ひょいつと抱き上げた。赤ちゃんはふえふえ泣いてはいるものの、嫌がる事はなくおばあちゃんにあやされていく。

「しかしそれ、よくよく坊やは色んなのを拾つてくるねえ。  
オーマヤ、今回はどんな子を坊やは拾つてきたんだい？まだほん  
の赤ん坊じやないか」

「えっと…風人の  
ウイーディ  
加護持ちだよ、おばあちゃん」

「え！ オーむぐつ」

「違うよ。精霊の赤ちゃんだよー」つて言おうとしたらいざ口元に口を塞がれた。

何時の間に僕の後ろに？

何だかい」セセロムとかオーマとか、あれ後りセモ神出鬼没なんだ

じゃなくてー

ゼロムを睨みあげれば、困ったように笑つた。そして小声で僕に耳打ちする。

「（華人はとても珍しいのだ。それこそそちらへんに浮遊している精靈よりもな）」

「（だからってウソつく事ないじゃんー）」

「（もしこの村に華人が居ると噂が広まれば、盜賊とか騎士団とかがわんさか来るぞ）」

「（精靈の赤ちゃんってそんなに珍しいの？）」

「（華人はな。ものすつごく偉い精靈の赤子だからな）」

「（領主様の！」子息みたいにな？）」

「（高位精靈の更に上、皇位にあたる…つまり王様の子供だ）

「（……）」

「あらまあ、随分と凄い子なのねえ、精靈さまの加護持ちなんて！ヨルンと同じだわねえ。あの子の様に大人になつたら強くなるかもねえ。

あら、じゃあ親御さんはきっと心配しているでしょうね、何処に居るのかしら？」

「加護持ちつて、争いことに巻き込まれやすいから、ね。

多分この村に置いてくれつて言ひ意味で、おチビちゃんに任せたんじやないかな～」

「あらあら…じゃあ親御さんが此処に、この子を迎えて来るまで預かりましょつか」

「あー…うん。そーだね」

僕とゼロムがヒンヒン話してころり、オーマがおまちちゃんを説得してくれた。

エルオーネは背中が隠れるよつてショールを羽織りなおしてたし。

「坊や、この子の名前はなんていうんだい？」

「へ？ 僕知りなーよ、おまちちゃん」

「んまあー預かってきたんだうつ？…ちやんと名前を聞かなかつたのかい？」

「（あわわーおばあけやんに怒られる？…）え、えっと、や、そりだ、み、ミルギス…そのミルギスこじょ」

「…」

「…」

「ふあー。」

「おや、ミルギスって名前なのかい。じゅあミー坊、泣いてお腹がすいたろう？」

「いまミルクを温めてあげよしお。せひ、お前さん達もー・パイを焼いてあるからお食べよ」

おばあちゃんを怒り立てる怖いからね、何とか乗り切れてよかつたー。

「… つたりあれ、畠じつしたの？」

「おチベちゃん」

「ちつやこ頃者さん

「うび……」

「「「なんでお前をつくるかな……まあ」「」」

僕はまた何かやつちやつたのかな……？

## 第五話

「皇位精靈　　それは精靈の王様、若しくはそれに連なる精靈に『えら得る称号』。

連なるって事は、精靈の王妃様、王子、王女。片親が精靈王でも可。

一般的には低位・中位・高位、おまけに帝位なんてのもある。はい、おチビちゃん復唱！…」

「へ？！えー、と…皇位精靈とは　　王族っぽいので、位がいくつかあって」

「オーマ。ちつさい勇者さんは俺達と違つて魔術等に詳しくないんだ。

一気に詰め込むのは逆に混乱しか招かないだろう。特に悪魔おまえと人間の知識量は違いますぎる

「だからって、『何も知らなかつた』ですむわけないでしょ！

基本、人間は物理的にしか束縛される事は無いけど、多種族は違う。

程度はあれど、言葉一つで支配されてしまつ。特に銘を『えられる事、逆に奪われる事』

「ん、まあ。皇位精靈の、まだ名もない華人ザウーディだしね…」

何だか二人が難しい話をしている。僕は風人ワイヤーデイの赤ちゃん、ミルギスにひどい事をしてしまつたのかな？あんなにオーマが眉間に皺を寄せるのって滅多にないし。

エルオーネが言葉に詰まる事だって、マルン兄さんが迫った時くら  
いだつたのに…

僕がもんもん悩んでると、ゼロムがお茶を僕の前に出しててくれた。  
ちゃんとお砂糖とミルクも入れてくれているし、おばあちゃんが焼  
いたパイも取り分けてくれた。

そして、僕の隣に座つてお茶を啜つている。

「ねえ、ゼロム。僕はミルギスにひどい事をしちゃったのかな？」

「ミルギス　いや、ひどい事ではないぞ。ただ、お前は知らな  
かつたんだ」

「でもオーマは知らないじゃすまされないって、言ったよ？」

僕はパイをつづく。そつくりと音を立ててパイ生地が割れて、中か  
らトロリとベリーが垂れた。  
うん。いいにおい。

パクリと一口食べて、口の中にほんわりと甘酸っぱいベリーが広が  
る。

おばあちゃんの作るパイはおいしい…おいしいけど、僕の気持ちは  
晴れない。

「僕が勝手に名前をつけて、ミルギス自身それが自分の名前だった  
思つたら

ミルギスのお父さん達、すつさぐ怒るのかな？本当は自分達が名  
前を付けたかつたんだって…」

「……ちび、お前はあの子を庇つたいたい？」

「ちゃんと、お父さん達のところに返してあげたい。それから、あ  
やまりたい」

「名前を『』えた事か？」

「うん。僕の名前はお母さんが一生懸命考えて付けてくれた、って  
おじいちゃんが言ってた。  
だから、ミルギスのお母さんやお父さんだって、生まれて来た子  
の名前  
すついぐへ考へてたと思つんだ。だから、僕が勝手に名前を付けち  
ゃつてつて思つと」

「だが名前がないところのは憐れだろつ。精霊とは名を重んじる。  
名が無いのとあるのとでは力の発揮方が違つてくるのだ。  
お前があの赤子に名を『』えた時、ミルギスは嫌がつたか?  
拒絶などしなかつただろつ。お前を信用したのだ。  
精霊は赤子といえど、判つているものなのだ。己を服従させるか、  
否かを」

「ふくじゅう……それって、命令するつてこと？」

「そうだ。だがお前はミルギスを服従させ、命令を聞かせたいと思  
つたか？」

「そんな事！そんな事全然思わないよ……！僕はただつ

「ふつ。ならば問題などない。ちび、よく覚えておけ

「ゼロム？」

「名には祈りと祝福を捧げるものだ。そして名を呼ぶ時その者は、確かに存在する。

お前はあの赤子を、ミルギスを束縛するために名を与えたのではないだろう？

もし、名を与えた事が重荷になるのならば、それはミルギスに対しての差別だ。

精靈だから、人間だから、そんな隔てなど言い訳にしかすぎん。

誇れ 名の重さを知り苦悩したことを。儂は、そんなお前を愛おしく思うぞ」

がしゃん！

僕は今までパイをつついでいたフォークを落とした。

ゼロムはまるで、ひ孫でも見るような目をして僕の頭を撫でた。あれ、ゼロムってこんなに大人っぽかったかな？なんかいつも、リセとかオーマにぎったんぎったんにされてたのに…

「ぜ、ゼロ、ム

がしつ…！

「あ、  
「ぐつ…。」

「なに、しようとしたの、ゼロム」「少し、向こうで話そうか、ゼロム」

「な、何で儂がつ ぐえ?！」

オーマがゼロムを掴んだ。エルオーネがゼロムの口に何かをねじ込んだ。

ねえ、オーマ。何でゼロムの首に手をかけて持ちあげてるの?  
片腕で持ち上げてるけど、ゼロムって意外と重いんだよ。

エルオーネも何で薬瓶を6本も構えてるの?今せっせ、ゼロムの口に  
入れたのって…

それに薬瓶の色とか、ものすごく毒々しいんだけど、何に使うつもり?

「二人とも、ゼロムが

「おチビちゃんはおばあちゃんの様子見に行つてきてよ  
「ミルギスがぐずつてないか、様子見てこいや、な

「え、あ、うん。はい」

う、頷くしかできなかつた。二人ともいつたいぢうしたつて言つんだろ…

うん。まあ一応心配だからミルギスの様子を見に行くけどさ…  
僕はおばあちゃんが居るであらう寝室に向つた。

案の定、おばあちゃんはミルギスを抱っこして、ミルクを飲ませていた。

ミルギスは相変わらず、ふきゅふきゅと顔を立ててゐる。精靈の赤ちゃんの鳴き声って、変つてゐるんだな。

「おや、坊やは一一坊が氣になつたのかい？」

「あ、うん。」

「そうかい。じゃあちよつとミルクを上げてくれないかい。あたしゃ少しおじいさんとセの様子を見に行つてくるよ。そろそろ商店から帰つてくるはずだからね。一いつばせね

「はーー」

そう言つて、おばあちゃんは部屋から出て行つた。

僕はミルギスを抱つゝ、少しぬるにミルクを口元に持つていた。

ミルギスはふきゅふきゅミルクを飲んでゐる。

「あのね、ミルギス。僕は君が精靈だから名前を付けたんじゃないんだよ

「ふはつ。ふえ？」

「ゼロムが言つてた。名には祈りと祝福を  
為に付けたんじゃなんだ」

きみを縛り付ける

「ふきゅ」

「きみのお父さんやお母さんがきみと会えるまで、このお世でいて

くれないかな？

僕やゼロムも、オーマやエルオーネだつて、おばあちゃんも… きみを歓迎するよ、ミルギス」

「ふきや…」

あれ？

なんかプルプル震えてる… ビンしたんだるーっ！

はっ、もしかしてミルギスって名前がやっぱり嫌だったのかな？！  
ビ、ビうじょう、なんかすつじくいい名前とか思い浮かばないよ…

「み、じゃない、ええと、名前嫌だったの？で、でも他の名前とか  
はつ」

「ふええええええええ…！」

「わああ…？」

「ぶわあ…」

ミルギスの泣き声に反応して、部屋の中に風が生まれる。  
ベットがたがた震えだし、置いてあった花瓶が天井に当たつて砕けてしまった。

しかも窓にもひびが入つて… 「わあ、修理が大変だよ。  
僕はミルギスを抱えているから被害とか無いけど、っていうか  
ミルギスがくるまつてた布がふよふよヒラヒラと僕ごとミルギスを

包んでいて

飛び交っている破片から守ってくれてるみたい。

「うーん、どうしたの?」

「ふきやあああ、ふええええ――――――」

「ちび? どうした、何が起つておるのだ?」

天の助け！もとい、リセだ！

「えーと、大丈夫！多分だけど！！」

「当たらないん？」

リセが言うと同時に扉が吹っ飛んだ。

僕に当たりそうになつたけど、ふよふよヒラヒラ漂つていた布が  
またしてもジャキンっ！と硬化して扉を叩き落した。



## 第六話

「り、リセー！」

「ふむ。ちび、怪我は…何を抱いてあるか？」

「えっとー。あ、あは…」

何でだろ、何故カリセにはミルギスを見せちゃいけない気がする。さつきオーマに怒られた時よりも、ミルギスは僕の服をギコツと掴んでる。

ふえふえ泣いてたのに、今では声を上げないでプルプル震えてるだけ。

「何ぞこの有様は？今し方隠したモノと関係がありや？」

「え、えへ。ちょっと

「精靈　　<sup>ヴィーディ</sup>風人かや？」

「あーあのね、」

僕が何かを言う前にリセが手を伸ばしてきた。

そして、僕達を守るように、硬化した布がリセに向って特攻する。

こいつやって見ると、何だかりセが患者のよつて見えてくるから不思議だ…

じゃなくてっ！

「リセ、あ、あぶな、」

じゅぼつ

「へ？」

「フン。この程度で我の征く手を阻もつなど、笑止！」

も、燃えた？燃え尽きた？ミルギスがくるまつていた布。エルオーネ曰く、濃密な風の魔力で出来ていた布が、あつさりと燃え尽きました。

右半分だけしつかりと出ているリセの顔には、蛇の鱗っぽい模様が浮き上がっている。

そして普段赤銅色の右目は、今は鮮やかな灼熱の色をしていた。

うわあ……リセがゼロム相手にどつく時と同じ状況だし。

これって、僕がリセにどつかれるのかな……あ、ちょっと目の前がかすんできたよ。

冷や汗が僕の頬をたぐりと流れる。  
いや、本当に無理。ムリムリ。

「ほお……焦獄の火蛇と謳われた我と敵対するなど、ゼロムと等しく愚かぞ」

「ふえ……やー」

「しょー」「べのかじゅ?えつと、」

んーっと……こせはゼロムを馬鹿にしてるのはわかったよ。うん。相変わらずゼロムってばヒエラルキーの下に位置づけられるんだ。

ミルギスもなんとなく不満げな声を上げてる……「や」とか最後に言つてるし。

「なんだかゼロムが可哀想だな……」

「ちび、あの愚か者、お前になんぞ不埒を働いたとか。オーマは別段変りないが、エルオーネが便乗するなど由々しき事ぞ?」

リセが視線で「何をされた?」って問掛けたけど、僕自身、別にゼロムに何かされた覚えはないよ?

強いて言えば、ひ孫でも見ているような田で、頭撫でられたくらいだよ。

ふらり いやな事をされた覚えはないから、僕は首を横に振つた。

「真かえ?」

僕って信用ないなあ……

「うん。えっと、ミルギスの名前を勝手に僕がつけちゃって……  
本当はそれは良くない事だつてオーマが言つたんだけど、でもゼロムは平気だよって」

「銘なを与えた？」

「えっとね、怒らないで聞いてくれる? といつか、家が燃えちゃうから魔法はやめて」

「我のは魔術わからぞ。魔法とは悪魔や、悪魔と契約せし人間のみが使うものだ。魔族わからは違つ」

「? まいいや。兎も角、ミルギスは皇位精靈の赤ちゃんなんだつて。

それでオーマが、僕が勝手に名前を付けると服従させちゃうかもしないって思つたんだと思つ。だから怒つたの。

でもゼロムが『名には祈りと祝福を捧げるものだ』つていつから、僕はこの子が幸せになれるように……

精靈だからとか、そういうのじゃなくてね。でもこの子はミルギスつて名前が嫌いみたいなの どうしよ~?..

僕は腕の中でじつとしているミルギス…ゴメン、名前が思い浮かぶまでミルギスつて呼んでいいかな?  
ミルギスを困つたように覗き込むけど、逆にじいと見上げられちやつたよ…

リセに攻撃した時はどうなるかと思つたけど、なんか収まったみた

い。

まさか「ゼロムに等しく愚かだ」って言われたから大人しくしてい  
るわけじゃないよね？

いつの間にカリセの眸は赤銅色に戻り、肌からも蛇の鱗のような模  
様も消えていた。

良かった。家の中が火事にならなくて…

リセはゆっくりと僕達に近づく。そしてミルギスに何かを囁いた。

「シルフェス・ファ・ムート  
風の皇位精霊 ザウーディ  
成る程のお。我を恐れるのは然り。  
風の御子よその子が汝を守護する限り、我は汝をを喰らひ事はせ  
ぬ。

そう怯えるな。しかし逆にその子に刃を向けるのならば、我と他  
の者達が汝に制裁を下えるぞ」

僕とりセの距離はすぐ近いのに、どうして声が聞こえないのか…  
これも魔術なのかな？僕に聞かれたくない事なのかな。

「ふあ！」

リセが何かを言い終わつた後、ミルギスが返事をした。  
うん。何か通じるものがあつたらしい。

「ちび。この御子ミルギスと言つたかえ？汝に『えられし銘を嫌つ  
てはおらぬようだ。  
單に、精霊食いの魔族と魔族の氣配に懼いておつただけ故、気に  
するでない』

「え…ミルギス、オーマトリセが怖かったの？舐めさしあくいい人なのに」

「悪魔や夜の一族そして魔族は、極端な話精霊よりも力がある。あれだ

立場的に我々は捕食する側で、ミルギスは捕食される側。詰まる所、格下ということだ」

「格下？でも、ミルギスはゼロムの事フツ飛ばしてたよ。始めてあつた時に

ゼロムってミルギスより強い？

でも、ゼロムちょっと不幸体質の一般人なんだけど…  
しかもミルギスはほっぺを膨らませて「ふいー」と不満げな声を上げてる。

うん。本当にゼロムが可哀想に思えてきた。今度こつそりお酒でも飲ませてあげよう。うん。

「…あの愚か者めつくづくへタレなのだな。まあ良い。

今後ここについて他の者達と話し合う。

ちび、ダリアとグレーンには追々我が伝える故、暫し部屋に入らぬよう言つてくれ

「はーい」

ダリアはおばあちゃんでグレーンがおじいちゃんの名前。

リセは会った時からおじいちゃん達を名前で呼んでいる。あ、ゼロ  
ムもだ。

リセはパチンッと指を鳴らし、魔術で扉を直してから部屋を出て行  
つた。

「ミルギス　名前を気に入ってくれてありがとう。これからよ  
ろしくね！」

「ふきやー」

僕もミルギスを抱っこしたままリセの後を追った。

## 幕間の家族会議

辺境にある石造りの家。しかしその家は、辺境にあるにしては大きかつた。

他の家と比べても一周り程大きさが違う。村長の家ではない。ごくごく普通の農民が暮らしているのだ。

そう…

異種族にめっぽう愛されている一人の少年が居る、平凡な農民の家だった。

周りの農民から彼らが虐げられる事はない。もし万が一にでも少年とその家族を虐げようものならば

何の前触れも無く少年達を虐げたものに確実に報復と称した、人間では絶対に止められない天災が降り注ぐ、だろう。

例え魔物討伐隊や王国最強騎士団と名を馳せるものが立ち向かったとしても、彼らを止める事は出来ない。

まあ兎も角、『大量虐殺上等』そんな物騒な代名詞の彼らが平穏に平凡に

ほのぼのと暮らしているのは、少年とその家族がほのぼのしているだけではなく

ポリメシアという辺境にある村自体が、とても平穏で平凡だからだろう。

村人も彼らが異種族であつても構わないようだ。

寧ろ彼らが異種族であると気付いている村人は居ない。

そう

五年程前まで、膨大な魔族を率いて人間を惨殺し魔族の領域を広げていた元魔王の一人とか。

悪魔や魔族も一目置いている神都。そんな神都がブラックリストの

上位に載せている高位悪魔とか。

今では伝説として語られている最強の不死の一族とか…

まさかそんな連中が「平和が一番」と言わんばかりの辺境の村、ポリメシアに居るなど誰も思いはしないだろ？

そんな人外魔境な彼らが溺愛している少年の家の一室のことだ。橢円形のテーブルに四人が向かい合つように腰掛けている。

「はい。これから『第五回、拾われてきちゃったヤツ』についての会議を始めます」

一人はフワフワのダークブラウンの髪と同じ色の眸。アルトヴォイスの持ち主。

こここの家主が目に入れても痛くない程、溺愛している孫が初めて拾つてきた人物

オーマだ。

「まず議題一。おチビちゃんが異種族

それも何故かいつも厄介な立場の人物を拾つてくる。

その事について意見を出してほしいんだ。今後の対応策としてね

…

テーブルに肘をかけたまま両手の指を絡めて溜息を吐く。  
その姿だけならば美少女が恋わざらいしている図、に見えなくもな

い。

しかし実際は、神都がブラックリストの上位に載せている高位悪魔だつたりする。

「今日は殆ど問題が無いと思つぞ」

黙つていれば優雅、麗人、男性の美そんな名詞がぴったり、金髪碧眼の絶世の美青年（村人談）ゼロム。

確かに美しいが、実際はヘタレ。溺愛している少年にすら可哀想と思われている。（本人は知らない）

そんな彼でも伝説と語られる一族なのだ　　が、一度たりともゼロムの本気を見た者はない。

それで何故ゼロムが伝説の一族だと判明したか？  
何度もオーマやリセが殺しても復活し、死なないからだ。そして朝日を浴びると苦しみだす。

（今では氣合と根性と、オーマやリセに鍛えさせられた忍耐で陽光を克服中）

典型的な夜の一族、伝説の一族の特徴と同じなのだ。

「問題が無いわけないでしょー！判つてるの？！」

「シルフェス・ファーム」  
風の皇位精霊なんだよ！銘があつて華人じやなかつたら、此処までしないって」

「別に使役するために名を「えた訳じやなし、ちびは良い子だろに

「そんなの判つてるのーだーかーらー…」

「ミルギスは別にいいんだ。問題なのは精霊王の方だろうね…  
ま、あの人はおおらかだから、今回はゼロムの意見に俺は賛成かな。そこまで重視しなくて平氣だろ?」

青銀の髪の色と水色の眸。髪と同じ色の羽根を持つ稀な有翼人、エルオーネ。

三番目に少年に拾われた御仁だ。物凄く女顔（美形）だが性格は漢前といつてよい。

長い青銀色の髪を後ろで一括りにしながらゼロムの意見に賛成した。

「オーマが懸念しておる事は、精霊の事情ではなかろう。  
ちびになんぞ手を出しそうものならば、我らが直々に断罪してくれよう。

しかし問題は人間の方であろう? 風の皇位<sup>シルフェス・ファ・ムート</sup>精霊の御子があると知られれば、黙つている国はない」

漆黒の髪に赤銅色の眸、今は浮き上がりせてはいないが、その肌には蛇の鱗が刻まれている。

五年程前まで、膨大な魔族を率いて人間を惨殺し魔族の領域を広げていた焦獄の火蛇<sup>イセルドウガアル</sup>と呼ばれる元魔王。

彼らが溺愛する少年が二番目に拾つてきた人物、リセだ。

「人間つてそんなに強欲なのか?」

ゼロムが首を傾げ、不思議そうに聞いてくる。

オーマは眉間に皺を寄せ、まるで想い人相手に告白前に玉砕したような表情を浮かべた。

「ゼロムつて馬鹿だよね。何見てきたの？君の住んでた場所つてどんなトコ？」

「黄昏トランシルヴァニアの都か？殆どの人間は夜ミナヤンの一族が支配していたな。怯えた目の人間が多くた。時々貴族に楯突く人間も居たが身内も含め殺されていた。

何かを欲する事などあまりしない生き物だと思つていたんだがなあ…ちびだつて無欲だし」

「ゼロム、それはお前らが恐怖で人間を支配して思考を奪つていたんじゃないのか？」

「失敬な。人間を飼い馴らしておるのは貴族だけだ。平々凡々の儂はそんなことはしとらん。しかし何故かいつも遠巻きに見られていたな…」

「人間にとっては貴族も平民も関係なく、お前が夜ミナヤンの一族だから怯えていたのかもな」

「どつちかつーと儂も人間と同じく、貴族に虐げられていたんだがなあ…」

「今はゼロム如きの身の上話など、この上なくどつでも良い。

御子は稀有だ。

皇位精靈は特にな。むしろ初めてではないか人間に見つけられるなど。

そんな珍種が、何の変哲もないポリメシアに居ると判れば攻め込んでこよくな…」

「だよね。やっぱりそう考えるよね。さすが魔族を統括してただけはあるね」

「あ、儂の話は結局スルーするんかい」

「確かにポリメシアの土地は何処にでもある普通の土地だろうけど…俺やお前らが居る時点で、何の変哲もないつて言葉は違ってくるんじやないか？」

人間が攻め込んできたところで、お前ら三人がズバツと片付けてくれるだろうに」

「エルオーネ、お前もスルーか」

「片付けるのは別にいいの。問題はその後さ。領主とかその程度ならどうにでもなるよ。

でもね騎士団とか、コレはまだいいか。神都からの輩が問題なんだよ。あの狂信者共」

「人間の間で、神都からの通達はほぼ絶対であろう？何処の国の王も無視はできまい。

例え大衆から神聖視されていても蓋を開ければ欲望渦巻く、愚者の行列ぞ。

そんな輩共が『<sup>ア・ムート</sup>皇位精靈の華人<sup>ザウーデイ</sup>が攫われた』と吹聴してみろ。ちびは魔王並の悪党扱い、ダリアとグレーンは極刑。ポリメシアごと灰にされかねんぞ」

「ちつさい勇者さんが悪者に仕立て上げられる…神官が聞いて呆れ

る

エルオーネが肩にかかる青銀色の髪を軽く払い、溜息を吐く。  
その顔は憂いを帯びても美しい。

今までスルーされていたゼロムが、ポロリと言葉を口にする。

「ミルギス自身に自分の意思でここに居ると言わせればよからう。」  
実際、本人はちびを気に入っているし。  
まだ他の人間に気付かれてはいないのだから焦らずとも良いだろ  
う」

「ゼロムってさあ…本当に人間の穢さを知らないの?  
ボク、ちょっとトランシルヴァニアに行つてみたいよ。  
どれだけ人間が無欲なのか知り合いし、伝説の一族も見てみたい  
し」

「やめれ。滅ぼされるぞ。特に今黄昏の都トランシルヴァニアを支配しているのは正真正銘の神だ。」

だいたい、ちび達の事を懸念して、ミルギスが精霊の加護持ちと偽つたではないか。  
暫くはこのままで問題なうつよ。加護持ちと華人とでは反応  
も違うしな

「ほお…すでに先手が打たれているのか。まあ加護持ちと言つてお  
けば問題ない」

リセが腕を組み、軽く頷いた。ゼロムも同様に首を縦に振り、オー

マを見る。

オーマははいまだ眉間に皺を寄せたまま、唸つていた。

「まあ、バレないようこするナド。こざとなつたら村人の記憶を弄  
くればいいし」

「オーマ。お前ホント、ちつさに勇者さん以外には厳しいよな」

「ボク、基本人間は食料としてしか考えてないからね」

「悪魔だな」

「ボク、悪魔だし」

オーマはおどけて言づ。しかし彼が本気なのは此処にいる誰もが知  
つていた。

「では、ひとまず…攻め込まれたならば皆殺しの方針で

「賛成」

「「異議あり……」」

リセがあつさうとまとめオーマが頷くが、ゼロムとエルオーネが立  
ち上がる。

そして一人の声が重なった。

「めんどくさいではないか！」

「あの子の前で殺しはだめだ！」

「エルオーネの意見は聞くけど、ゼロムはまったく…

「最強の不死の一族が聞いて呆れるわ」

オーマとソセがあからさまにゼロムを馬鹿にする。

ゼロムの考え方としては、自分達が口外しない限り、ミルギスが狙われる事もまた

自分達が大切にしている少年が、危険に巻き込まれる事もないと思つていた。

そしてそれは事実だった。

結局、暫くは大丈夫だらうと言つ事で、今回の話し合いは終了したのだった。

## 第七話

ミルギスが僕達と一緒に暮らしてすでに一月が経つた。

村の人達は僕がまた拾ってきたのかつて呆れてたけど、誰も文句は言わなかつた。

寧ろ赤ちゃんをホツポリ出すミルギスのお父さん達の事を怒つてた。事情を話すと、皆ミルギスを歓迎してくれた。精霊の加護持ちだからってだけじゃないみたい。

ミルギスは最初、不思議そうに村の人達を見てたけど、大丈夫つて判つたらふきやふきや笑つてた。

精霊の赤ちゃんは普通の人間の赤ちゃんと変わりなく未だ一人で座る事もできないでいる。

でもね、見ててすっごく可愛いんだけどね…

ふきやふきやと笑うのが特徴のミルギス。

でも誰もその事にツッコミを入れない。ほら、可愛いと何でも許せちゃうあれだね。

ミルギスは僕やおじいちゃん、おばあちゃん他の村の人にも懐いている。

でもオーマを前にすると、泣く一歩手前みたいな感じになるからなあ。

あ、でも僕が抱っこしてるとフルフル震えるだけになる。一応泣かなくなるから　いいのかな?

リセの時はもっとヒドイ。僕が傍にいても全力で泣くんだ。

しかも泣き声が「ふええええーーーー」じゃなくて「むひゃやあああーーーー」になってるんだ。

本当にミルギスは変った泣き声してると想ひ。リセ曰く、「我らの気に当たられてこる故、仕方なし」だそつだ。別にリセもオーマも威圧感があるわけじゃないんだけどな…

だからオーマとセはミルギスのお世話を外してると想ひ。

だって、ミルギスがおお泣きするんだもん。なんか可哀想だしね。

初めて会った時から、エルオーネはミルギスを苦手に思つてたみたい。

羽を引っ張られたのがよっぽど痛かったんだね。

だからミルギスの面倒を見る時は羽が隠れるような服を着てるんだ。まあ、ミルギスもエルオーネに怒られてからは、羽根を引っ張らなくなつたけど…

昼間はだいたい僕達がミルギスの世話をしている。

おじいちゃんとおばあちゃんは烟や糸紡ぎのお仕事あるしね。

僕はまだ小さいからおばあちゃんのお手伝いの方が多いけれどもう少ししたらおじいちゃんと一緒に隣の村までの配達業を手伝うんだ！

で、夜のミルギスの世話はゼロムがしてるの。ゼロムって夜行性なんだ。オーマが言つてた。

エルオーネは薬師として忙しいから夜くらこまかくししなくひも体を壊しちゃうし。

ゼロムはミルギスの事をしつかりと世話をすると想ひ。

だってミルギスつてばゼロムを見て、すりじゃうんでるんだよ。

ゼロムと一日中遊んだ日とかはぐつすり次の日の昼まで眠ってるし。  
まあ、ゼロムもミルギスと遊んだ次の日は死んだよつに動かなくな  
るけど…

でもさ…寝室の分厚いカーテンを閉めきつて、頭まですっぽりと毛  
布に包まっているはどうかと思つよゼロム。

あ、僕の家つて部屋が幾つもあるし、一階建てなんだ。時々村の集  
会場になつてる。

オーマとリセが何処からか石と大木を持つてきて、家を改築したん  
だ。

僕が昔、「お部屋いっぱい、ベランダでいいたいむしたい！」  
って言つたらしいんだ。

で、二人はそれを実行したんだつて…「ごめん。あんまり覚えてない  
や。

ま、兎も角、僕のお家には部屋が幾つもあって、ゼロム達も一部屋  
ずつ使つてる。

それでも部屋が余つて結構すごいよね。

オーマもリセも魔法や魔術が使えるからつて張り切りすぎだよ…

「ゼロムー。そろそろ起きてくれないと、シャシャイの世話を手伝つ  
てくれるつていつたんじやん！」

「うぐつ　　す、すまん。もう少し…流石にミルギスの全力を喰  
らつてしまつと回復が追いつかん」

全力つて、何？

「もー何言つてゐの？急げちやダメだよー。」

「…あのはな、ちび。ミルギスは精靈で赤子だ。力の制御が出来とらんのだ。

そんなミルギスの相手を儂はしどるんだぞ。風の刃で滅多切りにされたりとか。

真空状態の中に放り込まれたりとか、空に吹つ飛ばされたりとか…子守で命がけつてありえん！」

「空が飛べてよかつたじやん」

「最後のところだけか、ツッコミは？…どれだけポジティブな視点なんだ！」

「もー。リセはおじいちゃん達とツラツテイ退治に出かけてるし。オーマだつて土木作業してるし、エルオーネも、薬草採取がてらミルギスの面倒見てるのに。

ゼロムだけ急げちやダメだよ。ほら。後でお酒をちょこっと飲ませてあげるから、ね。ほら行こー。」

「酒…（別にそこまで好きではないんだが…まあ御位相に預かるつか）

ツラツテイって、あの異常繁殖して異様にでかくなつたネズミか？

「うん。被害は出でてないけど。見つけちやつたから退治しておべきだつてりセが

「…妥当だな。やういえばシリラッティとは使い魔にもなるんだったか？」

「ゼロム？」

「なんでもない。さて、動けるようになつたし、シャシャイの毛でも刈り取るか

「うんー。」

そう言ひてゼロムはフラフラと歩いていく。

…本当に疲れてる見たい。ちょっと無理強いしそぎたかな？

僕とゼロムが外に出ると、村の入り口の方に人だかりが出来ていた。

「何があつたのかな？」

「さあなあ？旅人でも訪れたんじやないか。ほれ、シャシャイのとこに行くのだろう」

「はーい

僕とゼロムが気にせず、裏の牧草地に歩いていたら、村人ゼクセンさんに呼ばれた。

なんだかうきうきしてゐる。珍しいなあ。

「おおー、ゼロムいいところに、しかもチビまで一緒に！」

「チビって言つてなあー！」

「怒るな、怒るな」

ゼクセンさんはいい人だけど、いい人なんだけど、デリカシーがない！

皆して、皆して！もう、コレって絶対にリセとゼロムの所為だよね！？

皆が僕のことちびつと言つから、ゼクセンさんとか他の村の人まで、僕のことちびつと言つうんだよ。

もう。まともに僕のこと名前で呼んでくれるのって、同じ年のティーラ達くらいじゃないか！

「珍しい事に魔術師が来たんだよ。しかもツラッティがいるって言い当ててな」

「魔術師…なんぞ胡散臭いな。しかもツラッティがいる今の時期にブッキングなど」

「ん、そうか？まあちょっと聞け。その魔術師がツラッティを退治してくれるらしいんだよ」

「リセが出向いとるから今日中に殲滅して戻つてくるだろ？」

「それがそうでもないらしい。なんでも今回のツラッティは普通とは違うんだと。」

「ウラード市でもめっぽう暴れたらしいんだ。しかも皮膚が硬化して普通の武器じゃ歯が立たないとよ」

ゼクセンさんが身振り手振りで話をする。でもゼロムは呆れたように、聞き手に回ってる。

まあゼロムはリセがすごいって知ってるからね。ツラッティが普通じゃなくても、リセなら平気って知ってるんだもんね。

でも僕が気になつたのはツラッティよりも、ウラードで単語。初めて聞いた。

「ウラグ…？」

「おひ、チビは知らないか。ポリメシアから馬車で一月行ったところに有るでつかい街だ」

そつか、馬車で一月もかかる所に大きな町があるんだ。

貴族つているのかな？町の人はどういう生活をしてるんだろう。町には魔術師ばかりなのかな？

「では、そこで発生したツラツティがポリメシアまで逃走してきたと言つ事か？」

「ああ、魔術なら直ぐに方がつくから安心しろつていつてたな」

「じゃあリセに任せれば平氣だね。リセは魔術使えるし。ね、ゼロム」

「…………え？…………」

僕の言葉に、ゼロム以外の人達が驚いてた。  
何時の間にこんな人が集まつてたんだろう？

「そ、それは本当ですか？この村に魔術師が…」

誰だろ、この人知らない人だ。

魔術師…？

といふか…

「え、皆知らなかつたの？四年前洪水が起きた時、川の水塞き止めてくれたじやん」

「か、川の水を塞き止めた？！」

「おお、そういえばそうだつた」

「橋の修理とかもしてくれたよな～」

「やだ。それはリセじやなくてオーマよ、あなたつたら

「ふむ。言われて見れば、川に落ちた子供達を助けてくれたな

「魔王リセが人助けか…ちび、実はお前も川に落ちたくちか？」

「え、ゼロムなんで知つてるの？あの時いなかつたよね」

す、すごいよゼロム！

いつもは全然汚えてないのに、どうして判つたんだろう？

あの時はゼロムと出会う前だつたのに…拾う前だつたのに…！

「なんとなく。（やつぱしな。ちびが落ちたから助けただけか）  
まあ遠路はるばるこんな辺境に出向いといで、苦労だったな魔術

師殿。

だが此処には非常に規格外な人外がいるから、心配せずともツラツテイなんぞ殲滅する、いても無駄だぞ

「え、しかし、でも……そ、その者は正規の魔術師なのか？！」

「正規？魔術師つて魔術を使える人の事を言つんじゃないの？」

「知らん。正規でなくとも魔術使えるんだから問題なかろう

ゼロムは何だかさつさとこの場を離れたがってるみたい。

でも正規の魔術師つて何の事だろう？

村の人達も首をかしげているし、でもこの魔術師？の人はすごく焦つてるみたい。

ツラツテイつてそんなに強暴だったつけ？

「しかし

「くどい！」

「うわっ」

ゼロムが僕を抱き上げた。

ど、どうしたんだろう、いきなり怒鳴るなんて…

周りの人も驚いてみてるし。っていうか、僕も抱がれてびっくりだよ。

「そこまで言つなら勝手に退治するがいい。その道は山へ続いている。

ま、お前が行つた処で既に事は終えているだろうがな、さて、ち  
びよ行くぞ

「ハサウエイ。」ゼロマガジン

「こいつのが早からう

「う」

僕は揺られながら運ばれた。  
そしてゼロムに運ばれながら思つた。

「え、ゼロバッテ魔術師がヨライなの？」

「いや…あまり良い思い出が無かつた、だけだろつた」

—

まるで他人事だ。

ゼロム自身が魔術師を嫌つてゐんぢやなくて?

「ケルト＝エンゼリカと言う魔術師を知つておるか？」

「知らない。僕が知ってる、魔術とか使つてる人はオーマやリセだけだよ」

「そうか…ケルトはな、魔術師だつたらしい。しかしその境遇に耐えられなかつた。

儂はケルトが人間とは思えなかつた。変つていると、面白半分で色々と付き合つてたんだ。

それから儂はケルトと友人になつた。友人になつて暫くしてから、ケルトは死病に掛かつた。

そして初めてアイツから打ち明けられた時は、酷く混乱したものだ。人間の魔術師だなど…思わなかつた」

「魔術師つて人間がなるものじやないの？」

「なあちび。儂の故郷は何処だと思ひ?」

「?ゼロムの故郷…貴族が、近くにいたから王都の方?」

「いや、七つの都市ジーベンピュルゲンがある、トランシルヴァニア黄昏トランシルヴァニアの都トランシルヴァニアだ。

お前達の言葉では森エルデーの彼方エルヴェの国と呼ばれていたか…」

うそ…だつて森の彼方エルデーの国は絶対可侵の国だつておばあちゃんが言つてた。

誰もその境界を越えてはいけないつて、超える事ができても、とても大きな代償を払うつて。

ポリメシアに住んでる人は誰もその境界まで行かない。

僕は、時々見に行くだけ。それでも皆にはいい顔されないのに…

ゼロムは、森の彼方エルデーの国からやつて來た?

でも、

「それって…どうやってポリメシアにこられたの？！」

「ケルトの魔術まじゆがあつたからだ。 儂の能力おも力は酷く使い勝手が悪い」

「ちからら、ゼロムも魔術が使えるつてこと？」

「いや、儂では無くケルトの才能だ。 儂はケルトの力を喰らつた」「う、うばつた？え、それって、魔術つて、才能とかつて奪えるの？」

「ああ、儂の場合はな。寧ろそれしかできん。全て奪つた。全てを喰らぱうい尽つくした  
記憶きおくを、思い出を、未来みらいを願ねがいを全てだ ケルトの死と引き換えに、儂はアイツの命まことを手に入れた」

ゼロム…何だか苦しそうだ。

悲しいのかな、寂しいのかな

それとも、悔しいの？

「友達が、死んじゃつて辛いんだ。その友達と同じ魔術師を見ると思い出しちゃうの？」

「…そうかも、しれんし。そうじやないかもしれん。  
いや。コレはきっと、ケルトの記憶だ。昔の事…幼い頃の記憶」

「…あの魔術師の人、早くいなくなればいいね」

「珍しいな。ちびが人を邪険に扱うなど

「ゼロムが寂しそうな顔してるからだよ。ゼロムが傷つかないなら  
その方がいい」

「そうか…すまんな。さて、ではシャシャイの毛をすべてと刈り取  
るとするか」

「うん！」

ゼロムは僕を抱えなおした。

そつときは肩に担がれたけど、今度は片腕で抱っこされた。

そして僕達はうらの牧草地へ行く。シャシャイの毛を刈り取りに。  
刈り取った毛をおばあちゃんに届けて、午後は糸紡ぎのお手伝いだ。

## 第九話

僕はシャシャイの刈り取った毛を軽く火で炙る。

シャシャイの毛は火に当ると、ふわんと膨らんで倍の大きさになる。

それを炙つてから、シユルシユルと一本ずつ毛を抜いていく。

シャシャイの毛は温かくなると、毛と毛の間に空気が入って軽くなるんだ。

だから糸を紡ぐ前はこうして毛を取りやすくしなくちゃいけない。でも火は熱いから、火傷をしないように気をつけなくちゃいけないんだ。

「ゼロム、じつち終つた！」

「じつちも終つとるぞ。しあし今年は質がいいな」

「あ、やつぱり？ 何か手触りがいいんだよね。今年の。そ、おばあちゃんの所に持つていこう」

「ああ。しかし、シャシャイには別に変った事などしつらんのにな

「そういえば、リセが何回かお世話をしたかも。珍しかったなあ

「…原因それっぽいな」

リセは殆どおじこむやんの手伝いで畑を耕したり、チーズやミルク

を隣の村に運んだりしている。

隣の村と言つても、早馬で4日はかかるから、そういうった体力仕事を本当は若い人がやるんだ。

でも僕はまだ子供過ぎるからおじいちゃんの手伝いは出来ない。代わりにリセが手伝ってくれている。

長旅は疲れちゃうのに今年は何回か、僕と一緒にシャシャイの世話を手伝ってくれた。

あれかな？

僕がリセに、シャシャイの世話が上手くできないつていったからかな？

そういうえば、リセつてばシャシャイの『飯に何か混ぜてたなあ…まあ栄養剤とかかな。エルオーネが協力してくれたからかも。

僕とゼロムは一緒におばあちゃんが糸を紡いでいる工房にシャシャイの毛を運んだ。

ゼロムは何かを考えているみたいだつたけど…ビラしたんだひつゝ。まあいいか。

おばあちゃんにシャシャイの毛を届け終わって、僕とゼロムは家に帰る途中オーマに会つた。

オーマも丁度終つたのかな。

よし。コレでお昼を作ってくれる人をゲットだ！

あのね、ボクも『飯作れるけど。オーマやゼロムのお料理はすっごく美味しいんだ。

おばあちゃんもすつゞく一人を褒めてた。

リセは微妙かな…なんか昔はお城に住んでて、周りの事は全て召使がやってたらしいからね。

エルオーネのはおいしそうって言つたが、草っぽい味がするんだよね。

食べれないわけじゃないけど……うん。ともかく、一人の「」飯は美味しいんだよ。

「あ、おチビちゃん」

「オーマー噴水造りは終ったの？」

「うん。ボクの手にかかるばあんなの簡単だよ。ほら」「

「オーマーあればやり過ぎではないか 天辺に一角獣のオブジ  
エとは」

村の真ん中に円い形の噴水が出来上がっていた。

三段重ねになつてゐるみたいで、噴水の腰掛ける部分には花のオブジ  
エが作られていた。

二段目は木の実と鳥のオブジエが、三段目はゼロムが言つていた一  
角獣があつた。

相変わらずオーマーはすごいなあ。一日で作っちゃうんだもの。

一角獣：えつと、「けがれなき清らかな乙女」の所に現れる神様の  
獣だつけ？

へー。馬とあんまり変らないんだ。頭に角が生えてるけど、あれつ  
て邪魔にならないのかな。

ま、神様の獣だから何とでもなるのかも。

「別にいいでしょ。迷惑かけている訳じゃないんだから。

ところで、さつき他の人達が騒いでたけど、いったい何があった

の？」

「ああ、捨て置けあんなの」

「珍しい ゼロムが邪険にするなんて」

「魔術師つて人が来てるんだよ」

「はあ？ 魔術師い？ こんな辺境の村に？ わざわざ何の為に？」

「えっと、ツラツテイが凶暴化して、しかも魔術じやないと退治できないつて……」

「ツラツテイつて… 魔術師が失敗して放置した出来損ないの使い魔のこと？」

出来損ないでも、製作者の魔術師以上の力の持ち主じやなきや殺せないヤツだね。

でも、どのみちポリメシアにツラツテイが出たって、ボクやリセ いるし問題ないよ

「ふうん。でもウラド市つて所で大暴れして大変だったんだって。だからこっちにも被害が出ないように魔術師の人があー応来たんじやないかな？」

「被害が出ないようになえ… ゼロムはどう思つ？」

「大方、ウラド市を壇にしどる魔術師が使い魔作りに失敗したんだろう。」

市街で暴れた拳句、捕獲できずに此処まで野放しにしてきた。

魔術師が己の使い魔、しかも出来損ないに逃げられたとあっては

面目丸潰れだ。

あわよくば、ウラド市から離れた辺境の村で始末がてら隠蔽工作でもしごきたんじやないか？」

「ポリメシアはうつてつけだものねえ。近くに森の彼方エルデー・エルヴァの國あるし」

「ふ、一人とも、ビうしたの。そんないんぺいつて？」

「君（お前）は気にしなくていい」「

な、なんかオーマは目が笑ってなこよ。  
ゼロムも眉間にしわ寄せてるし……び、ビうなつちやうんだろ？

そんな僕を見て、二人は頷きあつた。  
なんか、僕だけのけ者にされてる気がする…

「オーマも魔術師がキライなの？」

「ボクは 割と好きかも。我欲まじゅの亡し者はいい味だすし

「？？？」

「オーマ…この村で問題起こすでないぞ

「判つてゐや。でも久々にああいうの食べたいんだよねえ

「オーマはお腹すいてるの？じゃあ、早くお家帰りつよ。」

久しぶりだなあオーマがお腹すいたって言つた。

あんまり珍しかったし、オーマのお願いもあって僕達の話はそこで  
お終い。

三人でお家に戻つてお昼の準備をした。

それと同様に、エルオーネとミルギスも戻つて来てから丁度いい  
ね！

野菜たっぷりのスープと、オーマがぱぱっと作ったふっくらなパン。川を上ってきた身の引き締まっているお魚のムニエル。そして山で採ってきたオレンジを絞ったジュース。食後のデザートはシャーベットだつて。これはゼロムが昨日の夜から仕込んでたもの。

初めてシャーベットを見た時はすゞく感動した。だつて冷たくて、甘くて直ぐにとけちゃう。オーマもちょっと驚いてた。王都でも珍しい食べ物なんだつて！ゼロムつていつたい何者？！つて思つたけど、ゼロムはゼロムだし別にいいや。

即席で此処まで作れるオーマとゼロムは凄いと思つ。

「はい。ミルギス、あ～ん」

「ふあ～ん」

一月も経つと、ミルギスも慣れてくる場面がある。

それは「飯の時。傍にオーマやリセがいても」「飯を食べている時は泣いたりしない。

どつかつて言うと、オーマの作る「飯は好きみたい。

ミルギス用にちょこんと取り分けられた食べ物は、今では綺麗にお皿の上からなくなつていて。

取り分けてくれたのはゼロムだったけど。

エルオーネはミルギスに前掛けをしてくれて、膝の上に乗つけてる。

普通に椅子に座らせてもテーブルに届かないからね。

エルオーネがいない時はゼロムの膝の上に我が物顔で乗つかつてゐる。でもデザートを食べさせるのは僕の役目！だって可愛いんだよ。ぱくぱく食べてくれるが。まるで餌付けしてるみたいでさ！

「生後間もない赤ん坊が固形物を取るつて何だかシユールな場面だね。

みてよ。魚の骨とか器用に吐き出しつづけ…野性の本能が強いのかな？」

「そうか？俺は華人ザウーディは知らないが、普通の精靈の子はこんなもんだぞ。

そもそも野性の本能つて、魔魔おまえらの方が格段強いだろうが

「エルオーネお前、やけに詳しいな…野生つて、精靈は自然と共にあるのだから野生だろ？」

「ああ、俺はハーフだから。有翼人と水守カンドイーネの。

何だか野蛮と言われていたみたいで嫌なんだよ。ゼロムだつて化ノスけ物と言われるには嫌だろ？」

「ああ つて、」

「「え？」」

「ゼロムは兎も角、おチビちゃん知らなかつたの？」

「ええええ？！－エルオーネは水の精靈だつたの？－うわあ、う

わつ！

「…有翼人にしては変った色だと思っていたが、混血児だったのか」

し、知らなかつた。エルオーネつて水の精靈とのハーフだつたんだ！だから時々エルオーネの周りに、水の玉がぼよょんつて浮かんでたんだ。

庭に池を作つて水の中に青いバラつて花を栽培したり、川釣りで一番魚を多く捕まえたり

枯れた井戸に何かを放りこんだらぶはーつて水が噴出したのも、全部エルオーネが水の精靈とのハーフだから！

あ、噴出した水はオーマが留めてくれたよ。さつきの噴水はそのために作つてたんだ。

すごい。オーマやリセもすごいけど、精靈つてすごい！

ミルギスも大きくなつたら竜巻でも起こせるのかな？

あ、でも竜巻起こそれても村が壊れそつだから困るかも…

「まあね。有翼人でも稀有だけど…別に俺みたいのはいないわけじゃないだろう」「

「儂はあまり見ぬがな。しかしミルギスが懐いとる訳がようやつと  
判つた。」

「風人と水守は穏やかな氣質同士、仲が良いからな

「ぐはつ！」

「？」

「み、ミルギス？！」飯の時は遊んじゃダメーまだシャーベット食べてゐる途中でしょ！

食器の破片で怪我したらびつするの…悪い子にはゼロムだつて

「デザート作ってくれないよー。」

「ふえ?...」

ゼロムが天井にぶつかって、びたんつて音を出しながら床に落ちた。ミルギスはふよふよヒラヒラした布をぺたんと床につけて驚いていた。

あれ...

ミルギス、「デザートを作つてたつて知らなかつたのかな? いや、でも、ゼロムが料理作つてるのを知らないはずは...」

「 もうい」飯中に遊ばない?」

「ふうふえ」

「約束だよ?じゃあ、これ食べちゃおうね~」

一先ず、残つてゐるシャーベットをミルギスに上げた。

「儂の安否はスルーなのか...」  
「仕方ないだろ? お前は赤子ではないんだから」「差別だ...此処にきてまで差別を受けるなんて。儂つて...」「ゼロム。これは差別じやくて区別だ。子供と大人の」「あははは。エルオーネ、ものは言つよつだね。にしてもベタレだねゼロムは」

コンコン。

「 「 「 」 」 」

オーマが笑い終わった時、誰かが扉を叩いた。  
誰だろう？お昼はおばあちゃんもおじいちゃんもいないって村の人  
は知ってるのに…

「は～い～って、え、オーマだ’つしたの？」

「僕が出るよ。おチビちゃんはエルオーネヒルギスと一緒に此処  
にいて」

「だ’つして？」

「だ’つしても。ゼロムはボクと一緒に行くよ」

「ああ」

片腕にミルギスを抱え、もう片方の手で僕を引き寄せた。  
背中の羽がパタパタと動いている。皆どうしたって言つんだ’つへ。

「ここがアーヴィング市より参りました、魔術師のイースと申します。

此方のお住い、リセという方が居るをお伺いしたのですが、今はいらっしゃいますか？」

「ああ、リセはここに住んでいるけれど今は出かけているよ。ビニギの愚かな魔術師から逃げてきた、失敗作のツラシティを退治に行つてゐるけど？」

「…お詳しいのですね。リセという方は魔術師ですか？」

「あ？僕はリセじゃないからね。本人に聞けば？」

「え？」一緒に住んでいたりしゃるのに、仲が悪いのですね

「え？で、魔術師なのになんでここにいるの？アーヴィング市の不始末を、此処の人達に押し付けるつもり？」

「まあか！綺麗なお嬢さん。私もお力を貸しましたかったのですが

…」

「へえ、でもリセには会ってないんでしょう。じゃあきみに来てしまったので」

「ええ、お会いする前に、其方にいらっしゃる方に必要ないと言われる筈なものねえ」

「ええ。お会いする前に、其方にいらっしゃる方に必要ないと言われてしまつたので」

「ひ。

「（何余計な事を喋つてんだヘタレ…寧ろ追いで出せよ…）」

「（無茶言つたな…ちびもおつたんだぞ…プライド高そうだから焚き  
つければリセの所いくと思つたんじゃ…）」

「（他力本願なわけ？…居据わってるじゃないかヘタレ…）」

「（へタレつて…すいません。調子に乗りました…）」

「素人に言われたくらいで引き下がるなんて、随分と低いプライド  
だね」

「お話によると、リセという方は四年前の洪水で荒れ狂っていた川  
の水を塞き止めたとか…

そのような高等魔術を使える方は極僅かですが、私は『リセ』と  
いう名の魔術師を聞いた事がありません」

「ふうん。それで、君は何がしたいの？」

「お会いしたいのです。そして確かめたいのですよ。正規の魔術師  
か否か」

僕はこいつそりと壁に耳を当ててオーマたちの会話を聞いた。  
なんだかオーマもゼロムも普段の一コ二コした顔はしてないみたい。  
それって、やっぱ

「オーマ怒つてゐる」

「ああ、そのようだな。しかしこんな辺境の村に魔術師か…」

「ゼロムも魔術師のこと苦手みたいだつたけど、僕もその理由わかつた気がする」

「それは、どうこう意、」

「だつて、オーマは確かに綺麗だけど、女の子じゃないよ！」

昔は女の子っぽかつたけど今は違うのに、あの魔術師の人失礼だ！

！」

僕が、ぐつと力説してゐるのに、エルオーネは僕の頭を撫でただけだつた。

そして僕らはまた壁に耳を当てて会話を盗み聞くのだった。

## 第十一話

それから暫くしても、魔術師のイースと名乗った人は僕達の家に居続けている。

オーマとずっと喋ってる。でもオーマは早く終らせたいみたい。ゼロムのほうは全然喋っていない。オーマにまかせっきり。

「ねえ、エルオーネ。正規の魔術師ってどういう意味なの？」

ミルギスはお腹がいっぱいになつて、エルオーネの腕の中でぐっすり寝ている。

僕とエルオーネは壁に耳をつけたまま会話をした。

「正規の魔術師 多分、魔術師の学び舎を卒業した者の事だろう。

ほら、ヨルンが傭兵の証を持っていたらう？あれと似たようなものだと思うが」

「ヨルン兄さんが持つてた…傭兵になるのも魔術師になるのも許可が要るなんて、大変だね」

「ああ。最低限のラインを作つておかないと、調和が乱れるからじやないか？」

魔術を扱えるものと、そうでない者の差は大きい。国はそれを管理したいんだろ？

まあ学び舎と言つても、実際は金持ちか余程の才能の持ち主でなければ入る事はできない

「へえ、お金持ちは貴族とか?」

「そりだな。まあ気にするほどの事じゃないさ。魔術が習いたければ俺が居るし

魔獣召喚や魔王の技を学びたければ、リセに聞くといい。知識を広げたければオーマだな」

「ええ? エルオーネも魔術使えるの? ! ?

「ウンディーネ水守のハーフだからな。ま、水に関することが専らだけど

「へえ? でも何でリセが魔王の技なの? そもそも魔王の技って何? ?

「それは…魔王の称号、つまりは一つ名を借りて魔術を行なう事を言つんだ。

あー、極端に言つと頂に君臨ロード・コーショクせし闇の名を使えば、大抵の高位魔族は従える事ができる。

でもそれはとても高いリスクがかかるから、まったく使用される事はないけれどね…

リセがそういった事に詳しいのは、昔に色々あつたんだよきっと。

リセは努力家で、色々な事を昔から良く知っているんだ。

長く生きているから…かな

「ロード・コーショクって魔王で一番偉くて怖いんでしょ?

殆ど姿を現したことのない魔王でしょ? すごいね! 今度リセに教えてもらおうっと

「だから、危険だから誰も使わないつて……」

すごいなあ、リセは。

確か魔王って歴史の中でも殆ど出てこない存在で、姿も殆ど判らな  
いんだつけ？

リセは昔、お城に住んでいたって言つてたから、きっとその時に魔  
王の事を勉強したんだね。

本当にリセはなんでも頑張る頑張り屋さんだね！

にしても、あの魔術師の人まだいるし……いつたいどつしてここに來  
たんだろう？

…もしかして

「リセが魔王の技を使えるって知つてたから会いたいのかな？」

「違うな。大方川を塞き止められる技量を持つリセの出身が気にな  
つたんだろう。

特に貴族出身の魔術師は、自分よりも才能のある市民出身の魔術  
師を嫌うと聞いたし……」

「何それ…別にリセ悪い事してないのに」

「まあな……つて、どこに行くんだ？」

「僕、リセを呼んでくるよ。会えばすぐにあの魔術師の人いなくな  
ると思うじ」

「は？ちょっと待つ」

「いってきまーす」

僕は反対の扉、つまりは裏口から外へと出て行つた。  
エルオーネが何か言つたみたいだけど、ミルギスを抱っこしてゐるか  
ら追つてはこない。

ほら、動くとミルギスが起きちゃうしね。ミルギスの寝起きは悪い  
んだ。

ふえふえぐすんつてすぐにぐずるから。

ああ、何だか嫌だなあ。

ゼロムは魔術師の人を見ると辛そうな顔をするし。  
オーマも二口二口してゐるけど、本当には笑つてないし。  
早くリセに会わせて、さつやとこの村から出て行つてもらおう。  
魔術師の人さえいなくなれば、みんないつも通りに元に戻るよね！

「え～と、リセがツラツティ退治に行つた方は……」

ガサガサ

「え？」

なんか草の間に黒っぽいものが

「う、うわああああつあ！――？」

キシヤアアアア

ガツン！！

僕はとっさに後ろに飛びのいた。

目の前にはネズミが、多分、これがツラツテイだ。  
飛び込んできた勢いが、すごく強かつたみたいで地面に大きな穴が  
開いた。

何これ…ぶつかつたら僕のお腹に穴開いちゃうよ？！

異常繁殖した異様に大きなネズミ…毛皮？

違ひみにこれ、針つぽいや...触つたらけへちくじやすめなによこれ！

「な、何で、こんな」

え、  
え、  
え？

リセとおじいちゃん達が退治しにいったんじゃなの？  
何でこんな村の近くにいるの、どうして口の周りだけ真っ赤なのー？  
ふと僕の頭にゼクセンさんの言葉がよぎった。

『皮膚が硬化してて普通の武器じゃ歯が立たなことよ』

『そりいえば、オーマも言つてたよね…』

『著作者の魔術師以上の力の持ち主じやなきや殺せない』』って

魔術なんて僕使えないよ！

使えてもこりとな、凶暴なヤツに勝てる『気がしない』：

「どうしよう、逃げなきゃ…」

来た道を走つて戻るつもりでいた。でもその前にもう一匹飛び込んできた。

か、囮まれちゃつた…

どうしよう、どうしようつ

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い  
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い  
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い  
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い  
怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い

「ふ、ふわ…」

目の前がかすんでくる。泣いてる場合じゃないのこつ…  
どうしよう…

連レテ行カレル

誰が？

ホラ、振り下口サレル銀色

あの銀色は何？

泣ク声ハ力細イ

何これは？

手ヲ伸バシタ人ハ遠イ  
抱エテクレタ人ハ熱ヲ失ツテイク

どうして、真っ赤になってるの…

「う うわああああつあ」

訳が判らずに僕は叫ぶ。

こんな事は自殺行為なのに、それでも叫ばずにはいられない。  
だって、何、何なのこれ…

僕はこんな場面を知らない。

僕はこんな真っ赤な地面なんて知らない。

泣いている人が誰なのかも、動かなくなつた人が誰なのかなんて

僕は知らない。

【】

「ひつ?！」

幾つもの重なった音が僕の耳に聞こえてきた。  
背中がビクリと震える。だて、何だか、怖いよ

そしたら、僕に今まで唸っていたツラッティ2匹は大人しく木の下  
で丸くなる。

な、何? 今度は何が起こるの?!

すると、僕の傍に影が落ちた。

「ちび。怯えるな。それらはお前に噺を『えぬ

「リ、セ…リセつー」

僕は必死に手を伸ばした。

リセはぼくのその手を取ってくれた。そして優しく抱っこしてくれ  
る。

温かいのに、まだ恐怖はなくならない。

「驚かせてしまつたな。この地に住む魔族は絶対にお前を傷つける事はさせぬ」

【我、リーセンハイドラは此処に誓おつ 我が眷属はそなたを傷つけぬ。何があとひつとな】

「ひっく、う、うえ、リセえ。ひっく、ひっう…怖かったお

また幾つもの重なつた音がリセから聞こえた。

僕は思い切り泣いた。

リセに抱っこしてもりつてからも、ずっと泣いた。

リセは何も言わずに僕の背中を撫でてくれる。

それが心地よくて、つらつらとしてしまつたのは仕方ないよね…

「…あれを服従させたのは良いが、まさか此処までこの子が怖がるとは思わなんだ。  
さて、これからどうしたものか 致し方ない。処分して別の連れてきて代用するか…」



「で？何でおチビちゃんはあんなに泣き腫らした目だったわけ？」

優雅に脚を組み紅茶を一口啜るオーマが、床に正座しているもつと確に言うと

エルオーネの作った強力な痺れ薬を飲まれ、ゼロムに正座させられたりセが、オーマの前に差し出された。

因みにエルオーネとゼロムの二人はオーマから離れた場所に座っている。

これは自分に被害が及ばないよう考慮したためだ。

今のリセの現状は、普段ゼロムが居るべきところなのだが、今回は事情が違つてくる。

「や、それは…ちょい一ひとつ改良したシリラッティがちびの目の前に…」

「ねえリセ 韶つて馬鹿？」

「（ペクッ）！」

甘つたるい声でオーマはリセに問つ。

男にしてはふつくりと柔く膨らんでいる脣が二イと弧を作り、一段のダークブラウンの眸は赤みを増していた。

笑ってるのに、笑っていない

エルオーネ、ゼロム、リセの心境が一つになった。

本来の力関係で言えば、最強と語られる不死の一族のゼロムが一番強いはずなのだが、性格上それはない。故に魔王の一人であるリセが頂点に立ち、高位悪魔のオーマは口出しなど出来ないはずだ。

そのはずだったのだが、しかし、それは今適応されない。

この村、ひいては彼らが溺愛している少年の傍に居る為に一つのルールが設けられている。

溺愛している少年は多種族から好かれる。そしてかなり高い確率で何かしら拾つてくるからだ。

嘗て魔王といわれた存在の一つが。

今でも神都と恐れられている悪魔が。

稀有な種族であり立場の混血の有翼人が。

そして伝説と語られ、その姿を消した最強の一族が。

「少年を傷つない」という絶対のルールを決めていたのだ。

しかし今回はそのルールが破られた。

ヘタレでヒエラルキーが一番下にあるゼロムではなく、そのゼロムを普段いびつているリセが、だ。

「す、すまぬ」

「はつ。謝つてすめば何でもいふべく思つてゐるワケ。ねえ、焦<sup>イ</sup>  
獄<sup>ゼルトウガール</sup>の火蛇<sup>ヒツキ</sup>かま？」

「や、やつ言ひ訳じやせ…」

「じゃあ何? 土下座? しろみをつれと。死ぬよマジで。鬱<sup>ウ</sup>らせりよ  
今」

「な、な、ななな! ?」

「オーマ、気持ちは判るがもうその辺に。リセだつてうつさい勇者  
さんを傷付ける気はないんだから」

「何? ボクのやり方に文句あるの? いいよねえエルオーネは。  
おチビちゃんと一緒にいれてさ。あのクソ魔術師とお話しなかつ  
たものねえ」

「(なんであんなにヤサグレでんだけ?)」

「(あー…あの魔術師がオーマの神経を逆撫でしてなあ)」

「(逆撫で…普段のオーマからほどてもじやないが、考えられない  
ぞ)」

「(神都に席を置いている魔術師)」

「(導師…? 神都の資金集め役が何故? といふか、その後はどうな  
つたんだ?)」

「(オーマが精神的に追い詰め弄つた拳句、ビニゾカに捨てに行つ

た。それきり知らん)」

「(ゼロム。こちら邊で死体をあげるなどいつも言つてゐるじやない  
か!)」

「(儂としてひやんと言つたわ! オーマも理性は残つてたし、別の場

所で始末つけたようだ)「

「(始末つけたのに、何でオーマはリセにハツ当たりしているんだ?)」

「(若いからなあ。感情が制御できないんだ)」

「(ゼロム。お前つていつたい幾つなんだ?)」

ゼロムは視線を遠くへとやる。エルオーネの疑問には答え無かつた。ゼロムの顔は、完全に憔悴しきっていたのだ。

そもそもそのはずだ、オーマと魔術師のやり取りを間近で見ていたのだから。

魔術師イースと会話していたオーマは、会話が進むに連れて笑顔が引き攣つていき

神都の教えを説かれた時は、口元が痙攣しだしていた。

そして魔術師が、このポリメシアを私欲の為に灰にしようと提案した時、その場の空気が凍つた。

無論、ゼロムと魔術師の話に腹を立て、つまみ出そつと動こうとしたのだが、オーマの方が早かつた。

『いい加減、自分の立場弁えて。君さ、中身暴かれてるのにも気付いてないの?』

相手の喉を片手だけで握り潰し、暴れだす前にそのまま宙吊りにした。

そして冷え切った眼で相手を射抜く。冷笑を添えて。

『若きゆえの過ちなんて言葉では片付けられない事態に陥ってるね? ウラド市から流してもらっている魔薬<sup>ボイズン</sup>が此処最近滞っているんだつて? 薬中の信者つて笑える。』

でもそれってさ、表向き神都では「法度でしょ？君、神官だよね。アーズカルド

簡単にバラしていいの？

導師でもある君が他国に催促しに来て、たら一回しこされた挙句に収穫なしだつたんだあ。

それで怒った君が使い魔を放つてウラード市で暴れて、でもやり過ぎて手に負えなくなつて？

じゃあ面田丸つぶれだよねえ。ビリヒカ汚名返上するためこ、こんな辺境まできちゃつたんだー！』

くすくすと笑うオーマは楽しげに秘密を暴いていく。

魔薬<sup>ボイズン</sup> それは依存性の高い毒だ。快樂と過去への回帰が約束される。

魔草<sup>ボイズン</sup> 乌ラード市は辺境 森の彼方<sup>エルテーエルヴ</sup>の国が近くにあるためか、あまり重点的に警戒されない。

されないというよりも、どの国も不可思議で不気味な国には近づきたくないようだ。

大抵の国は魔薬<sup>ボイズン</sup>の精製・売買を禁じている。しかし神都は違つた。信者を増やすため、魔薬<sup>ボイズン</sup>を薄めた水を参拝者に聖水と称し売ることがしばしば。それも金持ちを中心に行なう。

その時、ゼロムは思った。

ああ、悪魔で性格悪いんだ。これじゃあ故郷の小公爵と大差ねえや。

『あはは。怯えてる。不思議そつな顔してる ボクね、オーマつて言うんだ。

「この名前じゃあ君はピンと来ないか。そうだね、オーセルダ・マーティス蠱惑の悪魔つて言えば判る?』

イースは恐怖した。潰された喉の痛みが判らなくなる程、体が震え心が潰された。

神都 アーズカルドの導師としてではなく、また一人の魔術師でもなく、ただ一人の人間として。

恐怖から逃げるよう魔方陣を描こうとする魔術師に対し、オーマは少女が花開くように笑う。

そして、必死の思いで魔方陣を描いている魔術師の手に、オーマは少しづつ力を加えていった。

イースは悲鳴を上げる事も許されず、//シミシと音を立てて潰されていく己の手を見せ付けられた。

肉が潰れる音、肉に圧迫され骨が潰される音。ぼたっと落ちる血と肉片。ぎちぎちと緩やかにねじ切られていく魔術師の右腕。

恐怖しか感じられなかつた状況から、視覚で捉えてしまつた現実に激痛が走る。

魔術師の目の端には涙がたまる、オーマはそれを赤い舌で掬い上げた。

その行為が、さらに魔術師に恐怖を「え体を強張らせた。

『久々だなあ。こんなに哀願されて、忌々しく思われたの。いいね。食べ甲斐があるよ』

オーマは笑みを深く、恐怖に屈した魔術師イースの心臓を貫いた。

ゼロムは今さつきまで、この部屋で人間一人を覗っていたオーマを見て溜息を吐く。

橢円形のテーブルに顎を載せ、行儀の悪い格好のまま顔をエルオーネに向けた。

「（なあ、エルオーネ。オーセルダ＝マー＝ティスって知っているか？）」

「（知っている。精霊の間でも評判が微妙な悪魔だ。：オーマがソレなのか？）」

「（うむ。微妙なのか？）」

「（微妙だ。精霊を喰う事もあれば、人間を堕落させる事もある。しかし専らの被害は人間だ 神都の神官で精霊や魔族を虐げている者ばかりだから）」

「（成る程な。オーマの本名を知ったあの魔術師、目の前で自殺しようとしたんだ）」

「（賢明な判断だと思う。オーセルダ・マー＝ティス  
蠱惑の悪魔は残酷な思考の持ち主で有名だ）」

「…儂、よくぞ発狂せずに入江してこれたな」

「ちょっとそこ…ボクがリセを説教してるんだから、べちゃくちゃ喋らないで！」

「「はーい」」

「オーマ、我的話を聞いてくれても良いではないか！」

「はっ。おチビちゃんを泣かしててる時点で死刑つて決まつてんだよ」

「あそこまで驚くなんて…グレーンだつて騎獸が欲しい」と言つてたんだもん！

ちょっとシラッティを改造して、皆の交通手段にしようとだけだもん！

別にちびを怖がらせよつとか怪我させよつとか、泣かせよつとか思つてないもん！」

「キモひー何もんもん言つてるの、キモイよリヤ。」

「だて、だて、我だつて皆の為に色々しようつと頑張つてるんだもん！」

「ちょっと一人とも、このキモイのどつにかして…？」

「キモイ？ー私はキモくないもん！」

「キモイよー本当にこれが**焦獄の火蛇**イゼルドウガアルと呼ばれた魔王なの？ー」

「本人が言つてるからそなんだうつ?」「…」

「ちょひ「つわーんー踏して、踏してーまた我のことこじめるつ…」

「「また?」」

「あ…そうこえぱりセの家出の原因つて、他の魔王達にいびられたからだつけ…」

「家出?ー魔王が家出?ードンだけ人聞くさい魔族の王様達なんだ?ー」

「あ～。判る判る。身に覚えのない事で催促されたり、知らぬ間に人身御供にされたり」

「ゼロムつーお前もか、お前もそつ言つ経験があるのか！ひどいよな～辛よな～」

「彼奴ら自分達は好き勝手遊びくせつてからに！我にだけ雑務を押し付けるんじや！」

「儂の事を散々殺しておったヤツが気安く共感するでない。キモイわ阿呆」

「…………」

「あ、固まつた。ゼロムにキモイって言われて相当ショックだったみたいだね」

「本当だ。オーマが説教するよりも、ゼロムに侮辱された方が効果あるようだな」

「侮辱ではなく事実だろ？とにかく、お前らの方が儂を侮辱しとるぞ！」

ゼロムに侮辱？されてから暫くの間、リセは抜け殻の様な状態だった。

溺愛している少年が潤んだ眸で見上げながら説得して、やっとリセが元に戻ったのは暫くしてからの事…



## 番外編 焦獄の火蛇

我が名はリーセンハイドラー。

魔族の王

イゼルドウガアル

焦獄の火蛇と恐れられる魔王の一人だ。

いや、魔王の一人だつた。

何故過去形で語つてゐるかだと？

フン。当の昔に魔王業なんぞ溝に捨ててきたわ！

嘗ては我も魔王である事を誇つていた。

我ら魔族は数百種にも及ぶ一族が栄えている。そんな中、その一族を統括するのが魔王だ。

魔王とは人間のように世襲制ではない。強く秀でし者が下々を支配し統括する。

魔獸・魔人・妖魔等は皆、我的下僕であつたのだ。

しかしだ… 我の所業故か、ここ数百年で支配する種族がぐつと増えてしまつた。

人間共も戦を仕掛けでは来るが、まったく我的相手にならん。

これは我だけに言える事ではないが、他の魔王たちもやる氣がそがれてある。

人間共に殺して欲しい下僕もいる事にはいるのだが、逆に人間が殺されているし…

昔は夜の一族ミディアンと魔族は争つていたらしいが、我が生まれて600年はまったく姿を見ない。

たしか森の彼方の国に、否、彼奴らは「<sup>トランシルヴァニア</sup>」の國を黄昏の都と呼んでおつたか

兎も角、滅んだのかはたまた自國に引き籠もつておるのか、暇潰しの相手がおらぬ。

悪魔も我ら魔族と似ている。

ただ彼奴らは我らと違い、人間共しか糧にできぬ事か…人間が居なければ存在できぬ

なんとも不安定な生き物共よ そんな悪魔共も最近はなりを潜めている。

なんでも四方に君臨する聖魔の一人が入れ替わったとか、どうとか…

そう、我の余暇は下々の管理に全て費やされていつたのだ…

下々の声を聞き、要望をかなえ、行動を起こす。その繰り返しだ。はつきり行つて単純。そして一定で、我でなくとも誰にでも出来てしまつ。

戦争もなくいたつて平和だ。平和なのはいい。

しかしだ…！

下々が平和でのんびりしているにも関わらず、何故に我だけが雑務に追われねばならぬ？！

他の魔王たちとて悠々自適に人間の國へ旅したり、精靈の祭りに参加したり

ドラゴンを捕獲してペットにしたり…その他もろもろやつているのにつ！

何故、我だけ、城から一歩も出られんのだあああ…！！？

喧嘩か、喧嘩を我に売つてゐるのだな？

喧嘩が喧嘩を我に売つてしるのたな?  
イゼルドウガアル  
この焦獄の火蛇であるリーセンハイドラに宣戦布告しているのでな

憤りを感じずにはいられん！！我も外へ行くぞ！

そう思いいざ扉を開けようとしたら、何故か下僕どもが書簡を持つてまいつた。

しかも明かに、我が統括し支配している一族以外の者まで居る。

「魔王様、判子をお願い致します」

「 「 「 焦獄の火蛇様！此方の書簡もお願い致します！――！」

待て待て、  
待てつ！！

「何故、貴様らが、我的元に、集つておるのだ?」

「「魔王様が焦獄の火蛇様ならば城にいらつしゃるから、と」「魔王様が焦獄の火蛇様 イゼルドウグアル」

「おい、此處最近、我的領域に出入りしている管轄外の下々とは貴様らか…?」

「「「はい。我が魔王様より許可を頂いております…!…!」「」

まさか、なんぞ最近書類業務が増えていると思えば、原因はコレか?

我の管轄外、統括しなくてよい一族の分も、我是雑務をこなしていたと…

寝る間も惜しんで、外に行く事も出来ず、仕方無しと括っていた我に対して

彼奴らめつ、あらう事か「彼らの仕事を我に回していったのかつ?!!

「おい、貴様らの主の名は?」

「苛烈なる冰華様でござります。焦獄の火蛇様 キゲナシウス  
イゼルドウグアル」  
「暴欲の無彩色様です。焦獄の火蛇様 ムンドウ・ラスマ  
イゼルドウグアル」  
「混沌の碎片様であります。焦獄の火蛇様 ナウ・ケイオス  
イゼルドウグアル」

我よりも歳下の奴等ではないかああああ……

「あの、 焦獄の火蛇さま…」  
イゼルドウガアル

「ぐ、今度は誰の管轄の一族だ?……」

「ひつ!…あ、あの、 暁の闇様より  
シオン・コーシェク

チチ

「頂に君臨せし闇の…あの暁の闇殿まで…」  
ロード・コーシェク

あれ、何だか田がしょぼしょぼしてきたぞ。

心なしかしょっぱい感じがする。

そういえばこの部屋の掃除つて、どれ位前にしたか覚えておらぬな…

「…あ、あの焦獄の火蛇様?」  
イゼルドウガアル

「魔王なんでもやめてもいいの……！」

「うわあああん！ 貴様らなんか大丈夫。嫌いだあああつ……！」

もつ誰も信じない。

だって、我に全部押し付けてのうと生きてるんだもん。

うつ。

我ってこいつたい何なんだ？

「うう。我は、われは

ぐすんっ

気が付けば見知らぬ森の湖のほとりに来ていた。

城を破壊した後、どうやって此処まで来たかは覚えてはおらん。

フン。あんな城なんぞ木つ端微塵に吹つ飛ばして清々しておるわ。

…ちよっと今まで収集していた絵画はもつたいなかつたかも知れぬがいや、もう良いのだ。次は一から、誰にも邪魔されずに集めなおそう。

「うひひひ。べゑべゑ。疲れたぞ。もつ う、うええん」

ダメだ。何かもつ色々とべりやべりやしていく、だめだ。

「どうして泣いてるの？ みちに迷つたの？」

「む？」

「僕のおひにに来るへおばあちゃんが野ごはーのパイを焼いてくれてるよー。」

「人間のガキが、我に構つな！」

「…へ、うええん」

「なつ、何故に泣く？！…泣きたいのは我だ！…いや、実際は今まで泣いていたがな！」

「う？」

そうだ。もう我は後戻りなどできぬ。魔族を統括する魔王を更に統括しているロード・コーシェク頂に君臨せし闇である、あの暁の闇殿の部下を城」と吹っ飛ばしたのだ。見つかつたら殺されるのが落ち、良くても無元の牢に繋がれるだろう。

「我は、われは……う、う……もつ帰れない……つか、帰らんぞ」

「…ねえ、僕のおうち来る?」

何を、この人間は言つておるのだ?

「僕ね、お友達がオーマしかいなーいの。だから僕のお友達になつて?」

「は? トモダチ?」

魔王をしていた我と、この人間がトモダチになる?

「独りぼっちばかりね。家族はいつぱいのがうれしいよ」

「我を恐れず、その小さき手を差し出した人間は、何も聞くことなく  
我を導いた。

漆黒の髪を厭わず、赤銅色の蛇眼を美しいと褒め、たわいのない話  
をする。

力弱き手はまさに人間だ、しかし温かくもある。

我が今まで居た場所では感じられなかつた温かさだ。

暖かな口差しの中、小さな手に引かれ導かれた先に居たのは

「おかえりおチビちゃん そいつ今すぐ捨ててきなさい」

「オーマー?..だめだよ。僕のお友達だよ。家族だよ」

「ダメダメ。捨ててこれないならボクが始まつけるよ」

「オーマー」

「そんな声出してもダメー!」

小さな子供に感化された悪魔オーマーだった。

「漆黒の髪に赤銅色の蛇眼、肌も蛇肌… 焦獄の火蛇だな？」  
イゼルドウガアル

「…いかにも。 我はリーセ」

「え、リセって言つて？ オーマの知り合いだつたんだ！」

「「…？」」

「わーい。 これで安心だね！ おじいちゃん達に言つてくれるね

小さな人間はとことこと走つていつてしまつた。

「相変わらずおチビちゃんは名前も聞かずに拾つてきて…  
イゼルドウガアル  
何で焦獄の火蛇と呼ばれる魔王が辺境の村に居るのさ？」

「… 魔王業はつこわつき止めてきたのだ」

「は？ なにそれ、何の[冗談]

「頂に君臨ロード・コーショクせし闇に、否、その他魔王の所業に耐えられなくなつてな…」

「魔族つて身内には情が深いって聞いてたんだけど？」

「フツ。 彼奴らは己ヒが第一だ。 他の者の事情など垣間見ん自己主張の激しい鬼畜ヒヨクどもだ！！」

「色々あるんだね。つて言つて世間狭すぎ悪魔ボクと、魔王さみが同じ場所に居るなんて……」

「ああ。そういう汝も今は忙しいのではないか？」

四方に君臨していいた聖魔ボクたちが入れ替わったと噂されているぞ」

「あー。それ結構微妙らしいよ。でもボクには関係ないし。  
知つてた？聖魔ボクたちって悪魔さみとは全然別の存在なんだよ。  
ま、これを魔王さみに言つたって仕様が無いけど。あの手に出で  
ないなら口くちにいていいよ」

微妙な雰囲気ではあたが、どうやら認められたようだつた。  
そして、説得の際にはオーマも加わり、我が口くちにいてもよいと許  
可が完全におりた。

城に居た時では考えられぬ程のんびりとした生活で、我にとつては  
この上ない至福の時だった。

ああ、家出してきてよかつた

魔術師がポリメシアに訪れ、そして去つてからまた月日が流れた。

僕がツラッティに襲われて大泣きしたのも、もう昔になつた。うん。今思えばすごく恥ずかしいよ。

僕が大泣きして眠つてから暫くはリセと会わなかつた。何だか落ち込んでるみたいで、ヒルオーネやゼロムに聞いても「放置しろ」と言われた。

珍しくオーマとミルギスも頷きあつてたし。何があつたんだろ？

まあ、兎も角。ツラッティはリセたちが退治して被害は出なかつたんだ。

ミルギスは一人でお座りができる、はいはいして行動範囲を広げていいく。

最近は悪戯も覚えてきて、その被害はゼロムが中心になつている。うん。

ゼロムが家の屋根の上まで、ミルギスに吹っ飛ばされた時は僕も驚いたよ。

ミルギスは、はいはいだけじゃなくて、ふよふよと自分で空中に浮く事が出来るみたい。

初めて見たときは、おばあちゃんと一緒に驚いて必死に下そうとしたんだよ。

ほら、落ちたら大変だから…でもリセに問題なつて言われてからまつといてる。

むしりどんどん力を使わせておかないと、暴走するからなんだって。

オーマは相変わらずミルギスの面倒は見ないで、村の子供達に勉強を教えてたりする。

僕もオーマに勉強を見てもらっている一人だ。勉強の内容は様々。文字とか、旅をする際に気をつけるべき魔獸や魔物についてとか…本当にオーマは色々な事を知っている。

同じ年には見えないよ…

オーマが教えるのは勉強だけじゃない。

壊れたものを修理したり、その修理の仕方を村の人達に教えたり。土木作業に従事したり… おおよそ外見とは似合わない事をしてるのでエルオーネが言つてた。

うん。オーマは女の子みたいな顔で、体格もスラッとしてるしね。  
…僕も人の事はいえないけど、でもちゃんと僕もオーマも男の子だから！

そして最近すっごいことがあった。

なんどりセが騎獸を何処からか連れてきたの！  
騎獸って言つるのは馬よりも早くて、牛よりも力があつて… 鬼も角！農作業や放牧を主体とする村にはいないんだ。  
大きな街や主要都市のお金持ちの人が飼つてるらしいよ。オーマが言つてた。

そういえば、リセは昔お城に住んでたつていつてたよね。

周りの事も召使がやつてたらしいし… わざわざ実家に帰つて連れてきたのかなあ？

因みに騎獸は全部で七匹いるんだ。

三匹は馬と似てる。でも毛皮じゃなくて、全身が鱗で覆われてるの。えーと。スケイル・ヒップスって言われる種族なんだって。

本当なら馬が四匹で引いていく大きな荷馬車を、たつた一匹で引い

ていい事ができるんだよ！

額には真っ赤な石が埋まつてて、すゞくキレイ。紅玉つて言つんだつて。

あと三匹は、犬っぽいの。アヌビスっていう種族なんだつて。

茶色のサラサラの毛皮で、体は牛くらい大きいよ。

初めて見た時は食べられそうで怖かつたけど、すゞく温厚なんだつて！

でも、もつと凄いのは歩けるのーー足歩行が可能だつてオーマが言つてた！！

大きな体の割りに細かい作業も出来るんだ。木にも登れるし、見た目ほど重いわけじゃないんだよ！

僕も一度抱っこしてもらつた。

ふふふ。ゼロムよりも大きくなれたよ！

最後の一匹は犬っぽいの。セイリオスつて言つ種族なんだつて。アヌビスとは違う真っ黒でふわふわの毛、もふもふしてて肌触りがいいの。

すごく珍しい種族で、空も飛べるんだつて！

一度空を飛んでるところを見せてもらつたよ。

普段は翼なんて無いのに、空を飛ぶときだけ、ミンミンと翼<sup>ヒント</sup>が出てくるの！

背中に鞍をつけたら、人を乗つけて飛べるんだつて！

ゼロムは驚いてたし、エルオーネはセイリオスを見て「ロウファと同じだ」とて言つてた。

あ、ロウファつて言つるのはエルオーネの一番田の相棒で、ふわふわでもふもふの毛が特徴の大きな犬だよ。

オーマは驚くよりも呆れてたかも…

珍しい騎獣ばかりで、大丈夫なかつてリセに言つてた。

オーマは何が不安なのかな？

朝食の準備を手伝つためにおばあちゃんの所へ行けば、おばあちゃんは「何でか困つてた。どうしたんだろ？」

ミルギスは昨日ずっとゼロムが面倒を見てたから、今日はお風呂までぐっすり眠つてゐるはずだし。

ゼロムも疲れてるから、多分、朝食ギリギリまで起きてこないだろう。

リセはおじいちゃんや村の人達に騎獣の世話とか好みを教えてるから今は居ないし。

「坊や。川でお水を汲んできてくれないかい。井戸の水が枯れたのか、なくなつてね。

村の真ん中に噴水があるからいざとなればその水を使つけれど全員がいつぺんに汲みにいくとなるとね」

「え？なくなつちゃつたの？…どうしてだろ？…うん。判つた。

川まで行つて来るね。そだ…オーマは…今は居ないんだつけ？」

「うん。判つた。どうしてだろ？…うん。判つた。

朝食ルストーのお家で食べてくるのかなあ？

あ、ルストーは僕よりも三つ年上の男の子で、魔王を倒す剣を作る

のが夢なんだって！

だからオーマから物造り…鍛冶屋になる為の修行を付けてもらつて  
るって言つてた。

鍛冶屋つて武器を作つたりお鍋作つたり、何でも出来る人のことだ  
つて、ゼロムが言つてたよ。

：今度、僕専用のナイフ作つてもらおつかな。

あの時のシラツティみたいに襲われないとも限らないし、お散歩する時もしもの為に…。

うん。相談してみようつと。

つと、話がズレちゃつた。水といえばエルオーネだよね！

「おばあちゃん。エルオーネに井戸の事を調べてもうりつよ」

「エルオーネに？あの子は薬師だから井戸とか調べても…」

「大丈夫だよ。僕、呼んでくるね！」

エルオーネは有翼人と水の精靈のハーフなんだよ。

水に関する事柄は色々と知つているつて言うし、お願いしても平気だよね！

僕は地下室への階段を一つ跳ばして駆け下りた。そして勢いよく地下室の扉を開ける。

「おはよつエルオーネ！お願いがあるんだ！！」

「あ…ちつさい勇者さん。頼むから地下室の扉は静かに開けてくれ。  
一応薬草だけじゃなくて、液体の薬も置いてあるし割れ物もある  
んだ」

「「」「」めんなさい」

「それで？俺にいつたい何の用かな？  
まさかカンザジいさんが発作起こして、ぼつくり逝ったとか言うなよ？」

「カンザジいちゃんはおじいちゃんと一緒にリセから騎獣のお世話についてお話ししたよ」

「朝から騎獣つて　　ああ。リセが連れて来たヤツか。  
確かに戦馬と言つ軍名のある鱗馬スケイル・ヒップスと比較的人間に寛容な魔獣の護獵アヌ犬ビッグ…」

「そう！後はセイリオス！ロウファと同じなんでしょう？」

「天狼族セイリオス…まあ、な。ちょっと違つけど」

「毛の色が違うだけで同じじゃないの？」

「平たく言えば天狼族セイリオスの白狼は防御に特化してるんだ。  
で、天狼族セイリオスの黒狼は攻撃に特化している。どちらも有翼人を護るためにな」

「え、護るつて何から？」

「気にするな。白と黒で得意な事が違うって事でいいだろ？  
で、俺にいつたい何のようだ？わざわざ朝食前に此処に来るなんて」

「あーあのね、井戸の水がなくなっちゃつたらしくて。ちょっと見

てほしいんだ！」

「井戸の水が、なくなつただと？」

「うん。オーマはルストーに連れてかれつちやつていないし。  
僕はこれから川までお水汲みに行つてきます！朝食はそれからな  
の」

「判つた。引き受けよつ。ほひ、早くしないと」

「うさ。じゃあよひしぐねー！」

今度はそつと扉を開けて階段を上げつて行く。  
ドタバタしたら、またエルオーネに怒られちゃうからね。

## 第十二話

薄手の上着を羽織、僕は外へと出る。

勿論、水汲み専用の桶は忘れてないよー。

あ、ちょっと寒いかも…今のこの時期は季節の変わり目かな。

段々と冬の寒さを風人ウィーティが運んできてる。

村ではそろそろ薪のを集めだしている。やはり、冬を越すのにやっぱり薪は必要だしね。

でもオーマやりセイ、魔法や魔術で村に有る家を改築しようとか話してた。

うん。

僕達の家だけがつり防寒設備着いてるのばずるいもんね。

「あーおはよー！」

120

真っ黒な毛のセイリオス セイに挨拶をした。

地面にお腹を付けて寝そべっていたセイは、僕を見てのっそりと立ち上がった。

うわー。もつふもふの毛だー。

でも何でお家の前に寝そべってたの？

「セイ。どうしてここで寝てるの？  
ちゃんとセイのお家があの方にあるでしょ。ここ寒くないの？」

セインのお家はちゃんと牧草地に面している所に小屋を建てた。

スケイル・ヒップスやアヌビス達もそっち側に居る。

不満なのかな？

僕がそう思った事が判つたのかそれとも寒くないのか、セインは頭を横に振る。

「えっと、お散歩してたとか　　あ、もしかしてエルオーネに会いに来た？」

「わふっ！」

「そりなんだ！エルオーネはまだ地下室に居たから、でもそろそろ出てくると思うよ。

今ね、井戸の水がなくなっちゃった事を調べてくれるよう頼んだから、一緒に行くといいよ」

「わふ！」

「じゃあ、僕は川まで水を汲んでくるね！寒かつたらお家に入つてね！」

僕はお家の扉を開けたままにして、川がある方へと歩き出す。パタン。と後ろの方から音がした。セインがお家の中に入つて扉を閉めたのかな。

リセの連れてきた騎獣は、他の人への気遣いとかできるからすごいと思う。

あれ…？

何か動き辛い…

ちゅうと後ろを振り返ると、セインが僕の上着の裾を噛んでた。

「セイン…裾を噛み切らないでね？おばあちゃんは怒ると怖いんだよ、本当に」

セイン、お家に入ったんじゃないんだ。

え？

何で、僕のお洋服に噛み付いてるの？

「…エルオーネに会いに来たんだよね？それとも僕に用事があったの？」

僕はこれが川に水汲みに行かなくちゃいけないから、後にしてもらえる？」

セインは噛み付いていた服を放して、僕の隣に並んだ。  
これは僕と一緒に川まで行くって思つていいのかな？  
でもエルオーネに用があつたんじゃないの？

「わふっ」

「わふっー！」

「あ、ロウファもいた！」

白と黒のセイリオス。ロウファとセイン。  
もつふもふの色違ひの毛。大きさは、少しだけロウファが勝ってる。

「ロウファはエルオーネと一緒に行かないの？」

首をこてんと傾げてから、ロウファもセインとは反対側に並んだ。大きな犬に囲まれた。

えへへ、ちょっと暖かいかも…じゃないくて…

「一緒に川まで行くの？」

「わふっ」「

一匹とも仲がいいなあ。

そんなことを僕が思つていて、ロウファが低く屈んだ。セインは僕の持つていた桶のとつての部分を咥えてじっとしている。え、え？ 何？

「えーと。乗つけてくれるのロウファ？ セインは桶を持って行ってくれるんだね？」

僕の確認に、一匹は首を振つて答えた。

それからが早かつたよ！

だってロウファが翼をミシシ压したと黙つたら、ふわあーって飛んだの…！

「うえ？ え？ …すつ、こ…す」こよ、早い…空飛んでる…！」

わくわくしてこめりに川が見えてきた。

川は相変わらずキラキラきれいなんだけど  
でもなんかへんなんだよね……？

シコッタ。ヒトロウファヒセインが着地して、僕もするつヒロウファ  
アから降りた。

それから周りを見回す。だつて昨日と違うんだもの。  
何が違うのかって言われたら、ちよつと説明できないけど…  
川は、水はきれいなまま、でも

僕は川をのぞきこむ。何が違うのか、知りたくて。  
ヒロウファヒセインも僕の両隣について、一緒に川を見ていた。

「やつぱり……違ひ氣がする。井戸がかれけやつたのと関係あるのか  
な？」

「ほひ。井戸が涸れたと……水守の怒りでも置つたのではないか」

「え？」

ヒロウファヒセインに聞いたはずだったのに、他のヒートの声がした。  
あれ……？何でこんな冬に川の中に入っているの？  
と、こうか……『青』を持つヒート。ふよふよと周りに水が浮かんでる。

「え～っと、エルオーネの家族のヒト～」

「 何故、やつ思うのだ？」

なぜって、だつてロウファは威嚇してないし、セインも普通にしている。

髪の色もエルオーネに似ている青い色なのに。  
あ、でも背中に翼はないや。じゃあ、誰なんだ？～。

「色が似てたから、なんだけど。え～っとおじさんだあれ？」

「おじい～！」

「知らない大人のヒトはおじさんって呼びなさにって、おばあちゃんが言つてたよ」

「わ、わたしが、お、おじい～？」

「ねえ、だれなの、おじさん」

「ええい！私には力「どの面下げて」にこるんだ、ん？ヒスオ」

笑つてた。なんて言つたか、笑つて林檎を握りつぶした時と同じ。  
あ、でも今回はどうちかつていつと、ゼロムをいじつてる時と似た  
感じかも。

すく生きした笑顔をしているエルオーネがいた。

「ヒルオーネ知り合いなの？」

「はつはつは。『ほこ殴りしたくなるような面のヒスオなんて知り合  
いに欲しくないぜー』」

「あ、知ってるー。ヒスオって、『ヒステリックで全くダメな男』の  
略でしょー。」

「よく知ってるな。これはちょっと昔に流行った水守の私語なのに<sup>ウンガイ</sup>」

「おじいちゃんが時々ボヤいてたよ。『ヒスオがうざつたいんだよ  
ね～』って」

「…グレーン。只者ではないと思っていたけれど、ほんと、何者  
なんだ？」

「え？ おじいちゃん？ おじいちゃんは婿養子だよ。

昔はおばあちゃんをモノにするのに、30人切りしたって言つて  
たよ！」

おばあちゃんは今でも楽しくおじいちゃんと馴れ初めを話していく。  
ポリメシアの村ではすでに伝説になつてゐる。

あ、伝統の間違いだ！

一人の女の子に複数の男の人気が告白したら、バトル開始なんだって。  
でも今のところ、おじいちゃんの30人切りがぶつちきりで一番多  
いって言ってたよ。

「僕も大きくなつたら、おじいちゃんみたいに30人切りしてみたいなあ」

「…ちつさい勇者さんはそのままでいて欲しいんだけどな」

「き、貴様ら！いい加減わたしを無視するなっ！！大体わたしはヒスオではないわ！！」

カルローン＝シュー＝テリナス＝カンツォーレと言ひ名がちやんとあるんだぞ！」

しかもエルオーネ！貴様はわたしの世話になつておきながら、なんなのだその態度はつ？！」

「はつ！片腹痛いな。いつ、誰が、どんな理由で、お前なんぞの世話になつた？」

だいたい事ある毎に俺にひつついてくるひつつき虫が、でかい口をきくな。

そもそもお前精霊としての自覚があるのか？この子の前で真名を明かすなんて…

言つておくが、この子はいつも見えてかなりの実力者だぞ。

悪魔を制御したり魔王を拾つてきたり伝説の一族を発見したりで、本当に何の用だ？」

「うぐう」

うわあ… エルオーネ、最後の方は一息で言い切った。

悪魔とか伝説の一族とか言つてゐるけど、そんなウソ付かなくつたていいのに。

僕もポリメシアの皆も普通の農民だよ。えへつと。カルローンとかいうおじさんは悔しそうにエルオーネを見てる。

それから僕を見て、ものすゞくおでこにしわを寄せた。

「ここに華人<sup>ザウーデイ</sup>がいるだろ？ 風の精靈王<sup>シルフ</sup>の末姫が…」

「つ？！」

風の精靈王<sup>シルフ</sup>って、末姫ってミルギスのこと？

え、どうじょ？

でも同じ精靈だしミルギスにヒドイ事はしないよね？ だ、大丈夫だよね？

「何で風人<sup>ミルギス</sup>を探すのが水守<sup>おまえ</sup>なんだ？ こういうのは同属が探すべきだろ？」

「本気で言つているのかエルオーネ？ だつてあの人の村には

」

「…あ、あーうん。それは、確かに天敵<sup>ヤツラ</sup>がいるけどね…まさか俺を呼び出すために井戸を涸らしたのか？ 自殺行為だぞソレ。

間違つて他のヤツ来たらどうするつもりだつたんだ？

言つとくが、あの村の人間　主にこの子に手を出したら殺られるぞ、間違いなく」

エルオーネ。なんだか物騒な言い方になつてない?  
といつも、ミルギスのお迎えにカルローンおじさんは来たつてこと  
だよね。

じゃあ、ミルギスのお父さん達はやつぱり探してるんだ。

「あの……」

「　　と、いうが、ミルギスとは……?」

「え?  
「あ、「  
「まさか、「

「カルローン、ちょっと村外れで話さないか。つてか話を聞け」

エルオーネが強制的にカルローンおじさんの首をつかんで、森の奥まで引きずつて行つちゃつた。

「僕はお水を汲んでお家に帰つたほうがいいんだよね?」

「わふつ……」

ロウファとセインが力強くうなづいてくれた。

## 第十四話

「で？どうしてお前がここにいる？」

十人中十人が見惚れるほど美しく艶やかに笑うエルオーネ。

「（ほつ…ぐ、ぐびが、じま）で」

「あー、はいはい。ほら、とつと本題に入れ」

少年から離れ、エルオーネは森の開けた場所までカルローンを引き摺ってきた。

文字通りカルローンの首に左手をかけて引き摺ってきたのだ。青銀と青が対峙する。

「こほつ 先ほども言つただろう。風の精靈王の末姫についてだ。

しかし、すでに手遅れのようだが、な…いつたい誰が名を与えた？いや問い合わせ直そう。何故名を与えたのだ？魔王が！上位悪魔がいるあの場所で…！」

「不可抗力だ！俺とて止める暇がなかつた！！あの場所には確かに上位悪魔がいた。

魔王、いや、元魔王がいた。でも仕方ないだろう…夜の一族がある伝説の一族が認めたんだ！」

「……はあ！？』

水の精靈であるカルローンが目を見開く。驚きのあまり開いた口が塞がらない。

精靈にとって、否。精靈だけではない万物において、名とは己の存在を確固たるモノにする力がある。

そして名は力を与える重要な役割があると同時に、その力を制御する役割もあるのだ。

故に、名は重んじられている。精靈は人間のように同胞を縛り付けることはしない。

名は愛情を籠めて『えられるものと彼らは知っているから。しかし人間は違う。魔術に精通している者ならば、また精靈を糧とする魔族ならば……

力を宿す精靈王の御子にわざと名を『え、その名をもつて生涯を縛り付ける事ができるのだ。

カルローンはづきづきと痛み出した米神に手をあてた。

「風の精靈王は嘆くだろう……下手をしたら水の精靈王とも事を構える事になるぞ。シルフ

『有翼人との混血児が一計を案じたのではないか？』とな。

まさか末姫の父親が自分の子を探していないとは考えなかつた訳ではあるまい

「ああ。あの子は末姫の『両親が見つかるまでと、ちゃんと分かつ

ている」

「どうか夜の一族か…何故に古の昔に姿を消した伝説がここに？しかも魔王や悪魔がいるのだろう？華人だと知らぬわけではあるまい。

喰い殺されても可笑しくないだろ？」「どうしてお前は平然としていられるのだエルオーネ？！」

「そのことについて誤解というか、公然の了解というか…ともかく！あの村では人に交じって生きることが絶対条件なんだ！それが破られない限り安全だ！！」

「安全？ 精霊の天敵とも言える者達がいるのに安全だと？！」

「いいか、よく聞けカルローン。有翼人と精霊の混血児である俺がだぞ。

ものすつひとつ珍しい俺が今まで無事だった理由は…何不自由なく不安もなく過ごしてこられたのは、あの村がポリメシアだからだ！

あの村に住む、ある少年が、俺達を受け入れてているからだ。人間ではない俺達を、な」

「…先ほどの小僧が、そうなのか？」

「そうだ。あの子がいるから元魔王や蠢欲の悪魔はおとなしくしている。

最強と謳われた伝説の夜の一族すら笑つて指差しているんだぞ。というかだ、最強の一族すら普通に（俺達が）足蹴にしているのが現状だしな…」

エルオーネがそう締めくくると、カルローンは顔を歪ませて固まつていた。

それもそうだらう。

精靈の天敵がすぐ傍にいるにも拘わらず、その恐れている天敵を足蹴にしている等、到底信じられない。

しかし希少である有翼人、そしてその有翼人と精靈の混血児。更に言い募れば、すでに成人しているエルオーネが無事に生きているのが何よりの証拠となつていて

精靈は基本的に同胞や同属にはおおらかでいる。

しかし混血児となると意見が分かれるのだ。そしてその大半が、排他的となる。

例えそれが、アカ・ヒラス・ファ・ムート皇位精靈の子であつても…

「アカ・ヒラス・ファ・ムート水の皇位精靈と有翼人の混血である俺は稀有だらう？」

ポリメシアに来るまでは随分と命懸だつたぜ？まさか同属なかまに売られるとは思わなかつたし。

ヒーシャやロウファがいなかつたら俺は今頃どつかの金持ちの屋敷で女とされて飼われてたろうな。

ここに来た時は　いや、あいちつさに勇者さんに会つてからは、俺は日々平穏に過ごしているよ」

「もう、怯える事がない、そういうのだな…」

「さあ…な。おせりゅうの帝位精靈と厭味つたらしく吐き捨てられなくなつた。

俺の背にある翼を、誰も商品とは見なさなかつた。青銀の髪を見ても怯まなかつた。

薬草の知識があると言つても、利用価値があると村人は誰も考へついていないようだ。

人の姿ではあるが、人外とわかるのに、彼らはただ俺が普通に生活する事を頷いた。

全て、何もかもあの小さな少年が、俺をただ一人の俺と認めてくれたから、だから

「

帝位精靈 ハイブリット 皇位精靈 ファ・ムート と他種族との混血児を表す位だ。

ほとんど生まれてくることはなく、それ以上に生き残る確率は少ない。

精靈からは差別的な意味を持つ象徴であり、他種族から見れば利用価値のある商品と認識される。

エルオーネのように成人しなにも傷が残っていないなど、まさに奇跡だった。

「末姫のことも大丈夫だと言つのか？」

まだ疑うようにカルローンはエルオーネを睨む。

「ああ。寧ろ下手にちよつかいを掛けても、逆に返り討ちにあって大変なことになるぞ。

俺は水の精靈王の怒りを買いたい訳ではないし、親父を困らせたい訳でもないからな」

エルオーネはそう言つて、カルローンに背を向けた。  
ずいぶんと長話をしてしまつたらしい。

肌寒かつた朝の空気が、太陽の光を受けて暖かくなつてきていた。

数歩だけ歩みを進めたエルオーネだったが、ふと、カルローンに向  
き直つた。

「言い忘れていたが、井戸の水は元に戻しておけよ。  
あと末姫ミルギスの事が心配なら、ちゃんと村の真正面から入つてこい。  
でなきや俺は命の保障はしないぜ。ついこの間も精靈バカラが悪さをして消されたからな」

今度こそ振り返らずに村に戻つていくエルオーネ。  
そのエルオーネの背中を見送るカカルローンは、深くため息をついた。

朝食の時間も過ぎ、村の中央近くにある大きな噴水の周りには子供たちが集まりだしている。  
そんな光景を横目に、エルオーネはポリメシアの村で一番大きな家の扉を開いた。

「あれ… エルオーネ誰かと話してたんでしょう。いいの？ そのヒトほ  
つたらかして」

「オーマ、帰つてたのか。いや、アイツは俺に用があつたわけじゃない」

「だからだよ。君以外の誰かに用があつたって言うなら尙更だね。言つておくけど、外にリセが出て行ったから…おチビちゃんを探しに」

入つてすぐの、大きなリビングでくつろいでいたオーマが首を傾げながらエルオーネに言った。

エルオーネは中を見回し、青銀の細い眉を顰める。

何故　　自分よりも早くに戻つているはずの少年がいないのか。  
どこかに寄り道をしているとも思えない。しかし、ならば何故、少年は戻らないのか。

ふと知己である水守の顔が浮かんだが、少年に危害を加える事をするはずがない。

己はそう言い聞かせたではないか。ではいつたい誰が…？

エルオーネは手を口元にやり考え込む。

「　　まだ、帰つてきてないのか」

「うん。おばあちゃんも心配してた。『飯の時には戻るつて言つたのにまだ帰つてこない。

念のためにゼロムを起こして外の様子を見に行かせたよ。ミルギスはおばあちゃんと一緒。

因みにボクはお留守番。井戸の水が枯れたんだってね。君の同属おなかもの仕業？

「ああ ロウファとセインがあの子に付いている。何かに巻き込まれる事はないはずだ」

「有翼人の守護獣である天狼族<sup>セイリオス</sup>…そう言えれば『魔巖の鎖』ってさ捕縛系の魔方陣で、守護獣である彼らにとつて一番の苦痛なんだよね？」

しかもこの間、近くの村に商人達が滞在してたんだって…その時におじいちゃんも様子見にいたらしく」「

「何が言いたいんだ…」

「どこの元魔王<sup>バガ</sup>が騎獣連れてきてたよね。  
しかもおじいちゃん達は、何の疑問もなく彼らを使つてるんだから…人目を惹くと思わない？」

「それがなんの」「

「エルオーネつてさ、お子じちゃんに拾われた時、盗賊に襲われてたよね」

オーマの言葉に、エルオーネは顔を顰め、記憶を引きずりだした。

確かに、このポリメシアの村にたどり着いた時、盗賊団の数名に襲われていた。

エルオーネは盗賊団から逃げ出したのだ、誰もいない、誰にも見つからに場所を目指して。

しかし見つかってしまった。もつだめかと思つたその時、エルオーネは少年と出会つたのだ。

小さな少年だった。けれどエルオーネを助け出した、小さな勇者でもあった。

盗賊数名は少年が駆け付けたことによつて、自分の田の前から消えていったのだ。

間違えるはずがない。確かにこの田で見ていたのだ。

小さな勇者は、やはりただの何の変哲もない少年だったけれど、少年の家族であるオーマやリセが、きっと少年を守るために力をふるつたのだろうとエルオーネは結論付けていた。

「つーしかし、田の前で消えた！お前たちだつて知つて　　」

「あの時ね、ボクやリセは一切手を出していくな」よ

「な、に…じゃあ、誰が？」

オーマやリセの一人がどういった存在か、まだどういった思いを抱えているのかを知つていた。

だからこそ、少年の田の前で人が消えていつても後々納得することができたのだ。

それなのに

「だから、リセとゼロムを走らせたんじゃない」

第十五話

えへっと…僕は何でここにいるんだろ？

僕はロウファとセインと一緒に川までお水を汲みに行つて、それからエルオーネの知つてゐるおじさんに会つて…

僕は邪魔しちゃいけないと思つたから、先にお家に帰るとして…えつと、それから、それから

あ

よし、ひとまず現状把握からだ！

周りを見回してみると木の箱とかある。

北平氣

もつねみの山や木を隠したりしてゐる。

あれって、お、檻？

なんだか奥の方に白くてもこもこしたもののがそもそもしてゐる。  
もしかしてロウファかな？

そつ組ひでロウガフアひで新幹線を呼ぶもひとじたひ、ロガ「わいわ？」してた。

「...」  
「...」  
「...」  
「...」  
「...」

あ、これさるべつわっていづやつだ！

アガサ・クリス蒂の「死の告白」

声が出来ないよひすみんだよね。地味にヒヤヒヤじめだと黙つて

次に手足を動かそうとしたんだ。でも手が痛いかつた。  
えっと、なんか背中で腕が縛られてるみたい。つと…足も縛られて  
るし。

לענין עניין

う…なんだか、ギチギチと締まつていいく感じがある。  
あんまり動かないほうがいいのかな?  
でもずっとこのままついでいつのはダメだよね。さつやの檻の中身も  
気こなるし。

ガタンツ

「おれ？」

檻の傍まで転がつていこうか考えていたら、突然建物が揺れた。

え…この揺れは建物とかじゃない？

縛られている両足で軽く床を叩く。ぱりぱりと音が返ってきた。  
うん。これってもしかして地面とくつついてない。

しかもずっと揺れたままだしカタマトと動いている音も聞こえたま  
ま、馬車かな？

おじいちゃんの使ってる馬車よりも大きくて、広くて、じめっとし  
ててやな感じがする。

んーと。ゆつくつと転がってけば、あの櫻のところまでいけるかな?  
僕がうつ伏せに寝転がった時、シャツと音がして、あたりが白くな  
つた。

「ハハ?..」

め、目が痛い…急に光がはいつてきたんだ。目の奥がひりひりする。  
でも人が寄ってくる気配がするから、ここは意地でも目を開けてお  
くべきだよね。

どんな人か気になるし。もし『悪いヒト』ならすぐ逃げなきゃ。  
ただの『悪い人』ならオーマヤリセがすぐに見つけてくれるけど、  
『悪いヒト』だったら食べられちゃうって言つてた。

「おー。起きたか坊主。なら一度いい

「?.

「しつかし、こんな平平凡凡な顔の坊主がなあ」

「？ う？」

「ま、いいか。暴れるなよ。脱がすのが面倒だからな」

「…？」

脱がすって、なに？

うつすらと目を開けて光の中の人を見上げる。

黒い髪で…顔は影になつて見えないけど、きっと、瞳も黒いんじやないかな。

「いや～。そりゃって不思議そつに見られると、なけなしの良心が痛むんだけど」

「…？？？」

え、何でこの人近寄つてくるの？

何で両手をワキワキ動かしてるの？

あ、顔が見えた うん。普通の人だ。珍しい髪と目の中の色の普通の人だ。

「ははは。オレ様の美貌に言葉もないか？」

「ううん」

黒髪の人の言葉に、僕は首を横に振る。

だって、ねえ。美貌つてほどの美貌なの？  
エルオーネの方がキレイだ。ゼロムの方が印象に残るし。オーマは  
可愛い。リセの方がカッコいい。

「…まつこから否定されたのは初めてだぜ、坊主」

なんだか悲しげに呟いてたけど、なんだろ？

僕は首を傾げて男の人を見上げた…ちょっと首が痛いかも。  
反転して、あおむけになる。

うん。こっちの方が楽に男の人を見れるね。

「おいおい。ずいぶんと余裕だなあ。つーかよ、背中痛くねえのか  
？」

背中よりも首が痛くなってるんだけどなあ…  
ぐるぐるわをしているから唸ることしかできないけど。

もぞもぞと動いてみた。お腹に力を入れて勢いよく体を起してみよ  
う！

いつもゼロムがやっているしわ。きっと、多分、おそれく、僕にもで  
きるはずだし。

「うーー…………つえ」

「あー…今起してやるからな。そんな泣きそつた顔すんなよ。  
たまにはこいつ言つ時もあるつて。ああ、ほら。ついでに口のもと  
つてやつから、な。泣くなよ」

「ううう。どうして僕のお腹はぶにぶになんだり。首はお腹がぼ  
いぼい割れてるのに…」

「…………それはアレだアレ。お子様だから仕方ない。にしても、筋  
肉隆々な御仁達なんだな坊主の知り合いは」

「リセもオーマも筋肉なんてついてないよ。でも力を入れると聖剣  
くらい折れるつて言つてた。

ゼロムは簡単に刺さっちゃうから、刺さる前に叩き折るつて言つ  
てたなあ。

あ、そつ言えばゼロムは筋肉ある方なのかなあ？力持ちだし、グ  
レイトウォーラー切り倒してたし

「…………あつれえ？グレイトウォーラー岩の大樹つて魔術でも切り倒せない木だよな？  
それともオレ様の聞き間違いか？今、なんか、たつた一人が切り  
倒したように聞こえたんだけどよお」

「うん？そうだよ。リセのストレスが溜まって力が暴走しちゃった  
せいで、お家が半分壊れたから  
オーマがゼロムにグレイトウォーラーを持つてくるようつけて言  
つてたよ。

またリセがストレスためて暴れても、ちょっとややつとじや壊れ  
ないようこしようねって。

それから皆でお家を改築して、お部屋を増やしたんだ。ポリメシアに来たらすぐに分るよ！

でも、お兄さんは何で僕を縛つてこんな馬車…でいいのかな、こに乗せてるの？あと何で僕が服を脱ぐの？

とんとんと会話が弾んでいく。

うん。

このお兄さんは『悪いヒト』じゃないね。でも『悪い人』だとは思う。

もしもいい人だったら僕のことを縛つたりしないはずだしね。

「さすが有翼人が住んでいた村だけあるな。そんな化け物までいたのか…」

「むつ。化け物なんてポリメシアにはいないよ！皆ちょっと力持ちだつたり

頭が良かつたり、手先が器用だつたり、珍しいのかな。でも、それだけだよ！」

「…なあ、坊主。オレ様って珍しくね？」

「うん。僕、目が黒い人初めて見た」

「あんな、オレ様は実は魔族との混血児なんだよ。だからオレ様の髪も眼も闇色なんだぜえ。どうよ、す”じくね」

「へえー。魔族って人より強くて何でも食べれちゃうヒト達だよね。でも黒い色がすごいのかはよく分らないなあ。だってリセも黒

い髪の毛だし

あれ… そうするとリセも混血児ってことになるのかな?  
だってリセの目の色は真赤 鉄を焼いた時の色みたいな目だつ  
たけど、どうなんだろう?

うーん。でもリセは僕達と一緒に暮らす前はお城にいたんだし。  
偉い人の子供だったんだよね…

「マジで…?」

お兄さんがびっくりしてる。

「何でおどりこてるの?」

「いや、だってな…あー。どうして坊主がこんなに余裕なのか分  
かった気がした」

「?」

「魔族が近くにいたからオレ様のことを怖がつてないんだろう。  
でもなあ有翼人の坊主、よく聞け。オレ様はジューードだ。」

『漆黒の爪牙』って呼ばれてる、半人半獣の盗賊ジユードだ

』

えーっと…僕はただの農民なんだけどなあ。

間違ってるよね。絶対に勘違いしてるよね、この人。

有翼人ってエルオーネのことだよね。

じゃあ、この人は僕とエルオーネを間違えて、僕をここに連れてきたのかな？

ああ、だからさっき服を脱がそうとしたんだ。背中に羽があるかどうか、確かめたかたんだね。

僕とエルオーネは全然似てないのに。

「盗賊の人なんだね、うん。ジユードさんでいいの？」

そういうたら、なんかジユードさんはぽかんと口を開いてた。

なんで？

## 第十六話

「いやいやいやいやいや。ちよつとまじよ、坊主！  
何で普通に会話を継続しようとしてんだよ。ここは怖がるところだ  
らしつ！」

「え、なんで？」

「こや、普通はよお、賞金首が目の前にいたら捕まえるか怖がるか  
するだろ？」

盗賊ジードは『漆黒の爪牙』って呼ばれて国家レベルで指名手  
配されてんだぜ。

しかも騎士団とか特殊部隊の魔性討伐軍とかすらも相手取れるわ  
けよオレ様。

けつこお強いんだぜ、マジで。有翼人誘拐の依頼とかされるくら  
いにはな。

なのになんで坊主は普通にオレ様と話をしようとしてんだ?  
ここは命乞いとか、これから自分がどうなるのかとか焦つてオレ  
様に聞くところだろ？が！」

指名手配つて、悪い人がなるものだよね。

ジードさん國から追われてるんだ。

「大変なんだね……？」

あれ、そう言えばゼロムも故郷から逃げてたんだっけ？

じゃあゼロムも國家レベルの指名手配犯？

ううん？でもゼロムって農民だって言ってたし…よくわかんないなあ。

「指名手配されても、ゼロムはいい人だよ？」

「馬鹿にされてんのか、純粹培養液にひたすら浸けられて育った坊主の天然発言なのか…」

「一かゼロムつて…今一わからねえ。あーっと、ともかく！背中見せる。」

運が良けりや男として鑑賞用で売つてやる。運が悪けりや女にして愛玩として買われるからな」

あ 人買いの人なんだ。

ずっと前にエルオーネにヒドイ事をした人達と同じ事をしてるんだ。でも、ジユードさんの言つている意味が分からぬ。

ジユードさんは僕の上着をすると脱がして、上の服に手をかけてきた。

「ジユードさん。僕は男の子だよ。男の子は女の子になれないよ。大丈夫？」

「だ・かーら・！有翼人は両性だろ…手順を踏めば男にも女にもなれんだろうが！」

何で有翼人おうよくがそんなことを知らないんだよ。一族の特性だろう。まさか親から何にも聞いてないのか。ああ、だったら頷ける。ここまで無防備なわけがな」

「僕のお父さんもお母さんも、僕が小さい時に遠い処へ行つたよ？」

おじこちゃんが僕は小さいからまだ会いに行けないねって言つてたもの

「…は？」

ジューードさんの手が止まつた。

うん。僕が小さいからお父さんにもお母さんにも会えないんだよね。

ああ、早く大人になりたいなあ。

そうすればお父さんとお母さんに会いに行けるんだもの。  
でもこの話をおじこちゃん達にすると、なんでだか皆困つたよつて  
笑うんだよね。

どうしてあんな顔をしたんだろう？

あんまりにも困つていたから最近はいつも風に話さなくなつたんだ。  
だ。

村の畠も僕のお父さん達の話はしないんだよね…  
本当に遠いところに行つちやつてるからなんだよね、きっと。

「どうしたの？」

「坊主、お前、親が…亡くなつたんだな」

「？　ねえジューードさん。なくなつたって、僕はなにも無くし

「なに？」

「なつ……お前、何言つて、」

ジユードさんが僕の肩を掴んでガクガクゆする。  
なんだ、痛そうな顔をしてるんだね？…

「う。

わっと氣持の悪いこと。

「アリサでこじてもいいやつ。」

ぐねぐねと回る景色の中、懐かしい声が聞こえた。

「！　何者だ？！」

「俺が何者か……こいつ、手短い語りやね？」

数年前、突如として現代社会からじつに放り込まれ、必死に日々つましく生活をしていた俺。

なんか知らん内に勇者と祭り上げられて、各地のモブ…モンスターをハントせざるおえなかつた俺。

しかも有名になりすて、勇者の名を騙つた偽物として指名手配された経験のある俺：

あ、ちゃんと俺が勇者に祭り上げられた本人だつて事は証明して誤解は解けたけどな！

で、どつかの地方にいたりまじドラゴンを根性と氣合と意地で倒した俺！

竜の逆鱗すらも打ち碎く！俺の名は、霧間夜キリマ・ヨル ヨルン・キリマって言えば分るか？

「ヨルン、キリマ…まさか、そんなバカな。こんな辺境の地に竜殺リヤク ンスレイヤーの騎士だと？！」

「日本男児なめんなつ…おとなじくお繩につけええいつ…！」

「つぐー！」

ヨルン兄さんが目の粗い繩をジューードさんに投げつけた。

それからは簡単。

いつもゼロムがリセやオーマにされてるみたいに、ジューードさんも芋虫になつたよ。

「うわあ。ヨルン兄さんの七つ道具が増えてる」

「ああ、最近ウエスタンに田覚めてな。ところでコイツ誰だ？なんできみつこはこんな裏道にいるんだ？つーか、なんの『ひじ遊び？』

「ヨルン兄さん。

ジュークさん氣絶しちゃったよ。

あとね、遊びじゃないよ。気がついたらここにいたの」

「…………ま、いいか。怪我ないし。なんもされてねーよな？」

「うん。田が回っちゃつただけで、平氣だよ」

僕はヨルン兄さんに今までの事を話した。そしたら兄さんは暫く動かなかつたんだ。

ただ固まつてた間にリセが暴れるとか、オーマが笑つとかブツブツ言つてたなあ。

「あー、うん。分かつた。コイツは突きだそつ。

何よりも俺の為に！リセ辺りならコイツの親知つてそうだし？」

「リセはジュークさんのお父さんたちと知り合になの？」

「あー。うん。多分。だつて魔王様だしね？」

「マオーサマー……？」

「発音がちょっと違つて。ま、もうちょっと大きくなつたら話してやるよ」

そつとヨルン兄さんはジユードさんを抱っこしたんだ。  
それから小声で何か言つてたけど…僕には聞こえなかつた。内緒話  
はするいな。

「あー。あー。ジユード君に告げる。無駄な抵抗はやめなさい。  
ちみつこに怪我させなかつた事は情状酌量の余地があるから言い  
分け聞いてやる。  
でもこつから逃げることは許さない。赦されない。よりも寄つ  
てあの子を狙つた。  
リセからキツーいお叱りと、オーマからツラーア尋問?を受けて  
もらひ。拒否権はない」

「大人一人分の大きさの剣。刀身は空色。額には水守の加護<sup>ウンドイーネ</sup>:  
竜殺しの騎士<sup>ドラゴンスレイヤー</sup>がこんな辺境にいるとはな。情報収集不足だ。オレ  
様もやきが回つたか?」

「まあ、人のいない場所を求めてきたならここは最適だろうけどよ。  
ほんとーにお前は運がねーよ。  
焦獄<sup>イゼルドウガアル</sup>の火蛇<sup>オセルダ・マイティス</sup>と蠱惑<sup>ミディアン</sup>の悪魔、あと夜の一族が共同保護してちみつ  
こを狙つたら、なー?」

「は…？お前、いま、何を…ま、待て！？」

今ものすつごい名前が出てこなかつたか？！焦獄の火蛇？！イゼルドウガアル

蠢欲の魔魔！！？夜の一族！！！伝説がこんな辺境に

つ

「がんばれワカゾー。君ノ明日ハ真ツ暗闇ダ。HAHAHAHA！」

「嘘だ！ウソだと言つてくれ竜殺しの騎士！」ドラゴンスレイヤー

親父に殺される！むしろ親父が殺されるつ！－！頼むから嘘だと言つてくれ！！」

「HAHAHAHA！」

## 第十七話

「お、ちみつ！」。あそここじるのゼロムっぽくねーか？」

「あ、本当だ！…ゼロムー！…」

金色の頭がひょこひょこ揺れながら近づいてくる。  
あれ、ゼロムが片手で持ち上げてるのって…

「ゼロム…何で、え、え？あれ…エル」

「ゼロム、何でお前が俺のハニーを抱き寄せてるんだ？」

僕がエルオーネの名前を言い終わる前に、ヨルン兄さんは「すい」と  
ゼロムの前に出た。  
あれ？

ヨルン兄さんがいつの間にか背中にあつた大きな剣を鞘から出して  
る…  
ジュードさんがなんかフルフルしてるし…ヨルン兄さんはブツブツ  
何か言つてるし

僕はヨルン兄さんの背中しか見えないから分らないけど  
ゼロムの顔がだんだん青くなつていぐ。

「待てヨルン。儂の話を聞け。魔力を高めるな！剣を抜くな！！詠

「呴をやめんか？……」

ゼロムが片手をわたわた振りながらヨルン兄さんをなだめる。それから今気づいたみたいで、地面に転がされたジュークさんをじいと見た。  
エルオーネはゼロムに抱っこされたまま。寝ちゃってるのかな？全然動かないの。でも土埃が付いてるだけで大きな怪我はしていないのかな？

「H A H A H A H A ! 僕つてけっこー独占欲強いんだよなー。  
何でハニーがお前に抱かれてんの？ってかなんでこんなボロボロ？」

「一戦やらかしたらしげで で、そっちの黒いのはなんだ？」  
「あー。なんか盗賊だつてよ。ちみつこ狙つてたみたい」

僕がエルオーネを見てたらヨルン兄さんが事情をゼロムに話した。でもちよつと言つてることがへン。僕、さつきまく説明できなかつたのかも……

「ちがうよ。エルオーネと僕を間違えたんだよ、ヨルン兄さん

「「は？」」

「だってジュークさんが言つてたよ。僕は有翼人なんだろって

「つまり… てめーは俺のエルオーネを狙つてこいつまで来たと?」

「ヨルン落ち着け。だから構えるなつ……！」

ゼロムがエルオーネを抱えたままヨルン兄さんの大きな剣を受け止める。

なんだかジュウジュウ音が鳴つてお肉が焼ける匂いがしてるので…

「…」

「あー、ゼロム。俺がただこの剣を振り下ろすだけなワケないだろー。

水の加護持ちだからって、それ以外を使えないと思つなよー。だてにRPGはしてねーし

「あーるぴー? ま、それより、お前だけはオーマあやまつりリセの用にならんと思つとつたのに!」

どこでこんな捻くれ、痛つ! ちよ、マジでしゃれになつとらんぞヨルン! 儂の掌が焼け落ちるつ…! ?

「うわー。ゼロムつてけつ! 一丈夫だなー! この技で西の一角族の角叩き折れたのに!」

「おまつ! ? 真面目にそろそろ骨が軋み出しどるんだ!!  
何故一角族トコボローに喧嘩売るまねしたかとか聞かんからー! マジで退けつ!! !」

ギヤーギヤー騒ぐゼロムとヨルン兄さん。

二人の間にいてもぴくりとも動かないエルオーネがちょっと心配だな…

カルローンおじさんと何かあつたのかな?

「ううん。でもなあ…よくわかんないなあ。

「な、なあ、少年よ…」

「あ、ジユードさん。芋虫のままじやつらいでしょ、大丈夫?」

「えつと、そう思つならつて、いや別にいいです。じゃなくて!  
竜殺しの騎士ドラゴンスレイヤーと話してゐ奴つて、岩の大樹ケーレトウオーラ切り倒したアサヒタマツ？」

「うん！」

「まさか、でもあれは魔族じゃない。もつと、恐ろしい…あ、あれ  
が、伝説ミライアなのか」

「ううん？」

「一角族の最大の特徴の角を叩き折るとか、やべえよあの竜殺しの  
騎士イヤーテエボロ」

「ええと？」

「蛮族とか戦闘民族とか色々逸話あるつてのに、まじで怖え、なに

「アイツ！？」

しかも有翼人と恋人？！あのめっぽう他種族に排他的な一族なのに！？オレ様マジヤベヨ！」

「あのね、」

「これで焦獄の火蛇イゼルドウガアルとか出でたりマジで死ねる…」

「ねえ、いぜるどがるつて何？」

「魔王だよー魔王リーセンハイドラの二つ名だつ！  
ああつ！何でオレ様つてばあんな強欲ジジイの依頼受けちまつた  
んだよお」

「？？？　魔王つて人の前には出でこないヒトなの、何で怖  
がつてるの？」

「だつて、おまつ…」

ジユードさんは魔族とのハーフって言つてたのに知らないのかな？  
僕もエルオーネたちに教えてもらつまで知らなかつたんだから、馬  
鹿にするわけじゃないけど。  
でもね、ここはちゃんと教えてあげるべきだよね！

「こつまで、そひでじゅれ合つてこるつもりだ、ヨルン、ゼロム

「

「「あ、リセ」」

「……？」

「リセだー。あれ、そのお肉どうしたの？」

僕がジューードさんに魔王はめったに人の前には出でこないって教えようとしたら、リセがスタスマ歩いてきた。

うん。なんかね、牛一頭くらいの大きさのお肉を肩に抱えて…  
ただのお肉じゃないのかも。だって血の臭いがしないし。  
多分干し肉なのかな… あんなに大きいお肉でどうやって作ったんだ  
ろ？魔術？

「うむ、チビか。先程あちらの方で調達してきたのだ。夕餉を期待  
しておけ。ゼロム貴様に任せると！」

「儂が作るんかい！？」

あ、ゼロムが真っ黒な手をぶんぶん振ってる。  
もー。エルオーネ抱っこしてるので泥に触っちゃうなんてダメだな  
あゼロムは。

「」の我に調理場に立てと申すのか？抉り焦がすぞ

「

「わ、儂って、いつたい…」

うんー。やつぱりゼロムはヒエラルキーが一番下なんだね。  
しょんぼり肩を落としてるけど、今夜はヨルン兄さんがいるし、お  
酒もいっぱいだしてあげよ。う。

それから僕はゼロムの背中をポンポン叩いて、お家に帰らうつってい  
つたんだ。

ヨルン兄さんはエルオーネをゼロムからやさしく抱きとつて置か  
った。

リセはしばらくゼロムの方を見てたけど、ヨルン兄さんのほうに行  
っちゃった。

「うーん。ゼロムは相変わらずだなー。あ、リセ。こいつの処理よ  
ろしく」

「ほお。未だ彷徨つているのか稀人」  
まれびと

「おー。帰り方見つかんねーし。エルオーネ愛してるし」

「して、ソレはなんだ?」

「ちみつこ誘拐した犯人」

「斬り殺せばよからう。オーマも呼んでやるか

「つーー？ーー？ーー？」

「あ、俺も混ぜてな。ハニーのことも狙つてたし」

「そりか」

そう呟くと、焦獄の火蛇の一つ名を持つ元魔王ははうつそりと騒つた。  
水の加護を持ち大剣を携える異世界の青年は、くつくつと喉を鳴らした。

「あ……ははは……は……オレ様マジで死ぬかも…………」

漆黒の半人半獣はほろりと零した。いろいろ。

幕間～家族会議 3～

「ふあ～。」

びしつ

『や、やめひ～。』

「ふわやつふわやつ～。」

『れしゃり、れしゃり  
びつたん！  
びよ～ん。』

『わ、せなかあ、わやーつ～ひつ、咲咲つこつ～。』

「ふあ～。ふえ、ふわわわ～。わわわわ～」

びつたん、びつたん。びつし～ぱつし～～れじゅう～～。

「　　…」「」

『た、たすけ、誰か、助け～～』  
びつ

「ふわ～。」

少女と見紛う姿のオーマは思い切りため息をついた。

椅子に深く腰掛け、背もたれにだらりともたれかかる。

ズボンに隠れるほつそりとした足は、これもまだらりと投げやりにのばされていた。

「はあ…これから『第六回、拾われてきちゃったヤツ（仮）』についての会議を始め…るのぉ？」

氣だるげに腕を上げ、クイッと指を手前に動かす。

オーマの傍に、テーブルに置かれていたクッキーの乗った皿が音もなく移動した。

ぱりぱりぱり。むぐむぐ。じーくん。

そばに置いた大剣を軽く撫ぜ、水守の加護を持つ異世界の青年  
霧間<sup>キリマ・ヨル</sup>夜はため息をついた。

今まで希望に満ち夢見た世界を完全に裏切られたような、そんな表情をして、だ。

「俺さ 一次元で獣耳とかしつぽとか愛でた記憶はあるんだよ。

獸化はありだ。半人半獸とか獸人とか聞いたら普通は、キター！  
つて言うだろ？！」

つていうか、アレは愛でるものだろ…？美女や美少女だから許されるのであつてつ！

でもこれは…こんなのが、こんなのがないぜつ、なんで初めて見たのがつ野郎なんだつ？！」

心からの叫びに連動して、だんつと思い切りテーブルにハツ当たりをする。

こちらではヨルンと呼ばれる彼の心情は少しでも厳しい現実からの逃避だつた。

癒されたかつた。だからこそ眉間のしわをぐりぐりとほぐし隣に座る人物を見た。

青銀の髪に同色の翼、有翼人と水守の混血児ハイブリットであるエルオーネが力アップに口付けながら呟く。

ヨルンの期待を籠めた視線などキレイさっぱり無視してだ。

「二ジゲン二ジゲン？」が何だか知らないが、見た目はただの犬っぽいしかし

きやんきやんと吠えられても、何と言つていいのかは俺達にはさっぱり分らないし、うるさい！」

肩をすくめ、オーマの皿の前に置かれた皿を自分の方に引きよせ一  
つまみする。

伝説ミライアンの一族のはずのゼロムは、つまらなさそりに舌、疲労をたっぷりと滲ませた

ため息をつき、自分の膝に頬杖をつきながら皿が沈み始めた窓の外を遠く眺めた。

「もういつその事、こ奴は犬のままでいいではないか。  
考えるのがめんどくさい。大体にして、リセが仕置きしてコレに落ち着いたのだろう？」

因みに、ゼロムの今の格好は床に胡坐をかき、足の間に華人<sup>ザウーディ</sup>のミルギスを乗つけている状態だ。

ミルギスの意思をそのまま表す、ゆらゆら揺れる（濃厚な密度で風の魔力を宿す）布は若干薄紅色になつてゐる。そしてミルギスの目の前にはコレと称された黒い犬ならぬ、黒い狼がブルブルと震えながら縮こまつていた。

何気に黒い毛皮の間から幾筋も赤い色が見えるが、誰もそれを口に出さない。

唯一、ゼロムだけは、ミルギスも手加減ができるようになつたのかとしみじみと思つたと同時に

どうして自分の時には頸動脈を寸分違わず狙つてくるのか、調子のいい時など心臓を一突きではないか…と哀愁を漂わせている。

「 そうだね。おチビちゃんの拾い癖とか色々と諦めた方がいいかも…

それにさ、ミルギスのオモチャとしてはコレなかなかいいんじゃない？」

普通ありえないよ。皇位<sup>ファ・ムート</sup>精靈の傍に天敵<sup>ホヤク</sup>がいるなんてさ…

しかも力の制御をこの頃からできるって、次代の風の精靈王にでもなれるんじやない？」

オーマは諦めたように、いや、実際は投げやりにゼロムに答えた。だらしなくテーブルに肘を付き、ぽりぽりとクッキーを咀嚼する。勿論、エルオーネの前に置かれた皿を無言で奪い取つて、乗つていたクッキーをがつつりと。

美少女と見紛い憂いを帯びているのにも拘らず、上

品とはかけ離れた姿だ。

だがやはり誰もそんなオーマの姿に突っ込みを入れない。

『待てよー。一生このままかよつ？ー。』

きやんきやんと吠える黒い狼を無視し、元魔王のリセは額に手をやり、だるそうに頭をふる。

リセの失態はポリメシアにおいて一度目だ。一度目は彼らが溺愛する少年を泣かせてしまった事。

今回は少年を傷つけてはいけないが、少年の傍らに国家指名手配犯の盗賊を置く状況を作ってしまった事だ。

無論、少年に床で縮こまっている黒い狼が『漆黒の爪牙』と呼ばれた盗賊ジユードであるとは告げていない。

リセは溺愛する少年に「盗賊には罪を償わせるだけだから心配いらない」と言っていた。

「まさかちびに見つかることは思わなんだ。終いにはコレの毛並みが氣に入つたらしい、非常に不本意だが」

「ホントっ、不愉快だけどね。ねえリセ。裏の山で何する気だったの？」

「つむ、不本意極まりないが。今回はちびが狙われたのではなくエルオーネだったのだわ！」

「本気で苛立たしいよな。そう有翼人おれが狙われた。しかも以前も追いかけられた事のある連中だった

「んー？ だけど盗賊君はハーネーとみつこを間違えてたぜ。あ、もしかしてハーネーを以前狙つて追つてきたのって依頼主の方か？」

「つむ。ウラド市の商人らしい。その場でハツ裂きにしようと思つたがヤツの傍に…」

「そう言えば、なんぞおつたなあ。あれは何だ？」  
魔族っぽいが「ふあー…」ちよつ、ミルギス「ふうー…」イタツ…他のも交じっていたぞ

「ヤツのコレクションの合成生物だろつ。変態な趣味の持ち主だ。まさかあの子を探している途中で鉢合戦になるとほ思わなかつたぜ。ゼロムトリセが来なかつたら俺もやばことになつてたな。一人とも助かつたよ。ありがと」

「つむ。非常に氣色悪いナマモノがいて見るに堪えず、逃がしてしまつたので名誉挽回しようと思つてな。  
まあその商人がウラド市で福を利かせてこらへりしこから、コレを使ってダメージでも与えようとした…  
魔獣本来の姿のままウラドで暴れさせる予定がちびに見つかってしまい…ちつ。レウの子供の癖に使えんー！」

『あーーーっすーーーせーばー』  
「ふきやつぶきやつ  
『痛つ！』

「裏の山で魔獣の力を覚醒させる、ねえ…やつぱりセリフでバカだ

ね。

あそこはおチビちゃんの遊び場でしょ？おじこちゃんがおまわり  
さんは入らなくとも  
おチビちゃんは大体あの場所にいるんだから、ホント向してくれ  
てんの。内臓だけ畳空間に捨てるよ」

「うー…」

オーマの静かな怒りにリセは椅子に座つたまま後じたる。

「まー。なにはともあれ、ちみつじのペシトヒントヒノ置くんだろ  
う…

しゃーねーって諦めて、ノムの名前でもひけて遊んでやればいい  
じゃねーの。

つかれりそら、じい様とばあ様がちみつひと一緒に戻つてくんだ  
るー？部屋片付けねーと」

オーマとリセの緊迫した空氣にアルンがあつたり割つて入る。  
そして赤く汚れた床と赤黒く肉の抉れているゼロムを指差し、いい  
のか？と咄に聞く。

「… はあ。もつーせんつひと仕様がないねえ」

「あーーーあーーーあーーー…」

「つセ。幼児退行は部屋片付けて、自分の部屋に戻つてからひこ  
うる」

「ふあー。」

「なんかもう、儂の身の安否はスルーするんかい。うう、優しさが欲しい…」

「ゼロムー。今夜酒一緒に飲んでやるから落ち込むなよ、な？」

こうしてぐだぐだにポリメシアの村に新たな住人が加わったのだった。

カルローンおじさんがミルギスを探しにきてから、またずいぶんと時間が経つた。

盗賊のジードさんも、ちゃんと罪を償つゝと言つてリセに連れてかれてからは

よその人がこのポリメシアに来ることがなくなった。

うん。

だつて、もう冬だもの。

短いけれど、とても寒い冬がこのポリメシアにやってきた。

「ふえっ… っ くちえっ」

「寒くなつたな。ほら、マントを忘れてるぜ」

「うう… エルオーネは寒くないの、もう慣れたの？」

「俺は慣れたよ。でもゼロムがダメみたいだな。ほらミルギスに小突かれてガタガタしてる

（あれは完全に腹を抉られたな… しかしミルギス、消音で術を使できるなんて将来有望か？）

「あ、本当だ！ふふ。ミルギスはハナコのこと気に入つてるみたいだね！」

「ああ。本当にあのハナコを気に入つているな。

大体移動する時はハナコに乗つてゐるが、ゼロムに抱つこされて

るかのせいかだし」

ミルギスはハナコの背中に乗つかつたまま。ふふ。本当にハナコが好きなんだね！

ハナコはセインと同じ真っ黒なんだ。でももふもふじやなくてサラサラな毛並みなの。

それから、ハナコはヨルン兄さんが付けた名前。

なんでもヨルン兄さんの故郷では普通に皆に知られている名前なんだって。

うん。ハナコも名前をあげたときずいぶんでたよ。

ああ。ほら、今だつてきやんきやん吠えながらヨルン兄さんに飛びかかるつてたるもの。

ミルギスつてば最近腕力が付いてきたからなあ。

ぶらーんつてゼロムの首にしがみ付いてたり、でも何でかゼロムの顔が土気色になつてたけど…

あと僕のことぎゅつしてきたり可愛いよねえ。

ほんとに仲がいいなあ。

「HANAHANA! ほーら花子（笑）といでーーー」

『チクショー！…ためえ変な名前付けやがつて…』

「ほーら、ほーら。適度に運動しないと太るぞー。HANAHANA A!」

「ふあー」「ぶちひ。

『ああー！？あ、あねさんつ、背中も知らないでつーひにい？！』

「ほーりほーり。」

『竜殺しの騎士<sup>ドラゴンスレイヤー</sup>』

でもゼロムがなんだか微妙そうな顔してるけど、なんでだろ？  
あんなにじやれてきてるのに、何が不満なのさ？  
ハナコは僕にあまり懐いてくれないのに…

ヨルン兄さんが、ハナコは玉ねぎが大好きって言つてたからハナコ  
のご飯に玉ねぎこいつぱい入れてあげたのに…  
あれ以来ハナコはばい飯のときになると僕から離れちゃうんだよね…  
何で？

一緒に散歩行く時も、そろそろと遠くに行つたりもつんだ。  
お風呂の時だつて、オーマの方について行つちやうし…僕つて嫌わ  
れてるのかなあ？

あーあ。

ほっぺが冷たいなあ。

「はあ　　あ、息が白いや！本格的に冬が来るね。星焰達<sup>ファイア</sup>が恋し  
いなあ」

「炎の精霊か、水守<sup>ウンディーネ</sup>に近い俺のところはあんまり現れないな

「？」

「仲が悪いわけじゃないんだが、水守<sup>ウシテイーネ</sup>と星焰<sup>ファイア</sup>は相<sup>タチ</sup>反する性質なんだ  
よ」

「へえ

「それはやうと、リセとグレーンがまた遠出をするらしいぞ  
「あ、ゼロム！ 寒いなら家に入つてればいいのに。それとも僕のマントの中に入る？」

「そつ言つたらゼロムは僕の頭をなでてくれた。えへへ。  
でもちよつと手が冷たいんだよね。うーん。

「いや、儂がダウンしとるこのは生<sup>ナシ</sup>キルギスの所為だから気にす  
るな。

で、話をもどすが。なんかこの領主が子供を集めるとかなんとか言つてると

子供を集める？

オーマみたいにお勉強会でもひらくのかな。  
でも何でおじいちゃんが領主さまの所に行くの？  
普通村長さんが領主さまの所に行くんじゃないの？

「脈絡がないな。いつたい何のために？」

「さあな。確認するために騎獣に乗つて出かけたのだ。リセは

護衛だ

「ふへ～。そうなんだ。ゴエイってなに？」

「護衛は守ることだ。領主の館まで遠いからな。途中で悪い奴らが来たら困るだろ？」「いつか、俺は領主が誰だかも知らないぜ」

「儂だってポリメシアに流れついたのは最近だ　　あ、ちょっと待て確か…」

ゼロムがおでこに手を当ててぶつぶつ何かを言つてる。  
うーん。時々「ケルト」とか「知り合いだからか…」とか言つてるのが聞こえる。

あ！もしかして、ケルトって人から貰つた魔ちから術で何か知つてるのかな？

「ああ、コレか…？…ふむ。エベノス地方領主で、名はウルト  
＝エヴァーゼン？」

「何でそんな疑問形なんだ？」

「儂の使い勝手の悪い能力の一部だ」

「ケルトさんがくれた力なの？」

「…よく覚えていたなちび。そう儂が喰くったケルトの記憶おぼだ。  
若りし頃は魔術師として王都に居た…あー…つと、んん？」

「ちょっと前にケルト達が魔術師育成の義務?というのを作つとつたようだな」

「ちょっと前つて…お前の感覚だとちょっと前つてどれくらいだ?」

「ちょっとはちょっとだらう?つむ。多分コレだな」

数年毎に地方から王都の学院に素質のある子供を推薦する制度がある。

おそらく、今回はポリメシアを含めたエベノス地方の子供らの数人が王都へ送られるのだろう

「う

ゼロムがぐりぐりと眉間のしわを伸ばしながら言つ。

でもさ、「ケルトの若りし頃だから60年前か?」とか聞こえたんだけど…

あれえ…ゼロムっておじいちゃんよりも若いよね?

それに、魔術師の学校つて、お金持ちの貴族しか入れないんじやなかつたつけ?

からうひるからうひ。

僕たちは馬車に乗つてゐる。行者さんは領主さまの知り合いの人。エンビフク服つて言うのを着てるんだ。なんだか貴族の人みたい!

「で、ボクとおチビちゃんが領主の家に行く事になつたワケだね」

「お出かけだよー! 僕ポリメシアからでるの初めて、すりいじへ楽しみー!」

なんで僕たちが馬車に乗つてゐるかつて言つひ、ゼロムが話した通りのことがあつたんだよね。

「魔術師の素質のある子供を王都に送る」だつて。

おじいちゃんが帰つてきて、村の間に領主さまからのお詫びを伝えたの。

本当はティコたちも一緒に行くはずだつたんだけど、行者さんが僕とオーマだけつて言つたの。

ちょっと残念。子供だけで遠出してみたかったの……

「ヨカツタネ。えーと、メモには魔術の素質のある子供…何コレ? 年の頃は8~13歳。女児でも可。魔力感知ができる事が最低条件。

属性を持つ魔術が行使できればなお良し おチビちゃん、ボクら領主の所に行くのやめない?」

「えー。せつかくエルオーネに『シンジコ』って言つ魔術教えてもらつたの!」

リセにはケンゾクを貸してやるから安心しろつて言われたし。

ヨルン兄さんは、えーっと、あ、見て見て! ナイフもらつたの。ゼロムにはウルトつて領主さまに怖い事されたら『フィヨーダの落田』って言つて逃げてこいだつて

「そ。護身術とナイフはいいよ。万が一とか考えたらね。でも後の  
は何さ？」

つたぐ。リセはへんな所で馬鹿つたゆーか、突拍子がないってゆーか……

ゼロムもゼロムだね。何、フィヨーダの落日つてへどつから情報ネタ仕入れたのさ」

「うん?なんかゼロムの力でケルトさんの力を借りたんだって」

「!　へえ。夜のミディアン一族特有の能力ってワケだ。

他人の能力を借りる?少なくとも一人は喰べたんだ」

「オーマ?」

「何でもないよ、おチビちゃん。そつそつ、リセが言つてた眷族は喚んじやダメだよ?」

あとヨルンから貰つたナイフも背中に隠しておくんだ、いいね?あ~。めんどくさいなあ。でもおチビちゃんと一緒に遠出するつてのもなかなかイイかもね」

「うん!僕もオーマと一緒にお出かけするの嬉しいよ!ー!」

からこりからこり馬車に揺られながら、遠い領主さまのお家へ向かつて行く。

領主さまはどんな人かな?

他の村の子たちと早く会いたいなあ。

## 第十九話

馬車にゆられて、ゆるりとひ。

僕とオーマは領主さまのところまで、しつじのおじさんと一緒に馬車で旅をする。

「ティコとかルスターとか、村の皆は一緒に行けない。  
テキセイがどうとか、よく分らなかつたけどオーマと一緒に安全だよね。」

僕たちが馬車に揺られて五日がたつた頃、ガツコンーって音がしたんだ。

そしたら馬車の車輪が緩くなつて、外れかかつてたんだ。  
しつじのおじさんは困つたようこ、「領主様の処に着くのが遅れる  
つて言つてたの。」

「手伝つた方がいいのかな?」つてオーマに言つたら「やんなくて  
いいでしょ」と言われちゃつた。  
でも、もうそろそろ田が暮れちゃう…  
ご飯の準備くらつしといった方がいいよね…

「あ、あのーしつじおじさんー」

「どうした?」

「僕たちは飯作るよ!いつも保存食じや健康に悪いし。それにね…  
馬車の修理できなかつたらオーマが直してくれるから、おじさん

はちゅうとやすんだりっ。」

オーマが「あちゅー」とか言いながら頭を抱えてたけど、しつじのねじさんが、ポカーンつておどろいてたけど、

やつぱり困つてるときは皆が皆協力し合わないとなー。

何だとこゝのだ…！

何とこゝだつ…！

ありえない！ありえない！…ありえない！…！

いま、田の前で起つていいことが現実だといつのかつ…？

「おじさん? ビリしたの、お腹痛くなつたの?」

「あ、おチビちゃん。それまだ入れちゃダメだよ。コルトレの葉を先に入れないと…」

「えー。ゼロムはコルトレの葉をいつも後に入れてたよ?」

「あ~…コルトレの葉は香り付けの時は後に入れるけどね、野宿の時は別だよ。

野宿の時に食べられるスープってそこいら辺の雑草とかが具になつてんの。

ポリメシアは基本精靈がいるから早々普通に食べても問題ないんだけどね。

他の処じや毒素持つてるのがあるから、コルトレの葉を先に入れて毒素を中和させるのを

「え、毒草つて道端にいつぱい生えてるの…?」

僕につきり森の奥とかに生えてるのだと呟つてた!

「うん。間違つてはいけどね…あ、おチビちゃん。それ毒草だよ

「…?」

「何…もしかしていつもつまり食いついてたり?」

「えつと…ウマイーデイ風人を見に散歩行く時に…で、でも僕お腹壊さなかつた

よ?」

「ウンディーネ  
水守のたまり場の水飲んでたでしょ」

「うん。湖のお水は美味しいよ。オーマだつて、だからお水を引いてきて、噴水作つたんでしょう?」

「はあ…とこりで、執事のおじさんはいつまでもその馬車の修理に時間かけるつもり?」

「今日はひいでお泊りするの?」

「ボクは早く行つて用事を済ませたいんだけど。

あ、おチビちゃん。帰りはゆつくつと色んなものを見て帰るつか?

「本当! うわあ楽しみだな!」

私の目の前にいるのは子供だ。十歳程度の子供が二人いる。  
そう領主様に命じられたとおり、各農村の魔力を有する子供を連れていいく途中だつた。

子供たちをただ連れてくる簡単な任務 というわけではない。  
裏を返せば才能のある子供たちを発掘していく重要なものなのだ。

私はある意味でこの任務を成功させることができるだらつ。しかし

この子供たちはいったい何だというのか！

「コルトレの葉だとつ　　それは秘薬の一種ではないか！！  
我が主ですら入手するのが困難な物をどうしてたかが農民の子供が  
持っている！？」

しかも少年がつまみ食いをしていると言つ毒草、それはエベノス地  
方特有の猛毒を持つジルヴァーナだぞ？！

その猛毒を癒すために必要な薬草は秘境の中にしかない。  
精靈がいる泉の精靈水を飲めば治る可能性もあるが、それは上位精  
靈が憩う場所と条件がつくんだぞ！

その上位精靈がいる泉を見つけるのもほぼ不可能だ！

下位精靈ならば運が良ければ見つけられないこともないが、  
の毒を浄化できるなど…

ポリメシアにそんな聖域とも呼べる場所があるというのか？！

ありえない。

私はそんな気配を感じ取れなかつた！

私の片目は特殊なものであり、グラムサイト妖精眼ジルヴァーナと呼ばれている。

精靈になる前の妖精などを見る事が出来る魔眼の一種だ。

私の眼は精靈を見る事も出来る、しかし見続ける事が出来ない。

あまりにも彼らの存在が強烈だからだ。故に、彼らを覗ると眼を覆  
い激痛が走つてしまつ。

存在を感じ取れても、それ以上は激痛が走り行動が起こせない。

そう、痛みがあれば私の近くに精靈が存在すると分かるのに、ポリ  
メシアではそれがなかつた。

この子供たちが嘘を付いている?

いや、そんなことは無意味だ。現に今も猛毒草ジルヴァーナを食べている。  
ありえない。

ポリメシアの奥地に上位精霊が住み着いている?

確かに空気は澄んでいたが、精霊の残滓など感じ取れなかつた…

この子供は依り代たる素質を持っているのか?

それもなさそうだ。依り代たる素質を持っていますのなら体の一部に精霊の刻印が刻まれるはず。

それでは?

この子供たちは?

いつたい何だというのだ、どうなつてしているのだ?

ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！  
ありえない！

ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！  
ありえない！

ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！  
ありえない！

ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！  
ありえない！

ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！  
ありえない！

ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！  
ありえない！

「ありえない！」

「ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！」

「ありえない！」

「ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！」

「ありえない！」

「ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！ありえない！」

「ありえない！」

「そういうえば、しつじのおじさんって、片方の目だけ別の色だね。キレイな紫色！」

「ソレ<sup>グラムサイト</sup>妖精眼だよ。精霊になる前の妖精をみれるんだ。

裏を返せば、それ以外は感じ取れても見る事が出来ない。普通の目の方が幾分かマシなものだね」

「グラムサイト？へえ…紫色の目の人には皆そうなの？」

「そう言つわけじゃないけど…妖精眼<sup>グラムサイト</sup>の見分け方は…大まかに二つかな。

一つ目はこの人みたいに、片方だけ妖精が気まぐれにその眼をくれるんだよ。

二つ目は、両目に妖精が自分の印を入れて渡したものがあるんだ。前者は中途半端すぎて、あまり歓迎されるものじゃないけど…後者は希少価値高いよ」

「きしょーかち…えっと、珍しいんだよね？」

「そ。だつて妖精から精霊に格上げした時、その妖精から印をもら

つてた人も力が上がるの。

妖精つて何処にでもいるでしょ？長い年月をかけてゆづくと精靈になる。

「よく稀に精靈になる手前で印を入れて渡すヤツがいるんだよね… ま、相当の物好きに限られるけど」

「ふ～ん。じゃあしつじのおじさんって、妖精さんと友達なんだ！」

「「」のおじさんの場合せ違つよ。悪戯で目を取り換えられたんだね。ほら　　この人の目、茶色だけど、輪郭の部分が赤みが強くて輪つかの中に茶色が入つてるし」

「わあ、わあ…す」「」「なんだか不思議な感じだね…！」

「まあどうでもいいけど、ほら、おチビちゃん。スープがいい感じにできたよ」

「はーい。いただきまーす　　あつゝ、ふー、ふー…おいひい」

「執事のおじさん。こつまで口開けてるの？一応保護者なんだからしつかりしてよね」

「あ、ああ…」

知識がある。ただの農民ではないのか！

貴族か？

ならばどこの貴族だ？追放された話など流れできていないぞ。では違う？

それにしてはこの少女の知識は辺境にある学院生よりもあるぞ。

「あ…ねえねえオーマ。」おじさんヒカル兄ちゃん、どうちが珍しこの？」

「それはやつぱりヒカルだね。加護持ちつて滅多にこないから」

「へ~」

「ま、珍しあで言つたらボリメシアに居るボクらは伝説級めんせきだね」

「伝説級？」

「そ。にしても、今日はここで野宿かなあ。領主様の所つくの遅れるね。どうでもいいけど。

それともボクが馬車を直して一晩中走りと押せば今日の分の遅れを取り戻せるだらうけど

執事のおじさんどうする? つべのが遅れたからつてボクらが罰せられるなんて嫌だからね…」

「?」

「?」

貴族に対しての常識を持つている…?

間違いない。この少女は貴族の在り方を理解している。

すべての貴族はそうではないが、貴族の傲慢さと理不尽さを知っているようだ。

加護持ちが身近にいたと言つならば、この少女の知識があるのは納得できる。

私は もしかしたら、とんでもない子供たちを見つけてしまつたのかも知れない…

## 第一十話

ほんのひとつ、空が紫色から明るい色になつてきてる。

まだ眠たいけど、馬車から見える景色は、僕がはじめて見るポリメシア以外の場所。

馬車道は石がキレイに埋まつてて、固そつだつたナビ志あやすいと思つなあ。

僕がそもそも外を見るとオーマが毛布の中からひょっこりと顔をだした。

「はよ、おチビちゃん。ちよ…朝早くない？ああ、あんまり窓に近づかないでね。

術式が浮かんじやう。それに執事のおじさんにボクが魔法使えるつて知られたくないし」

「えへへ。おはようオーマ。うん、気を付けるね。

…ねえオーマ。オーマは貴族の人がいる魔術師の学校に行きたい？」

馬車の車輪が壊れて、それをオーマが直してる時にしつじのおじさんが、どうして子供を集めてるのかをお話してくれた。  
ほとんどゼロムと言つてることが同じだつたけど、しつじのおじさんはどつても真剣な感じだつた。

あと、魔術師の学校に行くと領主をまからお金がもらえるんだって。

このお金があれば不作の時期でも村一つ分生活するのに困らないって言つてた。

…お金つたら、ちつちつと丸くて、金色だつたり銀色だつたりのアレかな？

ポリメシアつてお金をあまり使ってない氣がするんだけどな。持つてるのつておじいちゃんとか、外に物を売りに行くおじさんたちだけな氣がするし…

でもおじさんたちが持つてた袋の中身つて茶色っぽいのと紫色のだけだつたし…

お金つてよく分からぬなあ…

しつじのおじさんは他にもイイ事があるつていつてたつけ。魔術師の学校は王都にあって、運が良ければ貴族の人めしかかれられるつて言つてたなあ。

めしかかえられるつて、お仕事くれるつて事らしいけど…でもそれつてお仕事貰つたら王都の方に住まなくちゃいけないのかな？

もしやうだつたら、僕おじいちゃんとおばあちゃんのお手伝いだけでいいや。

ゼロムも貴族はイヤな人ばかりでイイ人なんて少ないぞつて言つてたし。

リセは昔お城に住んで、でもお仕事が忙しくて遊べないから家出してきたつて言つてたし。

エルオーネは都会は危ないからやめとけつて言つて、ヨルン兄さんは…うん。

「ショタコンモニー。キタコレ。ハアハア。テラヤバス」とか呪

文唱えた後、マジメな顔して

さつき言つた呪文を唱えるへンシシシシャ。ぱっかりダメねって  
言つてた。

オーマだつたら魔法使えるし、何でも知つてゐから魔術師の学校に  
行つても平氣だと思つんだけどなあ。

ああ、でも離れて暮らすのはなあ……うん。やっぱりイヤだな。

そんな僕の考へてたことがわかつたのか、オーマがムスツとした顔  
でいつてきた。

「行きたくないね」

「え、そつなの?」

オーマでもイヤがる場所なんだ。

王都つて本当はすゝぐ危ない場所なのかな……?

「だつておじこちゃんやおばあちゃんと離れなくちゃいけないんだ  
よ?」

おチビちゃんは町と離れるのイヤでしょー! ま、どうしても行きた  
いって言つなり

収穫が終わつて物を売りに行く時に近くの町とかまで乗せてつて  
もらおうよ。うん。それがいい

「あ、そつか。じゃ魔術師の素質があつても僕ボリメシアにいる  
!」

「それがいいね。いざとなつたらリセとかエルオーネに教えてもらいたいよ」

「うん！　　オーマは教えてくれないの？」

「あのね…ボク　　魔法使うんだよね。魔法じやなくて、ね」

「うん？」

「魔術つて言つのは魔法とは違つんだよ。ねえ、おチビちゃん。ボクがおチビちゃんと同じ人間じゃないつて言つたり、おチビちやんはどうづくる？」

んん？

「実は、ボクはとっても悪くて怖いモノで、人間を食べちゃうんだ！」

んんん？？？

「酷い事も悪い事をいっぱいしたし、色んな人間を困らせてたんだ。楽しかったよ本当に」

んんん？？？

「ボクはね、悪魔なんだよ

えーっと…?

「なあんてね

「え、ウソなの?」

「じつあだけひどい話つへ」

どつけりて言われてもなあ…あ、今すぐオーマが困つてゐる。  
眉をきゅつてよせて、ズボン握つてる。

僕はオーマにひどい事も、悪い事もされたことないし。  
おじいちゃんのお手伝いとか、おばあちゃんのお願いとかオーマは  
聞いてくれるし。

村の家とか直してくれるし。僕だけじゃなくてティーハたちにも勉強

教えてくれるし…

でも、オーマはウソとかついたりしないよ。

「わかんないなあ」

「そ」

「オーマはウソ言わないし」

「は？」

「ひどい事も悪い事も僕はされてないし。いつも一緒に遊んでたし。あ、ねえねえオーマ。アクマつてジュー<sup>ジュー</sup>ドさんと同じ魔族のこと？でも魔族つて髪の毛が黒いヒトの事を言つんじやなかつたの、違うの？」

「あのね、おチビちゃん。あいつは魔族 <sup>ジュー</sup> 魔獸に分類されてるんだよ。

別に髪の毛が黒くない魔族だつているし。髪の黒い精靈とかもいるから：

ただ単に人間には黒つて色が発現しにくいだけでね、ほら、セイ

ンも毛の色が黒いよね。

天狼族セイリョクズつて魔族じやなくて靈獸に近いからさ、ね？それと悪魔は別モノなんだよ」

「んん？」

「悪魔はね、人間の感情から生み出された思念体の事をいうんだ。

んーと。

長い年月をかけて身体を創り上げ、思考を持ち魔力を増やし存在を確固たるものにする。

そしてね、悪魔と契約を交わした人間を魔法使い、または魔女と呼ぶの。

契約をすると体の一部に契約の印が刻まれ、その一生を契約した悪魔に捧げる。

魔法と魔術の違いはね、前者が自分とそれ以外の周りの魔力を使つて術を発動させる。

後者は自分の魔力だけを使って術を発動させるもの。まあ、例外はいくつかあるけどね…

「今言つたのと、オーマに魔術を習うのと何が関係があるの？」

「ボクに魔術を習つてことは、魔法使いになつてしまつ可能性があるんだよ。

もしも万が一にも本当に運が悪い事に、おチビちゃんが魔法を覚えちゃつたら

アーズガルド

神都から指名手配されちゃうよ。ボクはそんなの嫌だしね。  
っていうか。おチビちゃんはさあ、ボクが悪魔でも別になんとも思わないの？」

「うん？ うん。僕とオーマが家族で友達なのは変わらないもの。

それによく分からないし。人間じゃなきやいけないなんて決まつてないでしょ？」

エルオーネは水守と有翼人のハーフで、ミルギスは風人の華人ワンドィーネ  
ヴィーディンザウーディでも僕たちとほとんど変わってなくて、違う所はあるけど、全然気

にならないし。

人間じゃなくちやいけないって、誰が決めたの

？

「あ」

「あ？」

「あはははははー…うだねー…のとおつさ。決まつてはいないよー…」

「オーマあ。大きな声出すとしつじのおじさんに聞こえかやつよー..」

「ボクはそんなんへマなんてしないわー…ゼロムジやあるまいしー…あ、おチビちゃん。今言つた事は内緒だよ。他の人と言つたらダメだよ。」

「うん。ないしょね。…ヒルオーネたちにもっ♪」

「いや、ヒルオーネ達は知つてるからいによ。でも村の人にはまだ内緒」

「…そつか。うん。まだないしょねー..」

”まだ”ないしょかあ。うん。まだ、ないしょだけど、いつか話してくれるんだ！

そならいいよね？

「あーあ。ボクってこの辺でこんな丸くなつたんだね。」

「オーマの顔はふくらんでる感じで丸いこと感ひナビ。」

「おチビちゃんはふくらんでる感じで丸いこと感ひナビ。全般的に」

「…。」

「まだ朝早いからもうひと眠り。起きせぬ間に通るとい  
だからね」

「…。」

オーマは毛布を広げて、僕はその横にもぐりと移動した。  
領主やまの所に着くまでゆくつと開けたり閉めたり。

## 第一十一話

ざわざわ、がやがや。

森の中とは違つ音がいつぱい。

ざわざわ、がやがや。かつぽかつぽ。

人の笑い声とか馬の蹄の音がそこかしごで聞こえる。

馬車は道の真ん中をからこらからこら。

僕とオーマはゆらゆらゆら。

窓から見える景色は人とかお店とか。

人と人と人と、たくさんいる。皆楽しそうに動き回ってる。  
大きな荷馬車とロウファ達よりもちつちやい犬とか、てこてこして  
るし

ポリメシアにはあんまりいない猫が、わんわん、にゃーにゃー。可  
愛いなあ。

「うわあみてみて、ちつこくお家がいつぱいあるよー。」

「ヤーだねえ…あ、あそここの露天でケンヤンが売つてる」

「ケンヤン?」

「鶏肉で固い部分の肉をタレに一晩漬けて、味をしみ込ませたのを  
ああやつて焼くんだよ。

ポリメシアでは鶏肉よりも魚の方が主食になつてゐるからねえ…ま  
あ帰りにでも寄つてみよつか」

「ほんと!…あ、でもお金?僕持つてないよ」

「おじこちゃんからちゃんと一人分のお小遣い貰つたし、平氣だ。おチビちゃん、買い物してみる?ポリメシアじゃあ物々交換しかしないからねえ。」

ここへで買い物の仕方を覚えておかないと、隣村とか大きな町や都市に行つた時力モられちゃうよ」

「えつと…いいの?…じゃ、じゃあねえ、わっしゃ言つたケンヤン食べてみたい!」

あと、階にお土産買つて帰るーあと、あとねえ、えつと…リボンが欲しいのー」

「リボンって誰にあげるの?」

「おばあちゃん!…髪の毛結んでたのが切れちゃつたつて言つてたから」

「そつか。じゃあ丈夫で綺麗なお土産にしようか

「うん!」

ポリメシアを出てからもう十日が過ぎて、しつじのおじさんと僕とオーマはすつと馬車での旅だった。

でもそれも今日までなんだつて。そつか。むつ領主さまのお家に着くんだ。

人がいっぱい居て、お家がいっぱいあって、いろんな音があふれるこの町に領主さまはいるんだああ。

「おチビちゃん。感慨に耽つてゐるといひ悪こんだけど、実はまだ着いてないからね」

「「つ、？」

「これからまた別の馬車で移動さ。今度のは使い魔に繋いだ馬車かな？」

「つ、使い魔？！」

使い魔つて、前にポリメシアにきた大きなネズミ……？」

ど、どうじよつ……！」

僕、あのシリツティとか言つ使い魔は怖いよ……ダメだよ、苦手だよ

！！

「あ……言つとくナビ、前にポリメシアを荒らしに来たシリツティじやないよ」

「え……ほ、ほんと？」

「うん。シリツティつて使い魔だけど主に失敗してできたようなモノだし。

本来はもつと有効に使えるモノだよ。特に移動用は上位者の魔術師が行うから

三流以下の魔術師よりもまだ信用できるし、何かあってもボクがいるから平氣だよ

「や、そつか。やうだよね」

「まあエノベス地方つて余所に比べたら狭いし、あと一寸もすれば領主さまのところに着くって」

「えええ！？」

オーマが言ったように、町の中を突っ切つて馬車は大きな広場まできた。

その後に、その広場で待っていた… 真っ白な馬 使い魔

遠目から見ても普通の馬とは違つて分つた。

だって白い馬の首に赤い模様がゆらゆらしてゐるんだもの。

確かあれって古代文字だよね。僕オーマに教えてもらつたよ！

じっくりと見てる暇はなかつたけど、馬に繋がれてる手綱にも何かの文字が描かれてたみたいだし… そつか、これが普通の魔術師の使い魔なんだ。

色々な所を見れて楽しいかつたけど… 領主さまのお家ひょつと遠い  
いと思うな。

うん？

領主さまのお家つて街の中になつてこと?  
あれ… もしかして村長さんみたいにちよつと離れた所に住んでるのかなあ。

馬車から下りて、僕は辺りを見回した。  
森って言うにはなんだか物足りなくて、でも木はいっぱいあって、  
それでも不思議な感じだった。

あ　　木の下にお花が一つ二つ、三つ…  
他の木の下にも同じ花が同じ数だけある…領主さまの庭だから整備  
されてるのかな？  
そつか…だからへんな感じがしたんだ。うん。なつとくだね！

うんうん僕が頷いてると、オーマが僕をひっぱった。

「あ…つ、ついたの？」

「わうみたい。おチビちゃん疲れてるね」

「そんなこと…あー、でもけょっと喉が疲れたかも。感謝祭のお歌  
の練習今しなくてもいいと思つ…」

「暇だつたんだから。それに来月はお祭りなんだし、  
詩歌<sup>うた</sup>ぐらい暗唱できなくちゃね」

「むう……でも去年のよつもながくなつてゐる?」

「今年はミルギスあかちゃんがいるから仕方ないの」

「ひ」

オーマはクスクスと笑いながら僕の手をひっぱて行く。  
ああそうだ。これから領主さまに会うんだっけ?  
なんだかこう、うるうるとかそわそわとか、そんな感じがする。  
そんな僕を見て、オーマはまたクスクスと笑つてそつと言つてきた。

「おチビちゃん ジイ ディ ルイ  
……」

「え……い・でい・ぬ……?」

「軽いおまじないだよ」

「お前たち、これから入る所では無駄口を叩かぬよ!」

しつあじのおじさんはそう言ひつと、ビッしりとした大きな扉を開けた。

うわあ……チリチリとした雰囲気だなあ。

あ、でも、うるうりとかそわそわとかはもうなくなつたかも……なん  
でだらう?

「ほら、見て。他の村の子達が集まってるよ。ボク達が最後っぽい  
ね」

オーマがまたこいつそりと言つてくる。

「ほんとだ。なんだか皆元気ないね？」

「そうだね。でも仕方ないよ。魔術師は地方には来ないからね。  
つていうか、前にポリメシアに来たアレは本当に特殊といつか奇  
特なものだから」

「？」

「こわいってことさ」

「え……なんで？」

僕の声が大きかつたのかな?  
しつじのおじさんその他にも大人の人気がこっちを見てくるし、他の村  
の子たちもじつと見てくる。

「はあ これから我が主がお前達を見に来る。私語は慎め。特にお前だ……ちつさいの」

・・・・・

・・・・・うん?

・・・・・・

「つ！ しつじのおじさんまで僕のことひつかひって言つた！！？」

しかも指で僕の方をさしてきた。人を指さしたらいけないっておばあちゃんが言つてたのに…！

ひどい！僕は平均的な身長だよ！

オーマは髪の毛がふわふわだから僕よりちょっと大きくな見えるだけだよ！

ポリメシアにいる皆がちょっと大きいだけだよ… 同い年の子だつて僕と背は変わらないもん

「うう…僕、おっきくなるもん…ゼロムみたいにょへ寝て、ちやんとおつきへ育つもん」

…か、変わらなーもん。ほんのちょっと、ちょ一〇一〇とだな  
僕の方が背がちけちけやーだ、だけで。

「貴族の執事って、他人を侮辱することしかできないわけ?」

「あ、いや、その…あそこまで頃垂れるほど気にしてこるとは…」

「あーあ。

ボク達はあんな大人にならないよつこじよつね、おチビちゃん

うん。僕、もうオーマたちのことはあきらめってるから。  
愛情表現つて分つてるから…

## 第一十一話（後書き）

次は視点が変わります。そろそろキャラについて詳しく描写しようと考え中です。

しばらく旅行に行くので更新がちょっと止まりますが、帰ってきたら連続で投稿したいと思います。

## 第一十一話

ああ、この時が来た。やつと やつと私は私の『えられた仕事』を遂行できるのだ。

エベノス地方にある各農村から一定の魔力を有する子供達を集めた。怯える子供達の中、私が見つけた一人の子らは眞似うことなく自然体のままこの空間に居る。

貴族の屋敷を物珍しがることはなく、品を崩すこともない。

田舎の、それこそ辺境とまで言われた村の出の者が！　ああ、顔がニヤケてしまう。

執事たるもの、また我が主の体裁のためにもそんなミスは犯せないが…しかし、本当に今回はあたりだと断言できる。

一時は子供らに対し、『ありえない』と恐怖した自分が情けない。

彼らは逸材だ。彼らは鬼才だ。彼らは我が主の役に立ってくれるだろづ。

私が見つけた、連れてきた子らは評価される！

貴族についての知識を持つ少女。精靈の依り代たる素質を持つ少年。

我が主であるツハイン＝リラ様の名譽の為に　是が非でもエベノス領主ウルト様の御めがねに適つてもううう！

「遅れまして、誠に申し訳ありません。深くお詫び申し上げます、  
ブロワ執事長殿。

私めが連れてまいりましたのは辺境ボリメンシアの地より一名、魔術師の資質を持つ者として領主様の下へと推奨いたします

ツハイン＝リラ専属執事セト＝ルビイナ

エベノス地方にある各農村から一定の魔力を有する子供達を集めた。子供達は皆一様に怯えている。

無理もない。

彼らの親は領主様より報奨金がでると知ると彼らを売り渡したのだしつかりと、子供が魔術師の学院へと入学できた場合にのみに支払うと言つたのにも関わらず

そして、まだ子供達が魔術師の素質があるというだけで、確実に王都へと行けるとは限らないのに、だ。

私の行うべきことは、魔術師の選出。

この子供達の中から選ぶのだが、私の琴線に触れる者はいない。私がこの状態なのだ。我が主もあまりの質の低さにお嘆きになるだろ。

恐らく、此処に居る子供たちは王都にある魔術師の学院へは行けない。

魔力があるとはいえ、教養がなく文字も読めるかも怪しいのだ。

否　　数十年前に義務付けされた法など、今も律儀に守っている貴族はない。

我が主であり、このエベノス地方の領主たるウルト＝エヴァーゼン

様は平民には寛容的だが…

此処に集められた子供達は手頃な商人に引き取らせるか出来がいい者がいれば此処で下働きさせることもあるだろ、しかし。

そんな私の思考を中断させる出来事が起きた。

エベノス地方領主ウルト様の奥方や、そのご子息方に疎まれているツハイン様の私兵  
ツハイン様の従者を務めている者が、ある子供達を連れて來たのだ。

今更何用できたのか…定刻などとうに過ぎてているというのにはじめはそう憤慨したものだ。

しかしあレが引き連れた子供達を見た時、ふと違和感を覚えた。

一人は目を見張る程の美しい少女だ。  
さわり心地の良いであろう柔らかなダークブラウンの髪と  
その髪と同じ色でありながら、どこか潤んでいる大きく、くるりとした眸。

少女の頬は仄かに赤みがあり、汚れを知らぬ肌の白さが一層際立つていた。

成長すれば絶世の美女になるのではと思う程だ  
他の者よりも上質だった。

もう一人はその美しい少女に手を引かれて入つて來た。

そして魔力が

はっきり言つて特徴がないのが特徴だろう。

否。子供らしいといえば子供らしいのだが、ただそれだけだ。

他の農村の子供らと何ら変わりない。変わりないはずなのだが……何故だ？

まだ違和感が否めない。

そして私の違和感は確かに間違いではなかつたのだ。

エヴァーゼン家執事長サモン＝ウ＝ブロワ

おれらが入ってきた扉とは別のところから、そいつらは入ってきた。

「ほり、見て。他の村の子達が集まってるよ。ボク達が最後つぽい  
ね」

一人はその、なんて一かずつげえ可愛い子だった。おれのいた村で

も比べられないくらい可愛いこだ。

んで、もう一人がチビだった。おれより年下か？  
けつこう肉つきいいよな。なんだよ。アイツ金持ちのとこのヤツか  
よ。

なんかムカつくし、丸太っぽいから丸太でいいや。

「ほんとだ。なんだか皆元気ないね？」

元気がない？ 当り前だろ！！

これから魔術師になるかもしれないんだ！

でもそいつらは貴族なんだぞ！ 素質がある？だから何だってんだよ  
！？

貴族のヤツらが小さな村の、平民を魔術師にしたがるわけないだろ  
う！！

「そうだね。でも仕方ないよ。魔術師は地方には来ないからね。

つていうか、前にポリメシアに来たアレは本当に特殊というか奇  
特なものだから」

「？」

「怖いってことさ」

「え……なんで？」

そいつ…本当にわからねえヤツだった。

すつげえ可愛い子と一緒にいて、手までつないで！

魔術師の、貴族の怖さを知らないなんて、ぜってえ甘やかされて育つたんだな、あのチビ助は。

「はあ これから我が主がお前達を見に来る。私語は慎め。特にお前だ…ちつさこの」

「ひー じつじのねじさんまで僕のことひつちやこつて言つた！？」

チビで丸太っぽいガキは貴族の召使に口答えまでして、何考えてんだよー？

本当にどこの田舎もんだよー！？

「ひー…僕、おつきくなるもん…ゼロムみたいによく寝て、ちやんとおりきく育つもん」

「貴族の執事って、他人を侮辱することしかできなわけ？」

「あ、いや、その…あやこまで頃垂れるほどにじつこんとま…」

じつやこチビのへせーーーしかも可愛いくもチビ助のことかばつたしー。

貴族のヤツも何も言わないし、召使だってオドオドしてり、こいつ何なんだよー？

貴族は、貴族に仕えてるヤツらには逆らっちゃいけないんだぞ！  
逆らつたら家を焼かれちまうのに！村の税金だつて増やされちまう  
のに…！

おれらは父さんや母さんたちと引きはがされたのよ…！…！

おれはチビ助をにらんだ。思いつきりー！

だつて本当に、そいつのせいでここにいる貴族が怒つたら？

おんなじ平民つてだけでおれたちまで殺されたら？

ふざけんな…！…！

「それで？ボクたちつてなんかのテストでもつけるわけ？  
それとも、そのブロワ執事長だつて？彼に魔力でもぶつけてみ  
ればいいの？」

な、何言つてんだよあの子…？

「え…そんな」としたらあの人氣絶しちゃつよ?  
危ないことしたらダメつておじいちゃん言つてたよ…」

は？

き、氣絶？！

ちゅつと魔術の素質があるから調子のいいてんのか？

こいつまで来る間に、貴族の召使から何も聞いてないってのか？

言葉一つで、村を燃やしちまつくなヤツら相手に、あの子もチビ

助も何言つてんだよ？！

「それはおチビちゃんにあつてボクにじやないからね。

おじいちゃんボクには思つ存分に殺ヤれつて言つてくれたし？」

「ええ…オーマ田立たないようになつて僕に言つたくせに

「おチビちゃんにね。だつてそうでしょ？

おチビちゃんつて魔術が何たるかを知らないんだから。それで？

執事のおじさん」「

なんだ…あの子はなに言つてんだ…？

そんなこと言つたら、逆らつたら、おれたけは殺され

「彼に対持するのでないなら、その壁で幻術張つてる方をボクは殺ヤればいいのかな？」

おれの方を　　おれがいる壁を田を細めて見てきた。

「おまれてる？　誰を、おれを？」

何で？　壁に幻術使つてゐるヤツがいるから、じゃあなんでも口

なんだ？

後ろにいるのか？　ほんとうに壁際にいるのか、おれまでにち  
まれてないか？！

「あいつの壁にいるの？僕は男の子がいるよ！」しか見えないけど  
……」

「ふふ。見えなくていいよ。知る必要なんてないんだから。そこの  
……」

可愛らしきあの子が笑う

おれに向けて、やわらぐ弧を描いていく口元で。

「ねつせんのキス。邪魔だから　　」

「キス」と殺つていいかな。別にいいよね。

「つーーーーー？」

…だってキミ睨んできたんだし。

ゆめこ

ひづり

連れてこられた農村の子供

第一十一話（後書き）

領されまあでも「うひょ」と一と二つた感じです……

「あの子の子飼か…まったく、なかなかにじびつして 優秀な者  
シハイン

を連れてきたようだな」

くぐもつた声が聞こえたと思つたら、グニャリと壁が歪んでそこから人が出できた！

オーマの言つた通りだった。なんで分つたのかな？

「我が主!…?」

「お褒めに預かり光栄です、ウルト様」

「お咎前をお聞かせ願えるかな、リトル・レディ」

苦しくないのかなあつて思えるほど、服を重ね着してて、キラキラ光る石とかもいっぱいついてた。

あれつて輝石かなあ？

あんなに『ご』ていつぱいつけてる人が領主さまなんだ…おじいちやんよりもおじこちやんに見える。

そのせいなのかな？

オーマは女の子じゃなくて僕と同じ男の子なのに…領主をまつて実は目が悪いみたい。

そう思つたら領主さまはオーマに向かつて手を出した。  
なんだろう、何か欲しいのかな？

「…シエリー」

「…」

「？」

オーマ？

オーマは笑いながら、でも領主さまの手は空中で止まつたままで、  
ちょっと顔がひくついてる。

二人を見比べて、でもどっちも動かなくて…  
しばらくじつとしてたら、オーマの方がやれやれって首を振つたの。

「本当はね、大人しくして…ようと思つたんだけど…『気が變っちゃつた』

「…『気が変わつたとは？』

『キミには』『彼』を飼い馴らすほどの実力はないでしょおがらう。

『彼』の行動原理は『暇つぶし』や『面白そうだから』なんでもつともらしこのが理由じゃない。

同胞からは異端者と呼ばれる事があるんだ。人間達には『彼』の行動がなんとなく理解できるだろうけど

「つ」

同胞？異端者？

彼って誰のこと？さつき浮んでいたショリーって人のことなの？ぐるぐるする。何を言つてるとか分らないよ…

「本当に恐ろしい程優秀だ。是非とも私の推薦で王都の魔術学院へ通わないかね？」

「ねえ、教えてあげたら？少なくとも知り合いなんでしょう？」

「ねえねえ。さつきから誰と話してるの？」

僕が思い切つて聞いてみると、オーマはひょいと困った風に笑つた。そんな顔されても僕だって気になるよ。

「おチビちゃん。ゼロムからなんか言われてたよね。アレこの人に言つてくれない？」

「領主さま？でも僕たちひどい事をされてないよ？」

「いいから、いいから」

「えーっと……『ファイヨーダの落口』？」

「……なつ……？」

領主をまだけじやなくて執事のおじさんとお部屋の真ん中にいたおじさんも驚いてた。

あれ……この人たちってゼロムの……つづき。ケルトさんの知り合いのなかな？

僕が首をかしげてるとオーマはクスクス笑つてた。

「お……僕へんなこと言つてないの！」

「かのじよ<sup>ファイヨーダの落口</sup>が死んだ日

どうしてきみが知つているの？」

真白なふかぶかのローブをすっぽりとかぶつた小さな子が領主さまの後ろから出てきた。

僕と同じ位の背かな？あ、でも、オーマに似てる気がする。

静かな声。

森がざわざわした時みたい 怒ってるわけじゃないと思つ。

でもなんだか…ぽつかり穴があいたような、そんな声。

「えっとね、教えてもらつたの。きみもケルトさんのこと知つてゐるの？」

「……」

ゼロムの友達のケルトさん。でももういない人。

そんなことを思つてたら、領主さまと僕とオーマを連れてきたしつじのおじさんがびつくつしてた。

「ケルト…ケルト＝エンゼリカ　？」

「う、うん。昔、H都にいたって言つてたから…」

「今はどこにいるの？」

「えーっと…」

ぽつかりと六があいだよつた声で、僕と同じ位の背の子は問い合わせてくる。

ケルトさんは会えないけどゼロムと一緒にいる…でいいんだよね？  
でもでも、ゼロムは魔術師の人と、あまり関わりたくないって言つてたし…

ケルトさんの思い出で、いい思い出が少なくて、ゼロムも魔術師の人好きじゃないって言つてたし…

「キミの質問に答えてもいいけど

ただでは、ねえ？」

「え？え？」

「どうして、きみがいるの？」

「ふふ。それはボクの勝手でしょ」

「あの、さ…その。ケルトさんは多分もう会えないよ？」

「 どうして？ かれはよくてウソをつかなかつた。

「 かれはまくと約束をした。だから かれは約束をやぶること  
をしない」

ゼロムがケルトさんから力をもらつて、でもその時にケルトさんの全部をもらつて…

だからゼロムの中にケルトさんが居て、それで余つことができなくてこんな感じで言えばいいのかな？

「 もういい…やめなさい…」

「 わ

領主さまが大声を出す。

周りに居る子供たちもビクつてなつて、しつじのおじさんも怖がつてて、僕はびっくりして声出しちゃつた。

「 ねえ シエリー？ よく考えて、いらっしゃ。

語り継がれる物語の主に、囚われてしまつたら、いったい誰が助けてくれるといつて？」

優しい声でオーマが言つ。  
僕が知つてゐる優しいオーマの声とはすこし違つてて  
でもやつぱり優しいはずの声で…初めて見た気がする、こんなオー  
マを。

「…語り継がれる 物語の夜の一族  
どうして…どうして？ かれは、かれは人間で、かれは魔術  
師で、かれは…」

「その先を知りたいならボクと取引しようか。  
出れるでしょう？あ、その間おチビちゃんに傷一つでもついたら  
…ねえ？」

白くて小さな子はしづらしくしてからりと頷いた。  
とてとてオーマの方に歩いてくる。でも僕の横に来た時にぴたりと  
止まつた。

「ケルトぼくのことを見たの？」

「え？」

「会えないと言つた。ケルトがぼくをキライになつたから会えない  
と言つたの？」

「え、え？そ、そう言う意味じゃなくてね。ケルトさん、友達に力を全部あげちゃつたから会えないって」

「ちからをぜんぶあげた？」  
「ぼくにはくれなかつたのに…きみの言ひ方モダチには身を捧げた  
たの？」せんぶ、わたしたの？」

「う？え？」

「ぼくには約束しかくれなかつたのに  
？」  
「するじよ

「その、シヒリーはケルトさんと同じ魔術師の人で仲が良かつたの？」

「ぼくは魔術師じゃなくて、悪魔だよ。シェリルルシエ＝シヒリー  
＝シヒルスサー＝キス。

ほかのヒトからは手白香シェルスサー＝キスと呼ばれているし、同胞からは苛烈シエリの悪魔と呼ばれている。

だからきみは、ぼくをシェルスサー＝キスと呼ぶんだ。シヒリーは同胞かれが呼ぶんだ。

ぼくをシェリルルシエと呼んでいいのはケルトたちだけ。ケルトとツハインとフィヨーダだけだ」

「シヒ、リル…ス?」

「ちがう。シェルスサー キスだ。きみは一度で言つたことをおぼえられないの?」

「え、あ、『』、『めんね…』」

僕って長い名前とか覚えずらくて…初めて会った人とかは特にそういうみたい。

気を付けてるんだけど…うん。大人になるまでは頑張ってなおすう。

「ちょっとシヒリー! ボクのおチビちゃんに酷いこと言わないでくれる?

バカな子ほど可愛いって名前をキミ知らないワケ? だった

ら信じらんないんだけど…」

「この子バカなんだ きみはしばらく会わないうちに性格が変わってしまったね。

すくなくともぼくらが出会ったころから考へると…ほかの同胞の失笑をかうほど変わっている

「失礼な。もういいよ。ちょっとこいつ来て…  
ボクはね、キミと取引して、さつさと帰りたいの…」

「魔術師の選定をしなくてはいけない」

「そんなの適当でいいよー魔力持つてそうな力モ…じゃなかつた、子を見繕えばいいでしょ…」

「じゃあ…あのバカな子と」

「バカって言わない!」

「ちびと…………きみにこいつまれて怯えてるその子」

「おチビちゃんはボクと一緒に村に帰るからダメ。他のにして!  
っていうか、キミとおチビちゃん背が変わらないじゃない。違和感ありますわ」

「そんなことない。ぼくのほうが大きい…左から二番めの子。ほかはダメ。やくたたず無能者。

Hグアーゼン。ぼくは同胞かれと話があるから席をはずす。そのちびは丁重に扱つて。

でなければツハイン以外の安全は保証はしない。同胞かれはぼくらの中でも一等ぬきでござる」

「な、それは、どうこう…っシエルスサー キス?!

うん…ほんと、オーマの愛情表現つて分つてるの。  
でもちよつと、もうちょっと違う時に言つて欲しいとか思つ時があ  
るの。

領主さまが何か言つ前に、一人はふらりと外に行つちゃった。

シェルス？の言つてた同胞つて、オーマのことだよね。

同胞つて仲間つて意味だよね、確か…じゃあオーマ同じアクマの人なのがな？

「行つちやつた…けつきょくフィヨーダの落日つてどういづ意味だつたんだろう？」

「「は？！」」

連れてこられた子供以外の人たちが僕を見てきた。  
ちょっとこわいなとか思いつつ、でも僕だって言いたい事が一つあるんだ…

絶対にシェルスより僕の方が背がおつきいよー

## 第一十四話

しつじりとした茶色のお部屋。  
ソファもテーブルも茶色や落ち着いた赤い色の物ばかり。  
貴族の人のお部屋つてもつとじてしてると思つたのに、そうじ  
やなかつたみたい。

「ほほほほほ。

カップにお茶を注ぐ音が部屋に響く。

ほわあん。

湯気が出てほんわりと部屋に広がっていく。  
風と、部屋から見えるお庭の池に住んでる魚が時々飛び跳ねる音だ  
け。

れれ…。

しつじのおじさんが僕の目の前に座つてゐ人と僕に、お茶の入った  
カップを置いてく。  
なんとなくゼロムと似てると思ったの。  
ゼロムもしつじのおじさんみたいに、音を立てずに物を置いたり、  
いつの間にか現れたり…

「じゅり、まつちやん」

「あ、えっと。ありがと、ついでこまく」

ほんと…何でこんな事になっちゃったんだろう？

僕はオーマと一緒に領主さまのところに来て、ただ魔術師の素質がどうとかで

終わったらのんびり町を観光してから帰るはずだったのに…

初めてポリメシアから外に出てわくわくしてたのに、今はわくわくよりもそわそわしてる。

田の前に置かれたカップを両手で持つてじっとお茶をのぞいてみた。

オーマ、早く帰つてこないかな。

はあ。

「気に入りませんか？」

「う、え？」

「難しそうな表情をしていたのですから、口に合わないのかと…<sup>かお</sup>

他の物をお願いします

「かしこまりましたツハイン様」

「だ、大丈夫だよー僕このお茶、好きだと思つーーー。」

赤みの強い金色の髪をエルオーネみたいに緩く背中でくくつてる男の人。

多分ゼロムよりも年上だと思つな…

ツハインさまって呼ばれた人に、僕は急いで返事をする。  
だつてお茶でも捨てちゃうのはもつたいたいから。  
だからいつきにカップに入つてたお茶を飲んだんだ。

「う？」

ちょっと熱くて、喉がひりひりしちゃつたけど…うん。コレあんまりおいしくないや。

ゼロムが入れてくれるお茶の方がいいな。エルオーネが作ってくれる方が全然おいしいし。

「驚いたな…セトの言つていた事が本当だつたとは

「セト?」

「彼です。わたしの専属執事なんですよ

「え、このしつじのねじねこ……ヤトおじねこへ。」

「ふふ。 まさか本当に猛毒草ジルヴァーナが平氣とは……どのような生活をしているので？」

あのケルト＝Honゼリカ殿も訪れたのでしょうか、其れ程までにボリメシアとは聖域なのですか？」

「？」

「難しい言葉は使っていないと思いますが……何か分からなかつた言葉がありましたか？」

「えつと……言葉って言つてみんながら知つてる人なの？」

あとセーイキつてどう意味なのかなあって。

僕たちはシャシャイの世話をしたり、ミルクをとなりの村に持つていつたり  
あとね。年に一度だけお祭りしたりするんだ。だからヘンなこととかはしてないけど……」

「あなたは何も知らないというのですか？」

『フイヨーダの落田』などと揶揄しておきながら、何も知らないと、そりあつおつむりか」

し、知らないモノは知らないんだもん！  
つて言えたらいいんだけど、なんかそんなことを言つたら怒られそ

うだなあ…

だって、青と黄色が混じったような色の目がスーって細くなつたんだよ。

「あの、」

「ところで、先ほどの少女はいつたい何者ですか。」

シェリルルシェが随分と警戒していましたが、彼女は魔術師なのですか？」

「…オーマは僕と同じ男の子だよ。シェ里斯とオーマは同じなんだと思うなあ。」

前に会つたつて言つてたし、ちつちつ頃に遊んだことがあるんじゃないかな

「同じ 同属おなじですか…少女と見紛う姿でしたね。  
そして魔力量くらいもぢすらも自在に操れる…少なくとも人間に擬態出来る  
だけの化け物ですか」

「？」

「失礼 少々用事が出来たので、わたしはこれで退室させていただきます。」

セト。シェリルルシェが戻るまで彼に付いていてください。けして父上の傍に近づけぬように」

「承知いたしましたツハイン様」

そつぱり、ツハインさまはお部屋を出でつた。

やつぱり、なんだか怒つてた…？

「セトおじさん。へりこもちつてなあに？」

連れてきた時と変わらず、辺境の田舎村の子供は憶す事なく私に問い合わせてくる。

自分がどのような状況に置かれているのか理解していないのか？

否。理解を示していくうなのか。痛む頭を振りつつ、少年と視線を合わせる。

私は態度を改めた。

エベノス領領主であるウルト＝エヴァーゼン様が認めた。認めざるおえなかつた。

例えそれが、手白香シェルスサー・キスからの脅迫紛いの言葉を受けたモノだったとしても。

そして我が主が認めた　　ツハイン様専用の客室へ招いた少年だ。

「…位持ちとはそのままの意味です。精靈にも階級があるよつに彼ら悪魔にも階級があります。

ばつちやまがオーマと呼ばれていた少女・少年も、中位以上の位を持つていることじょづ。

そうでなければ、ああも完璧に人間と見紛う姿に擬態出来るとは思えません。私も見抜けませんでしたし」

「皇位精靈みたいな？」

「は…ああ、ええ。」

何故、フア・ムート皇位精靈が引き合いに出される？！

知識が殆ど無いといふのに、たまに突拍子もない事を言い出す少年だ。

いやあの悪魔が少年に対し知識を与えているのかもしぬない。

苛烈なる悪魔の異名を持ちつつも、同じ悪魔からは異端と呼ばれ、人間の傍に存在あろうとする。

悪魔的な思考を持たず、人間的な行動を起こす異端者。

人間に寛容な悪魔。人間側に着いた悪魔。人は彼の悪魔を手白香ショルスサー・キスと呼んだ。

憶測で「我が主であるツハイン様に」報告申し上げるのは遺憾だが、シェルスサー・キス手白香ショルスサー・キスが警戒した存在だ。

攻撃される可能性も考慮して対策を立てるべきなのかもしぬない。

「僕とオーマはお家帰れる？ひどい事されたるの？」

「はい、必ず。危害を加えるなど、我が主は望んでおりませざ

そつ、わざわざ敵 しかも悪魔だ！ を増やそうなどだれ  
が思うか。

しかし悪魔か…いや、待てよ…この少年はあの悪魔と契約している  
のか？

もしさうなれば、しかしどうやって聞き出す？ いや、案外あ  
つさつと契約の印を見せるかも知れんが…

「ツハインさまはひどい事しないんだつたら、領主さまの方は？」  
「は？」

「セトおじさんの『わが主』がツハインさまなんでしょう？  
じゃあ領主さまのほうは僕とオーマをお家に返してくれないの？」

それは…

確かに、あのウルト＝Hヴァーゼンがこんな極上の実験体を逃がす  
とは思えない。

しかしそれ以上に手白香の機嫌を損ねることはないだろう。

以前、ツハイン様に危害を加えたウルト様の第一夫人サルヴィア様を、目の前で解体されてからは特に気を使っている。もっともウルト様がケルト＝エンゼリカの友人と認められているから今まで無事だったのだが……

「ケルト＝エンゼリカ様の下に帰られるのですよね？ そうならば邪魔はされないかと……」

「んん？ じゃあ平氣なの、かな……？」

首を傾げつつ、新たに入れたお茶のカップに口を付ける。

平凡な顔立ち、どこにでもいそうな雰囲気の少年。

実際、お茶をとる動作に気品など感じられない。しかし不思議な事に、不快を感じさせる動作でもない。

「あ、」

少年が驚いた声を上げる。その視線をたどると、窓際に固定されていた。  
そして、そこから悪魔＝匹が姿を現したのだ。

「や、おチビちゃん。遅くなつて」めんね。ショリーつてば我儘ばかり言つてくるからわあ」

「ぼくはわがままな匕言つてはいけない。きみが言つた」とはいつぱな詐欺だ。

「いけない」とはいけないと知るべきだ。人間の世界に交じるのならなおのことやうすべきだ

「あー、ヤダヤダ。だからキミは異端者はぐれものって言われるんだよ。

さて、おチビちゃん。わざわざ帰らつか。ボクたちは王都へは行かないんだし」

「もつシエリスとのお話いいの? あ、後ね。ツハインをまは帰つていひつて言つかもしれないけど、領主はぐくみさまはどうか判らないつて」

「平氣だよ」

「もんだけない。エヴァーゼンが欲しいのは魔力保有者であつて、魔術師候補ではないから。

だいたい、ちびを選んでもかれが付いてくるならば、かえつてマイナスなことにしかならない」

「へ?」

「ちょっとシエリル。それどういう意味なワケえ

「そのままの意味だ。エヴァーゼンが欲しいのは実験体。でもつまくいってないようだつたけれど。

はんたいに、ツハインが望むのは平民出の魔術師。ツハインもそ

うだから。じぶんとおなじ仲間を創りたがっていた

「魔術師つて魔力のある人がなれるんじゃないの？」

「せいしきな証がないと魔術師となのはいけない。この国ではそうだった」

「この国では？え？じゃあ他の国では違うの？」

「アーズカルド神都はお金を積めば大多数は魔術師とか導師とか神官になれるよ。ま、今この場では関係ないかもしれないけど……そうそう。後着けて来たらサクッと殺つちゃうからね」

少年に対し、悪魔は軽い口アーズカルドぶりで魔術師の事を話す。よりもよつて引き合いにアーズカルド神都を出すとは…少年の知識はやはりあの悪魔からのものようだ。

そして悪魔は私に対し警告を発した。

このまま見逃せ、でなければ死を覚悟しろ

と

鳩尾を突かれたような感覚がした。

ああ、恐怖したのか。そんなことを考えてしまった。

悪魔を前に、手白香シェルスサークス以外の悪魔を前に、私は随分と神経が岡太くなつたものだ。

ふと意識を飛ばしていれば、手白香シェルスサークスは続けるように言った。

「それこそもんじゃない。ツハインはそんなことをしない。  
エヴァーゼンはするかもしれないけれど、かれがどれだけ痛手を  
おおいつと、ぼくが動く」ことはない」

それはつまり、ウルト様を切り捨てるといつことか？！

ウルト＝エヴァーゼンではなく、ツハイン様のみを優先するといつ  
こなのが！！

コレは、これは本当に なんと素晴らしい結果になつた事か！

！－！

「シヒリス？」

「気にしなくていいよおチビちゃん。シヒリーは騙されて怒つてい  
るだけだから！」

くすくす 読心術みよじゅつをしなかつたキミが悪いんだよシヒリー。  
ソレは悪い事だからしてはいけない、だからコレを使うのはやめ  
ようなんて考えなければ騙されなかつたのにね」

「かのじょ フィヨーダとしたセコイの約束だった。

約束はまるものだ。どんな結果になつても、破つてはいけない  
…いけないんだ」

初めて見た。

手白香シェルスザーキスが、あくまでも人間のような行動をとり続けるとは…

シェルスサー<sup>キス</sup>  
手白香にとつて約束とは何よりも掛け替えのないモノだとツハイン

様はおつしゃつていたか。

其れゆえにアレはここに留まり、今もツハイン様だけでなくウルト  
＝エヴァーゼンにも協力していた。

しかしそれが破られた。否　　あの悪魔が現実を突きつけたのだ  
ろう。

そしてこれが…今の現状につながつている、と

「大好きな人との大事な約束だから守つてるんだね。シェリスはえ  
らいね」

「…………ちびになでられてもうれしくない。ぼくをなでて  
いいのはケルトだけなのに」

「もお。絶対に僕の方が背がおつきによーほらーほらつーーー」

「ぼくのぼうが、ながく生きている。ちびは、だからちびなんだ」「だからって何？！絶対に僕の方がおつきいー！」

「ちびだ。幼子だ。<sup>ちび</sup>ひ弱だ。<sup>ちび</sup>儂げだ」

「~~~~~つー！」

「ちょっと、生意氣だよショリー。軽く消し飛ぶ？それとも塵に還

「…」

「どうしてきみが怒るんだ？」

「オーマー？」

手白香（シェルスサー・キス）に対し殺意を向ける魔魔。

その殺意に気づかぬ少年、そして何故殺意を向けられるのかを理解していらない手白香（シェルスサー・キス）。

あの少年は魔魔を手玉に取つてゐる……いや、何と言ひつか……ああ……

ひとまず、我が主の身は手白香（シェルスサー・キス）がいる限り安全なままだ。

その後、魔魔と少年はエヴァーゼン邸を後にする。

何処からか呼び出した魔魔に乗り、風の精靈を味方につけ駆け去つて行つた。

何故、敵対関係にある魔魔と精靈を同時に使役しているのか？  
聞きたいことは多々あれど、それでも知らなくていい事もあるのだ  
うつな、などと私は思つてしまつた。

ツハイン＝リラ専属執事セト＝ルビイナ

うん？

僕の若い頃かい？それはまあ…やんちゃだつたけど。

え？

ダリアとの馴れ初め～。まだまだお子様のお前が聞くもの  
じゃないよ。

いつたい誰に似てそんなに好奇心が旺盛になつたんだい？  
ああ、悪い意味ではないから、そう落ち込むのではないよ。

なに？

ゼロムとかゼロムと、ゼロムとゼロムとゼロムとか  
が聞きたがつてるつて？

ゼロムだけしかいないじゃないか、まったく。

ほら、そんなどこかに居ないで　　オーマやリセもいひへお一  
で。

僕とダリア　　おばあちゃんの出会いを教えてあげよ。

あれはうだる様な暑い日のことだつたんだ。

潮風がとても気持ちい時間帯ですね。僕はふと迷つたんだよ。

え？潮風つてなにかつて？

ああ、そうか。お前はポリメシアから外に出たことないんだっけか。  
んん？

ははは。この間のHベノス領主のところに行つたことなんて忘  
れてしまいなさい。

あれは覚えていなくていい事だろ？  
で、潮風だつたね。これは海のことだよ。

そう。大きな、それでいてとても温かく、真逆にとても冷た  
い、そんな大きな水たまりだ！

こりこり。笑うんじゃないよオーマ。

僕は間違つたこと言つてないだろ？

ヨルンまで呆れた顔をしないでおくれ。  
海つてなあにつて聞かれたらそんな感じに答えるもんだろ？

塩辛いとか、海水は目に入ると痛いとか、飲めないとか…

とりあえず森の彼方ヘルデー・エルグの方にある湖よりも、もっと大きなものだし  
水底なんて見えないくらい深くて暗くて      でも太陽があると透  
き通つてキラキラ明るいんだ。

ん…？

ゼロムー！孫達が、孫達の視線がイタイ！！

「僕の話し方はそんなにヘンなのかい？」

「知らんがな。さつさと先を話さんかい、儂は明日の仕込みがあるんじゃから」

「はいはい。とりあえず僕はポリメシアの出身じゃないんだよ。えーっと何処だったかな？ああ、そうそう。ナーグが故郷なんだ」

おや？

なんでエルオーネが驚くんだ。お前は水守とのハーフだろ？  
僕から水 海神の氣配が感じ取れているはずだよ。  
勿論、僕の孫であるこの子だって まあそれを抜きにしてもお  
前達は仲がいいけれどね。

「ねえおじいちゃん。ナーグって海神の長ナーグソレイユを祭る聖域ラウルシールの門番街のこ  
と？」

「そう オーマは物知りだね。普通は『ナーグ』って代名詞で  
は判らないモノなのだが…  
さすがに長く生きていると知識量が半端ではなくなりてくるのか  
い？」

まあ『ナーグ』と呼ぶのはその街出身の者だけで他国では基本的  
にソレイユと言っていたかな」

まあ今回はナーグと呼ぶことに…ともかく僕の故郷はナーグな  
んだ。  
海神わたみの長わたみを祭る古の海の民が中心となつて  
いる街でね。

ん？

海の民が何かつて？神々の末裔とされている一族の一いつを。  
他にも空の民 エルオーネのように有翼人などの中に居るだろ  
うね。

地上には森の民のエルフが、土の精靈である輪樹チーラを祭つてゐるねえ：

まあ神代の時代の名残とも思つていればいいだろ？

「僕はちょっと有名な家の長男だつたんだよ。その所為で若い頃、  
それはそれは大変で…」

いつの間にか許嫁が6人とか、婚約者が12人とか…14を迎える時にはその倍近くになつて

それでついに堪忍袋の緒がグチャアと潰れてしまつたんだよ。いやああの頃は本当に若かったなあ」

もうあれだね。アレ。

女性恐怖症にならなかつた僕を褒めて欲しくらいだよ。

ともかく、家の方で早く子供作れーとか。家督を継げーとか。日々押し付けられてね。

ふらりと近くの海を眺めつつ潮風にあたつてたら

ねえ？

「判る。汝の言いたい事、確かにわかるぞグレーーン…！」

「ありがとう辽セ。そうだよね、雁字搦めにされるなんてやつてられないよね！」

「そりだよなー！そり思ひものだよなー？もつ全部捨てても身軽になりたくなるものだよなー！」

「そりそりーだから僕は出家したんだよー！！ 家出とも言い換えられるけどー！」

まあ十代のガキが生き急いだとこりで高が知れるけど、僕って結構器用な子供でね？

商人に交じつてナーグを出て、いくつも国を回りつつ追手の目を搔い潜り

このポリメシアにたどり着いたわけだよ。もつ心身共に疲れててね…

「そんな時に僕はダリアに出会ったんだ。

彼女は疲れ切つてた僕に視線を合わせてきたんだ。旅人とか滅多に来ない村だし

珍しかつたのもあるんだけどね…彼女の最初の一言がなければ、きっと僕はここに居なかつただろうね」

旅人さん、旅人さん！此処は自殺の名所ではないんです！自殺なら余所でやつてください！！

「ちよつ?ー?ー?ー?ー?ー?」

「おじいちゃん？」

「なんで自殺なんて言葉で心が動かされんのさ?」

「ああ、成る程。ここまで図太くないと海神の長を祭る聖域の門番街ではやつてけなかつたのかもな…」

「精魂共に疲れ果てていたのだ。それ位鬼気迫るモノが、ダリアには感じられたのだろう。納得だ」

「何故にお前はそこまでポジティブにグレーンの言葉をとれるんだ？」

「…ヨルン。さんざん有名人扱いされたお前ならば僕の気持くらい判るだろう?

「オーマ。お前は何を驚いているんだ? ダリアの反応はなつきつけ言つて新鮮だったんだよ。

エルオーネ。『ナーグ』の民はそうでもないが海の民は特にそうでなくてはねえ……

だつて各国だけ

アーズカルド

だって各国だけでなく、**神都**とも話が通る場所だから。

リセ 君と僕は境遇が似ている。ただ君と違つて僕には代り  
が居なかつたつてだけだ。

ゼロム。僕は愛に生きるってダリアに会つたあの瞬間に悟つたんだ！お前にだつて悟つた瞬間はあつたんだろう？

「ニヤあ、サア…無きにしてや非ずと云ひが…ああ  
ともか」

「ニヤ、ゼロムの恋話とかじりでやっこし。ねじこかやん、そ」

「海の民」  
神々の末裔でとされる一族の一つか、なんか納得だ」

「ハニー。自分の世界に入らないでオレにもかまつて……って、だんだん力オスつてきたな」

「ねえねえ、おじいちゃん！おばあちゃんをモノにするのに村の人を三十人切りしたって本当なの？」

いつたい何処でって  
それはポリメシアでは当たり前に知つてることだったっけ。

そう。

あれは僕がポリメシアに流れついてひと月たった頃かな?  
正式にお付き合い 勿論、結婚を前提にね を申し込んだ時だよ。

ダリアの「両親に物凄く反対されてしまつてねえ…

認めてもらひ今まで何度も頭を下げに行つたもんだ。  
そしてとうとう彼女の両親が条件を出してきたんだよ。

「条件? おばあちゃんはおじこちゃんのこと好きだから結婚したんじゃないの?」

「うん。ダリアは僕の事を愛してくれているよ。今もね。  
でもやつぱり「両親のことも大切だから思い切つた行動はできなかつたんだ。

お前だって、知らない旅人にエルオーネやミルギスが連れていかれたら嫌だと思うだろ?~」

「うん」

「僕はもともとポリメシアにずっと住むつもりだから、何とか納得してもらえたけど

それとこれとはまた別モノって感じでね、ほら、うちの子は可愛いんだからまだ一緒にいたいのよ  
的な」

「んん？」

「結婚してしまつと、家を新しく建てなければならぬんだ」

「あ、別々に住むんだ。ちよつとそれはめぞびしいね」

「わづひ。寂しいから、だからダリアのじ両親は僕に条件を出したんだ。

まず、山で悪さしている狼を追い出せつて言われたんだ。  
その次が、村の男、特にダリアのことが好きな男共を驅逐たおせよーつて。

最後に、ダリアが着る花嫁衣装 まあレースをちやんと用意  
しろつてね…ま、完璧に応えきつたけどー」

「ふへえ…」

「血は争えないつて言つのか…あの子もそうだつた。ただあの子は  
少し不器用だつたからねえ。

いづれ、お前も大切な誰かが、愛しい誰かが、なにものにも  
も代え難い誰かが、きつとできるんだろうね」

「？」

「僕は、本当に 多くを切り捨ててきた、救い出すことができ  
なかつた…

けれど、今ここにお前達が、お前がいてくれて本当に嬉しいんだ。  
ダリアがいてお前がいて

あの子は亡くなつてしまつたけれど、あの子は遠くに行つてしま

つたけれど……それでも僕は幸せだ

「おじいちゃん」

「ん？」

「僕もす」「へね、皆といれてね、すつ」「へ嬉しくて、幸せだよー。」

「ああ、そうだね。今は本当に

「

ああ、そうだ。お前達、そろそろ戻つておいで。  
まだまだお祭りは始まつたばかりだ。今度はどんな話をしようか?

んん?

そうだねえ それじゃあ、昔流行つた怖い話でも教えてあげよう…つて、リセ、どこへ行くんだい?

え?用事が出来た?

そうなのかい。仕方ない オーマ、ゼロム。全力で押さえつけ  
ておくれ。

何でこの人選かつて?

だって悪魔と夜の一族が元魔王を抑えるのは適任だろう。

非力な僕じゃとてもとも、敵いはしないよ。  
混血児ましてや華人なんて無理だろう?

エルオーネ

ミルギス

ミルンなんて全力出した伝説の一族にはもうがに勝てない。

ゼロム

あれ？

僕の可愛い孫はどこのへ行つたんだい？

「！」あんね皆。

僕、皆と一緒に居るのは嬉しいし幸せだけど、おじこかやさんの口  
ワイ話だけは本当にムリなの」

「そんな」と言わずに来なれ。敵前逃亡はダメだらうへ。」

なかまはずれ

「……？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3344f/>

---

ダン=ダンジール

2010年10月10日13時59分発行